

長峰さんは彼氏持ち

もぬ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

小学生のときいじめっ子だった性格の悪いTS娘が、外面だけ完璧美少女になって元の高校に戻ってきたら、あまりにも男にモテすぎてウザくなってきたので、昔いじめていた男子に偽装彼氏になれやと命令するお話です。

※小説家になろうにも投稿してみます。

目次

長峰さんは彼氏持ち	1
体育祭、バレンタインデー、ホワイトデー、学園祭	42
四月バカ、夏祭り	79
大学① 近すぎる家	113
大学② お酒	134
大学③ クリスマス	153
大人になってしまったふたり	168
長峰さんは…	193
後から思いついた話	213
席替え（高2）	213
熱を出した日（高校）	228
熱を出した日（大学）	237
相合傘と彼シャツ（高校）	253
肝試し（高3ぐらい）	275
真・卒業式（高校の）	302
彼シャツ（最終回後）	316
ファーストキスはいつだったのか	339
夏休み水着回と夏休み水着回	359

長峰さんは彼氏持ち

長峰^{ナガミネ} 悠希^{ユウキ}さん、というのは、この学校でおそらく一番モテている女生徒のことだ。

いま、僕は、放課後の校舎裏・倉庫の影に待機しているのだが。彼女もすぐそこにいるので、今一度その容姿をのぞき見してみよう。

長くてつやのある髪、同じ日本人とは思えない抜群に整った目鼻立ち。これだけでもアイドル級だ。加えて、スカートから伸びる長く健康そうな脚、それに伴うスタイルのいい長身。そしてとどめに、男子ならどうしても目を引かれてしまう暴力的に大きい胸が、制服でドーム型テントを張っている。

容姿だけを見たとしても、バカみたいにモテる。

ところが彼女はさらに、中身の方も優れているともつぱらの評判だ。文武両道、言動はおしとやかで清楚。仕草に気品があることから、良家のご令嬢であると噂されている。生徒、教師からの信頼も厚く、まるで架空の生徒会長キャラクターのようだ。

客観的な人物評はこんなところだろうか。以上のことから、この女は、人を引き付ける魅力を多分に備えた人間だといえる。

「長峰さん！ 待っててくれたんだ」

「ええ。大切なお話と聞きましたから」

と、今日の告白者が現れたようだ。

彼には申し訳ないが、耳を澄ませ、会話をよく聞く。

緊張した、一生懸命な男子の声がある。内容は……当然、例によって、『それがしと女の子のお付き合いをしてください』というもの。人によって一世一代の言葉は異なるので、おもしろいではある。

が、そろそろ聞き飽きたし、盗み聞きしている罪悪感もあるし、もうこんなことはやめたい。

けれど、それはできないのだ。

「……ありがとう。あなたの気持ち、すごくうれしいです。でも——」

合図があった。僕はひとつ深呼吸し、倉庫の影からのっそりと出ていく。放課後の青春を演じる二人の元へ。

目を丸くする相手の男子生徒を見て心を痛めつつ、なるべく相手を刺激しない態度がかけつつ、長峰さんの隣に立った。

「私、彼氏がいるんです。だから、ごめんなさい」

おことわりの言葉に合わせ、軽く会釈する。

男子生徒は、しばらく呆然としていたものの、やがて現状に頭が追いついたのか、ぶ

るぶると震え始めた。

告白しに来た人が僕を見たときの顔は、2種類ある。悲しみに染まった“負け”の表情と、つらい気持ち“怒り”に変化した表情だ。

後者の人に殴り掛かられたことが一回だけあるので、警戒して体がこわばる。……が。今日の人は、眉尻を下げて切ない表情をした。

一連の場面を見て、かなり胸が痛む。これには慣れない。冷や汗が出るのを感じつつ、流し目でのたりの長峰さんをうかがってみると。

かなりいい顔で笑っていた。みんなに愛想よく振る舞うときより、若干つやつやしている。本心から来る笑顔のようだった。

長峰さんは可愛らしく胸の前で両手を合わせ、相手にさらに言葉をたたみかける。

「いきなりこの人を連れてきてしまつてごめんなさい。私たち、これからデートなので」
「えっ。今日はゲームの発売日——」

「デートなので。ねえ？」

僕の失言を耳にした長峰さんは、笑顔のために細めていた目つきだけを元に戻して、上目遣いでこちらに視線をよこしてきた。周りからはどう見えているかわからないが、これは、こちらにガンを飛ばしている。笑顔の起源は威嚇だという話を思い出した。

「ね。今日はデートですよね」

長峰さんは、さらに相手に仲の良さをアピールするように、腕にしがみついてきた。髪の良い匂いがする。おっぱいがあたっていている。めっちゃやわらかい。

ロボットのよう台詞を返す。

「はい。デートです」

「く、くそおおつ!! お、お、お幸せにいいいい!!」

意を決し愛の告白をしにきたはずが、彼氏との仲をまざまざと見せつけられ、デートという単語を4回聞かされ、彼は脳が破壊されたようだった。

放課後の校舎裏に、ふたりだけが残される。他に人目は全くないようだった。

「……んー。これで50人目ぐらいだったかなあ。彼氏持ちだって知らないのかしら。ペースは減ってきたけれど」

しらじらしい女性言葉を吐き、長峰さんは僕の腕から離れる。

そしてこちらを見上げ、につ、と口の端と眉尻を上げた。端正な顔立ちに、粗野な内面が浮かぶ。

「おー、今日もおつかれ、メガネくん」

「今はコンタクトだけど……」

「あ? メガネくんはメガネくんだろ。口答えすんなー」

「はい」

自分より若干小柄なはずの少女に、ばん、と背中を、わりと強めに叩かれる。少しいやな気持ちになり、僕は背中を丸めた。

これが、彼女の、いや、彼の素の姿である。

「しつかし……見たア？ 彼氏がでてきたときのあいつの顔！ 告られるのはウザいけど、男どものリアクションは面白くてやめられないねえ」

けらけらと笑う姿は、みんなが抱いている完璧女神お嬢様のイメージとは正反対で、ただの性格の悪いゲスのそれであった。

その昔と変わらない仕草に、小学生のときのことを思い出し、僕は少しお腹が痛くなつた。

「さあて。なに、ゲーム買いに行くんだっけ？ おー行こうや、オレに先にやらせろよ。あつお前んち今日親いる？」

家に入り込んできて、人の買ったもので遊んでいくつもりらしい。予定が崩れていく。

……ここまでの会話だけを振り返ると、僕たちは仲の良いカップルに見えなくもない、かもしれない。

けれど本当は違う。こいつは僕のが好きでも何でもないし、僕はこいつのことが苦手だ。

学校一モテる長峰さん。僕は彼女の、男除けのための、うその彼氏をやらされている。

▽

高校に入学してしばらく経ち、そろそろ4月をまたぐ。

あまり同じ中学のやつがいなくて不安だったけれど、この頃はうまくクラスに溶け込み、これからの3年間は波風立てずやれそうな気がしている。

小学生のときみたいに、クラスの目立つやつから、変にいじめられることはない……
といいな。

昼休み。教室。

昼食の総菜パンを口にしながら、ぼうつとしていているふうで、教室をさらっと眺めてみる。

一か月ともなれば、級友たちも新しい学び舎の雰囲気やシステムに慣れていくようで、彼らの個性というものが見えてきた。

例えば、後ろの席の金田くん。最近ある程度仲良くなったのだが、実はオタク趣味なのは意外だった。人当たりはよく、誰かに趣味をからかわれても反発することなく受け流している。この態度は参考になる。

隣の席の八代さん。優しいし顔もかわいい。最初のオリエンテーションで担任にク

ラスメイトとの交流を強制された際、ちよつとしゃべって、好きになった。正直、あわよくば……という目で見ています。

声大きい佐藤くん。今のところ性格は悪くなさそうだが、ああいう目立つタイプの人はどうしても苦手だ。とはいえ、毛嫌いして避けるのは悪手なので、勇気を出してクラスメイトなりの付き合いができたらいいな、と思う。

ああ、そう。目立つタイプ、といえば――、

「長峰さん、一緒にお昼食べない？」

「な、長峰さん！ スマホ持つてるよね。同じ班だし、連絡先をつ」

「悠希ちゃん、数学の宿題教えてえ……」

教室の真ん中の方、人だかりの中心に、ある女生徒の姿がある。

入学から一か月未満という時期で、男女問わず多くの生徒から声をかけられているその人は、長峰悠希さんという。おそらく校内人気者ランキングレースをスタートから独走しているだろう、凡人とは住む次元が違うような女子だ。人気の理由は、その容姿や人となりを見れば明らかだ。

県外から越してきたらしく、同じ中学出身の生徒がいない、というのも、彼女の希少価値をあげているかもしれない。同じ中学のやつがいれば、あー、長峰さんね、くらいの態度でいる場合もあるかもしれないが、いないので、生徒のほとんどがまず彼女に目

を奪われる事態になる。

かくいう僕も、あんな子とクラスメイトになってしまったからには、「お近づきになりたい」「あわよくば」という想いが、長峰さんが視界に入るたびにわいてくる。とはいえ競争率が高すぎるため、僕だけでなく、多くの級友たちはやきもきする日々を送っているはずだ。どうせ自分じゃあな、と今のうちに卑屈になっておいて、長峰さんに恋人ができる日のダメージに備えるのが賢明だろう。

高嶺の花と同じクラスというのは、あまりいいことではないのかもしれない。あんまりあの顔を見すぎると、八代さんの顔が並レベルに見えてくるし。

まとめ。

すごい美人。かわいい。好きになりそう。

以上だ。

……ただ。

この前、クラスメイトの特権として、ふとしたときに目が合ったことがあるんだけど。少し、なんだろう。彼女の目つきや表情に、学校のアイドルと目が合った喜び、以外ものを感じてしまった。そしてそれは、どちらかというとなガティブな気持ちらしかった。

どうしてそんなふうに感じたのかは、わからない。

強いて理由をつけるなら……。小学生の頃、今思えばいじめレベルの悪戯を僕に仕掛けたりしていた、正直苦手だった友達の悠希くんと、名前が同じだからだろうか。

いやまあ、ユウキなんてよく聞く名前だし、さすがにナイーブすぎるか。向こうにも悪い。

総菜パンを食べ終わった。残りの時間は、何をしようか。

そう思っていたとき、教室の空気が変わる。

外からやってきた見慣れない男子生徒——おそらく違うクラスの生徒が、真剣な表情でずかずかと踏み進んでくる。こんな時期だと、他クラスの生徒が入ってくるというのはちよつとした事件で、みんなの注目を買っていた。

彼はまっすぐに、人だかりの方へ、すなわち長峰さんのところへやってきた。そのマジメな雰囲気、昼休みの喧騒が静まる。

「あの、長峰さん。委員会と一緒に来た高杉です」

「こんにちは、高杉さん」

取り巻きのみんながこれから起きることを察し、道を開けてギヤラリーと化す。やがてその高杉くんは、この大勢の前で、勇気ある言葉を口にした。

「初めて見たときから好きです。僕と付き合ってください！」

囁し立てる声が周囲からあがる。僕も、おおう、と、感心した声を出してしまった。男

女がくつつくために必要なのは、こういうことができる度胸なのだなあ、とか思った。級友の男子諸君は、興奮したような、悔しがるような、絶妙な表情をしている。もしかすると僕も似たようなものかもしれない。

高杉何某くんという少年は、僕から見ても、スクールカーズ上位の空気というものを身に纏っている人物だった。教室の外で、たぶん彼のクラスメイトであろう観客たちがニヤニヤとこちらを覗き込んでいることから、なんとなくそれがうかがえる。

運動部の体格で、顔立ちはいい方。女性から見てもどうか知らないが、僕から見てもイケメンだ。多分過去に彼女が2、3人はいたんじゃないか、なんて思った。さわやかな雰囲気だが、入学直後の4月に告白するあたり手が早い。

高杉くんのレベルの高さからくる、告白成功の予感。自身にはまったくチャンスなどないのに、なぜかちくりとした焦燥感をおぼえる。

そして、それを受けた、長峰さんは。

——ちら、と。流し目で、こちらを見た、気がした。

「高杉さんのお気持ち、嬉しいですよ。……でも」

長峰さんはおもむろに席を立ち。そして、にこやかな表情のまま、こちらに向かって歩いてきた。

そして、ぼうっといきさつを見守っていた、僕の目の前に立った。これまでにない近

い距離からじつと見下ろされて、そこでようやく、これが現実の光景であることを思い出し、ぞつとした。

なんだ……？ どうしてこっちにきた？ それに、この目つきって。

長峰さんがあちらへ振り返る。僕と同様に疑問を顔に浮かべているみんなと、高杉くんが見える。

「私、この野原^{ノハラ}くんと付き合っているんです。だから、ごめんなさい」

「えっ」

……何を言っているんだ、この人は？

夢か何かと思い、周囲を見回す。教室中が一様に茫然とした顔でこっちを見ていて、まるで時間が止まってしまったかのようだった。けれど、だんだんとそれが、疑問や、軽蔑、果ては怒りのそれに各々変化していき、僕に向けられる。

わけがわからなくて、この状況を作り出した本人の顔を見上げる。彼女は、いつものように、周囲に優しい笑顔を振りまいたあと……僕を見下ろして、愉快そうに目を細めていた。

悪辣な顔、だと思った。

「すみません、私達もう行きますね。さ、野原くん」

「えっ、ちよつと」

白くて指が長くてきれいな手に、腕を掴まれ、引っ張られる。慌てて立ち上がると、椅子のやかましい音だけが静かな教室に鳴り渡った。

周囲の視線の種類が怖くて、僕はクラスメイトたちを見ないようにして、背中を丸めて長峰さんについていった。

立ち入り禁止の屋上へのドアを、長峰さんは、どうやって入手したのか想像もできない鍵を使い、躊躇なく開けた。

「ほい、と乱暴に、屋上の空間へと投げ込むように、掴まれていた腕が解放される。

「うお、お」

と鳴き声をもらしながら、転びそうになるのをこらえ、振り返る。

「ばたん、とドアを後ろ手に閉めて、彼女は無表情で、そこに立っていた。

「ね、野原くん」

「はっ、はい」

無表情が、スイッチを入れたみたいにな、満面の笑みに切り替わる。

そのまま近づいてくる長峰さん。やがて、人と会話するには近すぎる距離にまで踏み込まれ、顔を覗き込まれる。

「なんじゃこりゃあ。男子憧れの子がこんなに近くにいます。うわ良い匂い。まつげすごい。肌白くてほっぺた赤い。」

「すみません、いきなりこんなこと。順番が前後してしまいましたね」

「え……えええっ！ あの、その」

長峰さんは恥ずかしそうにうつむき、目線を泳がせて言った。

つ、つまり、実は彼女は……？

「そうなんです。私、あなたのこと……。あの、目を、閉じてください」

宝くじで一等を当てたらこうだろうなという、信じられない気持ち。非現実的な幸福への戸惑いで頭が熱をあげている。

長峰さんの顔が徐々に、さらに近づいてきて、顔面の解像度が上がっていった。それに耐えきれなくなり、言葉に従って目をぎゅつと閉じる。

もしかして、もしかするの？ こんなことがありえるの？ うああマジか、あんなか顔の近くになんかある気配。あ、あー！

「うりゃ」

「……い、痛った……」

ぐい、と頬をつねられて。

目を開けると、長峰さんが、教室では見せたことのない目の表情で、笑いをこらえていた。

「ぶふっ。あはは！ ごめーん、学校一かわいい女子に告られると思っちゃった？

あっはは!!」

「うええ……?」

頬をさすりながら、イメージに反したはしたない笑い声をあげる彼女を見る。

……いたずら……どつきり、ってことだろうか。

まあ、そうだよな……。あ、もしかして周りに共犯者が潜んでいて、同じようにあざ笑っているのだろうか。リアクションの動画を取られていたとか?

はあ。まだ残っている長峰さんへのドキドキと、こういうことをされたときのショックが合わさって、心臓が落ち着かない。

でも、長峰さんって、こんなことする人なんだ。そのことが一番ショックかもしれない。こんな、いかにもな、いじめ気質の子みたいなの。

「あっはは、変わらないなア……あー、懐かし」

ひとしきり笑った長峰さんは、目尻に浮かぶものをぬぐって（泣くほど面白かったのか……）、こつちに向き直った。

にやにやと、見たことのない意地の悪い笑みでこちらを眺めている。こつちの言葉を待っているようだった。

「長峰さん、こういう悪戯する人だったんだね」

「ん? あー、まあね。ごめんて」

小首をかしげて両手を合わせ、かわいらしい仕草で、軽い謝罪をしてくる。

悪いと思つてはいない態度。まるで気安い友達のような。

この人のことがわからない。明日から僕は、ドツキリに引つかかった哀れな男子として、クラスの笑いものにもされるのだろうか……。

「もういいでしょ。じゃあ僕、戻ります」

「え。ちよ、ちよいちよい」

さつさと扉に向かおうとすると、何故か、制服の襟を乱暴に掴まれ。ぐえ、と声が出た。

「あれ……なに、わからない？ わたし……んんっ」

同じ年の少女は咳ばらいをして、間をあける。言葉を選んでいような様子を見せ、そして、

「オレだよ、小学校ンときの、ほら。……友達、のさア。悠希ユウキだよ」

ユウキ。小学校の。

オレ。

乱暴な仕草、表情、口調。

ひとり、はつきりと、記憶の中から浮かび上がってくる人物がいる。

「……ユウキ、くん？」

「おう」

「家が近くて、小学校まで一緒だった？」

「そうそう」

「僕をいじめてた、あのユウキくん？」

「はあ!?! ベっ、べっ、べっ、べっにイジメじゃないでしょ、あれぐらい。根性ないこと言わな……
言ってるじゃねーぞ」

顔を赤くして目を泳がせる長峰さん。慌てた口調は、さっきのドツキリの演技とは違
う、素の反応のように感じる。

えっ、でも。

彼女は、そのユウキくんが……自分のことだっていうのか？

「久々に会って、しかも同じクラスになったのに、全然気づかないからさあ。あー、今さ
ら言うのも変だけど、……元気だったか？ メガネくん」

「……………」

たしかに。

たしかに、たしかに、たしかにたしかに。

言われてみれば、のレベルだが、面影はある。ユウキくん美人のお姉さんがいたら
こういう目元だろうな、という感じの。

そして言動。男の子の言葉遣いに、人をいたずらにはめて心底笑える性格。さっきの頬を引つ張るときの、相手の気持ちを考えない力加減のなさ。

こっちはコンタクトレンズにしているのに、メガネくんなんて特定のあだ名はとつきにはつけられない。

じゃあ、本当に……長峰悠希さんは。

いや。まだ折れるんじゃない、僕。

あの憧れの長峰さんがユウキくんだというのを、認めたくなくて、否定できる理由を探す。

「でも、名字が」

「親が再婚した」

「性格が全然……」

「変わってるか？ 普段のキャラのことなら、あれは作ってる」

「……そもそも性別が違くない……？」

「女になる病気知らねーの？ スマホで調べれば。ていうかそれで転校したんだし」

そういえば、ユウキくんは、小学校を卒業する前にいなくなったんだ。たしか理由は、病気の治療の都合とかで……。あと、手術や投薬もなしに身体の構造が思い切り変わる病があり、性別が変わる場合がある、というものも、テレビか本で見たことはあ

る。

理性は、まさかそんな、と否定しようとしている。たとえば、彼女はユウキくんの親類で、彼に成りすまして反応を楽しむという、手の込んだドッキリをしかけている、とか。

でも、あまりにも、言動のエミュレートができすぎている。

それに心が。目の前の女の子の中身が、マジでユウキくんなのだと、理由もなく認めそうになっていた。

「いやー、まさかお前とまた同じクラスなんてな。いつになったら声かけてくるかと思ったら、全然こねーし」

じろ、とにらまれ、身がすくむ。

いや、声かけるわけじゃないでしょ。クラスの高嶺の花だし。

「他の男どもはウザいし、告白とかされるし……中学のときからもう、うんざりなんだよなー」

「それは……ユウキくんが……」

完璧女子すぎるのが悪いのでは。そう思ったが、なんとなく口ごもってしまふ。

「かわいすぎるから悪いってのか？ あ？ 真面目に学生やってるだけだろ。オレだつてこのキャラ疲れるんだぞ」

心を読まれた。

「……で。いいこと考えたんだけどさ」

「うっ」

『いいこと考えたんだけど』。

記憶に深く沈めていたはずのことを、この一瞬で思い出した。この台詞は、ユウキくんが悪いことを考えたときに発するものだ。

すなわち、僕はこのあとひどい目に遭う。思わず胃を押さえた。

「男とくつつくなんてありえないけど、それは堂々とは言いにくいんでね。……そこで！ 『男除け』を立てようと思います。つまり、彼氏役です」

ぴっ、とこちらを指さす長峰さん。ユウキくん。

そのまま、また無遠慮にずかずかと近づいてきて、僕の胸を突いた。そのまま指でぐりぐりとやってくる。うっとうしい。

でも、見た目が憧れの長峰さんなので、うぐぐ。幸と不幸が同時に脳にやってきて、おかしくなりそうだ。

「おや〜？ うれしいのかな。うれしいよねえ、やつぱり。わかるよ。光栄だろお」

ユウキくんは、目を怪しげに細め、にやにや顔を近づけてきた。息がかかるほど距離が近い。

「あと、もうひとつ。気付くのが遅かった罰としてえ……。おまえの人生めちやくちやにしてやる……つてのも、面白いなって思つてさア」

「ちよ……」

可愛い声で、ぶっそうな言葉を吐かれる。

え、どういう意味。高校生になつて、いじめのスケールも洒落にならなくなつているのだろうか。

いったいどんな嫌がらせをされるんだ。僕のまともな高校生活は、ここで終わつてしまふのか。舞い戻つてきたユウキくんの手によつて。

冷や汗が出るのを感じながら、彼女の唇の動きに目を見張る。

「——オレが彼女なんだから、おまえ、もう彼女とかできないだろ。あツはは！ 一生童貞」

えっそれだけ？

なんだ。なんか、ユウキくん、中身成長してなさそうだな。

「じゃ、今日から彼氏彼女つてことで、そこんところよろしくね。放課後また喋ろー」

こちらの返事や意見も聞かず、ユウキくんは屋上の出口に向かつていく。彼、あるいは彼女にとって、僕への提案は頼み事ではなく命令であつて、こちらの反論等はナチユラルに想定していないのだ。そういえばそういうやつだった。

「あつ！　そうそう。……バラすなよ。オレが元男とか、性格が違うとか。誰かに言ったら、ちぎるからな」

こちらの身体はどこかを手でむしるジャスチャーをして、才色兼備の美少女はこちらを脅してきた。

でも、そうしてほしいなら、そもそも……。

彼女が再び踵を返す。背中と、女の子っぽく後ろで手を組んで歩く仕草だけを見ると、ただの機嫌の良い長峰さんにしか見えなかった。

でも、ひとつ気になったので、呼び止める。

「ユウキくん、待って。だったらどうして僕に正体バラしたの？　言われなきや、全然わからないままだったよ」

「どうしてって、そりゃあ」

こちらに顔を向け、何か言おうとして口を開く。

けれどすぐには言葉を出さず。長峰悠希は、何か考えているような間を開けて、「どうでもいいだろ、そんなの」

ふんと鼻を鳴らし、屋上から出ていった。

「……………」

……あつやべつ、閉じ込められる。

僕は急いで、ユウキくんの一、
長峰さんの後を追いかけた。

▽

ゲームショップからの帰り道。いつもうきうきして早足になってしまっただけで、今日は、そうはしなかった。

隣を女の子が歩いているからだ。

通算50人目の告白者を断った帰り道。宣言通り彼女は、僕と一緒にゲームソフトを買いに行つて、そのまま、家路にまでついてきた。傍から見れば、学生の放課後デート、といえなくもない。かもしれない。

「いやあ、ゲーム……テレビゲームかあー。久しぶりだなあ。今の父親は金あるけど、そういうのやらせてくれないんだわ」

ユウキくんは昔から自分の家に誰かを招くことはなく、人の家のゲームや漫画を楽しんでいた。それを思い出す。けれど今の口ぶりからして、女の子になつてからは、その娯楽からも離れてしまつていようだ。

それと、「今の父親」、と言つた。もしかすると、ユウキくんが長峰さんを作り上げたのには、家庭の事情とか関係あるのかもしれない。

まあ、そこまで踏み込むつもりはない。せつかく今は楽しそうな顔をしているんだし。

やがて、家に辿り着く。小学生のとき住んでいた場所からは引越したので、ユウキくんは新鮮そうな顔で扉を眺めていた。

ん。そういえば、偽物の恋人になってから、家に上げるのは初めてだ。

人生で最初に家に案内する彼女が、ユウキくん……。

「ハア」

「あ？ 何」

「いえ、なにも」

ドアの取っ手を引く。鍵は開いていた。たぶん、妹が帰っているな。

「ただいま」

「……おー！ 全然違うけど、なんか雰囲気変わってないかも」

「あつ妹いるよ」

「うふふ。お邪魔しますね」

女子の靴が玄関にあるのを示すと、ユウキくんはスツといつものキャラを固めた。

ユウキくんは僕とふたりでいるときはいつも、コミック版でベジータが狼狽えたり力んだりしているときの不穏な効果背景を発しているのだが、長峰さんになると少女漫画

の花とかになる。

「ん、おかえ……り……」

リビングまでいくと、ソファでだらだらくつろいでいた妹の表情が、いつもの兄に心のないそれから変わっていく。

いや、兄に関心がないのはそのままだが、兄が連れてきた人物に目を奪われているようだ。

「すっげ美人……え、誰？　ですか？」

「この人は、」

「野原くん……心悟シンゴくんの彼女です」

「カノジヨ？」

「はいっ」

「カノジヨってなんだ？」

キャパシティを超えた事態に、妹は、彼女という単語の意味を一時的に喪失してしまったようだった。それほど今のユウキくんは、外面がいい。

けれどお前もユウキくんとは会っているんだよ、昔……。

ぼうつと虚空を見つめだす妹の肩を揺らし、現世に立ち戻らせる。

「ミツキ、一生のお願いがあるんだけど」

「なんスカ」

「ふたりつきりで過ごしたくてき。……時間つぶしてきてくれない？」

「はあく？ ふぎけんなんて。ていうか嘘だよね、あれが彼女で。ドツキリ？」

「これでどうか……」

財布からゲームのおつり、3000円を取り出し、握らせる。あまりに痛すぎる出費だが、背に腹は代えられない。

「フツ。なるほど……本気、つてワケ。いいぜ……あたしもちようど散歩したい気分だったんでね……たまたまね……」

すべてを悟ったような表情をする妹。たぶん何もわかっていないし何も考えていないが、とりあえずお金を見て従っただけだと思う。

「7時半に帰るわ。ごゆっくり」

妹は出かける支度を急いでくれて、やがて玄関から外へ旅立っていった。にこやかに手を振り合う女の子たち。たぶん妹の方は、長峰さんを妖精か幻覚のたぐいだと思っ
ている。

ばたん、とドアが閉まる。それを見届けると、長峰さんのにこやかだった表情が、みるみる訝しげなものになっていった。

「おいおい。わざわざふたりきりについて、まさか襲おうつての？ オレが可愛すぎてた

まらなくなるのは理解できるが、死ぬ覚悟はできているのかな？」

「い、いや。妹がいたら、きみが気をつかうかなって思って」

ぼくの部屋に入って扉を閉めたって、薄い壁の向こう、同じ屋根の下に妹がいたら、たぶん長峰さんは長峰さんのまま、本性を出さないだろう。

久しぶりに遊ぶんだし、のびのびやってくれたらいい。

「……ふーん。お気遣いどうも」

つんとした表情で、彼女は言った。

部屋に案内する。

ドアを開けて、どうぞ、とエスコートすると、どうも、と楚々とした態度で彼女は入室していった。

「おーっ！ 裕福な家庭のしゃらくさい子供部屋」

そして大声を出す。

見た目が裕福な家庭のお嬢様に見える人に、そんなことを言われるとは……。

長峰さんは、みんなの前では両手で可愛らしく持ち運んでいる学生カバンを、適当に放り投げ、そして遠慮も断りもなく人のベッドに座った。一応そこに座ると、ちようどゲームに使うモニターが見えるようになってる。僕は、勉強机の椅子をしようかな。「引越してるはずなのに、なんか、雰囲気は変わってない。初めて入るのに懐かし〜っ

てなった」

「そうかな」

適当な会話をしながら、モニターの元へ向かい、ごそごと新作ゲームをやる準備をする。ちら、と後ろを見ると、長峰さんはぱたと無邪気に脚をうごかしていた。

見た目は綺麗な同級生なので、ギャップがあった。内面は小学生から成長していかないのだろうか。いや、そういうわけではないと思うんだけど。

そしてあともう少してスカートの中が見えそう。

そう思っていると、枕が飛んできた。

「そういう視線って、わからんと思う？」

「すいませんでした」

じゃあぱたぱたするなよ、と思った。口にはしないけども。

買った新作は対戦ゲームだった。昔から友達と家で遊ぶならこれが定番、という大ヒットシリーズの最新作だった。

なので、オレからやらせろ、というガキ大将の論理はそもそも通用しない。残念だったな、ユウキくん。

懐かしい、なんて言い合いながら好きなキャラを選んで、CPUを交えて何度も乱闘バトルを繰り返していく。

この新作自体は当然、お互い今日が初めてプレイするので、プレイスキルに差はない……、

というわけでは、なかった。

「なんだよ、遠慮してんの？」

ユウキくんは、テレビゲームは久しぶりだと言っていたのは本当のようで、へったくそだった。まあ小学生の頃からへたくそだったのだが。

それである程度遊んだら、接待プレイを意識した。何を隠そう僕は小学生の時点でこの、妹やユウキくんに自分の勝ちを譲れる寛容さに到達していたのだ。素晴らしい人間性だと思う。

しかしこの接待プレイが、なぜか見抜かれてしまったようだ。

「お前、昔はもつとゲームでこつちをボコボコにして、人を小馬鹿にしてきただろうが。クソ陰キャがよ」

なに？ そんなわけがない。僕はユウキくと違って、素直で品行方正な小学生だったはずだ。まったく何を言っているんだ。

そんなに負けたいのなら仕方がない、ちよつともんでやるか。

「うえーい」

「あー!!」

頭上に▽ゆうきと書かれたキャラが吹っ飛ぶ。

「よわいねえ」

「ぬうううっ！ こっち座れお前！」

ベッドの前に座ることを要求される。怖……。蹴られるには良い位置だ。恐怖でプレイが鈍るかもしれない。

だが、対戦ゲームはユウキくんをわからせることのできる貴重な機会。もう勝ちは譲らねえ。

次の対戦が始まる。

CPUを脱落させ、タイマンになる。僕のキャラが、▽ゆうきを順調に追い詰めていった。

しかし……、

「うえーい!!」

「!？」

突然、両肩に何かが乗った。白くて、ずっしり重たくて、長い。あともつちりやわらかい。それに顔を思い切り挟まれる。もげげ。

これ……ちよつと待って……長峰さんの……。

ふともも。

頬を締め付けるものの感触に集中力を割かれ、僕のキャラは一回死んだ。

「ヒヤツハア~~~~!」

やかましい奇声がとどろく。

こ、こいつ……。

次は負けない。決意を新たに、▽ゆうきに突貫を仕掛け、

「重りのハンデ」

「!?!」

頭に何か、あたたかくやわらかく巨大なものを乗せられる。首が痛てえ。いい匂いする。

すべての集中力を頭頂部に傾けている間に、僕は負けていた。

満足そうな声とともに、熱が離れていく。

「はい〜勝ち〜」

「それでいいのか……」

「いーです。おまえみたいなオタクほどゲーム練習できねーんです。妨害ありで対等ですから。このドスケベが」

なんだと……。こいつ、美少女なのをいいことに……!

「何不満そうな顔してんだよ。お? いいかね、学校の男子の誰も味わえない最上級の

幸福を、キミは体験したのだ」

「それはそう」

「あー、楽しかった!」

日が暮れてしまったので、健全な学生としてはもう家に帰る時間。

楽しかった、といったユウキくんの顔は、本当に、楽しそうだった。

学校の誰も見たことのない、笑顔だった。

「送っていいこうか」

「いいよ、近くに迎え呼んだ」

とのことなので、玄関で、靴を履く長峰さんを見送る。

迎えに来てくれる人なんているのか。今のユウキくん……長峰さんには。

「さて。じゃ、また明日! 彼氏の心悟くんっ」

そういうえば彼氏彼女だった。本当だったら、高校生のカップルがどつちかの家に家族がいない時間に入ったら……くうっ。

アニメのキャラのような、媚びた声とポーズをつくって、長峰さんはアイドル的なウインクをした。

うーん。ゲームして遊んでみた以上、中身がユウキくんだという印象を引きずってい

るので、正直萎えた。むしろ憎たらしい。普段のキャラともあってないし。

「うわキモ」

「はい死ね〜」

思わず本音を漏らすと、肩パンをしてきた。

痛つつつた!! 正確に痛いツボに入った。お嬢様はこんな肩パンしない。もつとお淑やかな肩パンになるはずだ。

▽

▽

▽

目線の先は、花で飾りつけられた体育館のステージ。

もつと上に視線をのぼらせると、舞台看板には『卒業式』の文字が、ノスタルジックに、しかし輝いて見えた。

アニメにすると大体24話分くらいのだタバタイイベントがあったが、無事、長峰さんの本性が誰かにバレることはなく、ついにこの日に辿り着いた。

すなわち、解放の日。

僕と長峰悠希が、恋人関係ではなくなる日だ。

思えばつらかった。あいつのせいで、僕は本物の彼女ができるはずもなく、男子生徒の一部には強く妬まれ、高校三年間という貴重な青春を棒に振ったのだ。最初にあの自身に言われた通り、人生に影響が出る、とんだ嫌がらせだったわけだ。

卒業式の行程を終えるころには、僕は感極まって目を潤ませていた。

4月からの大学生活が楽しみだ。とくに彼女。とにかく彼女が欲しい。僕の好みの女の子と、甘いキャンパスライフを楽しみたい。

在校生や先生、保護者たちのつくる花道を通りきり、3月1日、僕たちは外の世界へ旅立った。

くさい比喻をなしにすると、とにかく卒業式が終わった。卒業生は主に正門の辺りをうろうろ、わちゃわちゃと騒いで、写真だとか最後の会話だとかに勤しんでいる。そしてしばらく経つと、各々が校内の好きな場所に散らばったりする。

僕は、あらかた友人とのコミュニケーションを済ませると、まだ人だかりの中心にいる長峰さんに目を向ける。

……いろいろあつたし、なんか話したいけど。まあ、あとにしよう。

そうして、いかにも友達がいそいでいないやつ、という感じにウロウロしていると、誰かに呼び止められた。

「先輩！ あの、えと、こんにちは。よかった、いいところで」

女子。

後輩の深山さんだ。図書委員として一緒に作業したり、放課後に図書室でちよろつとおしゃべりしたりして、仲良くなった。

在校生とはもう会えなくなる。なんかびしつと良いことを言っておかねば……。

「あ、あの！ 先輩に、伝えたいことが、あります」

……………ん？

ちよつとまってくれ。

気がつくのと、周りには誰もいない。目の前の深山さんは、決意の表情でこちらを向き、胸に手を当て、すーはーと深呼吸をしている。顔は上気して赤くなっている、ようにも見える。

まさか……………まさか！ このシチュエーションは!!

「先輩の……………第二ボタン。わたしに、くれませんか」

ウ……………

ウオオオオオオ!!!

学ランの第二ボタン、といえは。心臓に近い位置にあることから、それを誰かに要求する、譲渡することはつまり、アイラブユーを示している……

という……………

あの伝説の……

やばい超ドキドキする！ 嬉しい！！ 深山さん死ぬほどかわいく見えてきた！！

うそだろ、僕にも、僕にも好きになつてくれる人が!? 真の彼女が!? ついに!! 卒

業最高!! これが……春!!!

「も、もちろん——」

「あ、いたいた、野原くん」

えつ。と声が出る。第三者の声が投げ込まれたからだ。

しかも。そこらへんの女生徒では比べ物にならない、舞台俳優さんのようなきれいな声。

つまり。

「あ……長峰先輩」

この場にはならない輩が、なぜかやってきていた。

「ごめん、ちよつとこの人、借りていきますね」

「は、はい……」

「あつ、なんつ、やめつ」

今人生で一番いいところ!! ふざけるなアアオ!!!

精いっぱい暴れるも抵抗虚しく、僕より上の腕力に引きずられていく。

そして、ちょうど周りに誰もいない場所へ。

そこで解放される。

息を切らしながら、憎き相手をにらみつけてみる。

……ついさつきまで、両手で数え切れない数の取り巻きに囲まれていたはずの長峰さんは、あれをどうやって切り抜けてきたのだろうか。超がつく人気者なのに。

よく見ると、少し、ほんの少しだけ、息が上がっている。髪が乱れている。急いでこつちへ来たみたいに見える。だとしたら、なんでまたそんな。まさか、人の新たな恋路を邪魔するためにわざわざやって来たんじゃないだろうな。

意図がわからず、ひとまず、ここから逃げ出すことを意識して息を整えていると、

「うわッ！ な、なにをするのさ、ユウキくん！」

「ふゆ、ふゆ、ひゆ〜」

「口笛吹けてないから。い、いてっ！ やめ……」

学ランを掴まれ、引つ張られ。なんかごそごそと胸の辺りをいじられる。

いったいなんのつもりだ。

やがて、ぷつ、と何かを取り外されたような感覚がすると同時に、ユウキくんが離れた。

自分の首から下を確認する。

そして相手を見る。彼女が、片手でほんと上に投げてはキャッチして遊んでいる、何か小さいもの。

「あー、ぬああつ、か、かえしてよ！」

それは第二ボタンであった。

う、うそだろ。深山さんに捧げるべき僕の大事な心臓が。

「か、返……」

キルアに心臓を盗られた人みたいに、よろよろと手を伸ばす。

長峰悠希は――、

べ、と小さく、赤い舌を出し。

走って逃げていってしまった。

絶望。相手は女子だが、この女だけは無駄に身体能力が高く、僕では追いつけない。

なんということだ。なんという、ことだ……。

けっこうかわいいところもあるやつだと、一応友達だとおもっていたのに……。最後の日に、こんな仕打ちをしてくるなんて……。

まあでも、いいもんね。ボタンはむしり取られたけど、僕は深山さんに告白も同然の言葉をもらったんだ。手切れ金にボタンなんかいくらでも持ってけってんだ。

そう自分を励ましつつ、しかし、やや重い足取りで、深山さんのところに戻った。

「そう、やっぱり、長峰先輩と付き合ってたんですね。わたしなんかじゃ、敵うわけない

……」

「えっ」

「ありがとうございます、先輩。卒業……おめでどう、ございますっ」

僕の胸元にボタンが無くなっているのを見て、深山さんは、泣き出しそうな笑顔を最後に、走り去ってしまった。

……

……

……ああ。ああ。

あああゝゝ。あああゝゝ。はわあゝゝ。ぱあー。

▽

大学で彼女をつくりたい。

入学式を終え、新入生オリエンテーション期間を走り抜け、自分で組んだ時間割の講義の第一回を受け、学生生活のスタートを感じ。

あとは頑張つて友達をつくり、そしてそして、彼女を！ と意気込んでいた。

その、講義からの帰り際だった。

大学生という生き物は、日が暮れると、お酒を飲むお店にみんなして向かったりするらしい。高校までの規則から解き放たれたからか、親元を離れている人も多いからなのか、ずいぶん自由なものだ。

A棟から出てすぐのところでも、ちよつとした人の群れ。たぶんこれから遊びにでも行くのだろう。

すれ違いざまにちらりと顔ぶれを盗み見ると、男子が多い。

悪くいえばチャラチャラとした、良くいえばあか抜けた格好の、まあ、遊びに力を割いている学生たちだった。彼らは、ひとりの女性を囲み、声をかけていた。合コンだからークルだかに誘っているんだろう。

うらやましいね。僕も女の子に声をかける度胸を身につけないとな。

そう思いながら、彼らのそばを通り過ぎる。

「……………ん？」

いま。

気のせいかな。見てはいけけないものを、見た気がした。現に、冷や汗が出て、背筋を震えが駆けあがっている。

何にそんなに、反応しているんだろうか。僕の身体は。

……………ちら、と。

彼らが、誰を囲んでいたのか。それを、確かめて、しまった。

周りの男たちに対して、少し困ったような顔をしていたその女の子は……。

目が合つて、こちらを認識して。

にいいつ、と意地の悪い笑みを浮かべた。

「すみません、通してくださいね」

囲みを突破し、ぱたぱたとこちらに駆け寄ってくる。アメフト選手かと思つた。

そ、そういえば。高校の掲示板に貼られていた、三年生の進路。同じ大学に行く人が、

何人かいて……。そのひとは……。

い、いかん。逃げなければ。

そう判断し、こちらがスタートを切る前に、もう向こうはトツプスピードに乗つていて、僕は完全に捉えられていた。

捕まる。腕にしがみつかれる。おっばいやわらかつ。

ふ、ふ、とリズムよく息を整えて、その女の子は、さらに腕を締め付けてきた。痛い

痛い。やわらかい。

そして、こちらへ向かつて来た男性諸君に、僕を捕らえたまま、向き直る。

おい、まさか……。

や……、

やめろ!!

「ごめんなさい。私、この人と付き合っているので」

体育祭、バレンタインデー、ホワイトデー、学園祭

▽体育祭

中学もそうだったが、学校生活というのは色々な催しがあるもので、その一つが体育祭である。

運動部を抜けた身としては、めんどろなイベントだという気持ちしかない。炎天下のグラウンドで、生徒も先生もあんまりやりたくない準備期間を経て、あんまりやりたくない競技に挑み、保護者に頑張る姿を見せる。運動部のみんなが張り切っているのなら教育的にやる価値もあると思うが、どうも、そこまで彼らも乗り気ではない。なんのためにやるんだか。

とまあ、どうしてもネガティブな感想を浮かべてしまうが、このままあまりだったらやっていると、本当にーミリも楽しくなくなる。学生らしく想い出作りに邁進する気持ちでいよう。

体育祭は、全クラス対抗の競争だ。数ある競技種目に対して、クラスから誰かを出場させる形式。一生徒は必ず、クラス対抗リレー以外のどれかの競技に出なければならぬ。いようになっている。

僕はうまいこと、労力の少なそうな競技を選ぶことができた。障害物競走りレー、の中に含まれている、『ぐるぐるバット』である。額を押し当てたバットを軸にしてその場でグルグル回り、目が回った状態で数十メートル走る。おわり。

ちようどさつき、それをやってきた。派手に転んで恥をかき、砂埃にまみれてしまったが、これはこれで、頑張った感が出ているので良かったのではないかと思っている。クラスのテント下に引っ込んだときも、級友たちから一笑いもらえたし。

さて。テントの応援席からグラウンドに目を向けると、次の種目は『借り物競争』のようだ。定番だな。

うちからは誰が出るのかというところ……、応援席の級友たちが目を見張るように前へへと出ている様子からわかるように、

長峰さんだ。

あの女の身体能力をこんな盛り上がりだけの競技で消費するなんて戦略的にどうなんだ？　と思ったのだが、これも彼らの意向である。競技決めのときに、「学校のアイドルだからこそ、ここで長峰悠希を切る——。」というエンタメを求める空気になり、長峰さんはそれを了承したのだった。

一応クラスメイトなので応援しよう。級友たちの頭の間から、彼女の姿を探してみる。

いた。

長い髪を一本結びにまとめ、ハチマキをして、体操服の袖を肩までまくっていた。胸でつか、という声が聞こえ、思わず深々と首肯した。

いつもの、座学中の、深窓の令嬢キヤラとはまた違った活発なイメージで、女子の体育の様子など見たことがない男子たちが沸いている。

本当はユウキくん、体育が一番好きなんだけどな。今でも、クラス対抗のスポーツ大会とかを本気でやるタイプらしく、借り物競争（本人曰く、「お遊び」）に担ぎ出されたことに、ひそかに文句を言っていた。

周囲の声が静まる。借り物競争がスタートするらしい。

パン、と乾いた発砲音のあとに、わっ、という歓声。放送部員の棒読みの盛り上げ実況。

注目の長峰さんは、スタートとゴールの真ん中にある、借り物のくじを引くボックスの位置に、一番に到達していた。手を抜くつもりはないらしい。

戦いの舞台はけっこうこのテントから近い。せっかくなので、新調したコンタクトレンズの圧倒的アイサイトパワーで、その表情に注目してみる。

お題の書かれた紙きれを広げた、長峰悠希は――、
眉をひそめた、機嫌のよくないときの顔をしていた。

それはほんの一瞬のことで、すぐに表情は真顔を取り繕ったものの。長峰さんはその場に留まり、何かを考え込むように腕を胸の下で組んだ。ある部位が強調され、我々はワツと沸いた。

でも、どうしたんだろう。彼女が立ち止まっている間に、他の生徒たちがぱたぱたと会場に散っていく。そんな悩むようなお題をつかまされたのか。

そしていよいよ、他の競技者たちが各々借り物を入力してくる。と、いうときに。

長峰さんは身体向きを変え、こっちのテントを見た。

どん、という効果音がついていそうなスタートダッシュから、おそろしい勢いでこちらへ向かってきている。わあっ長峰さんがこっちに来た、と盛り上がるはずの応援席は、スピードが凄まじすぎてなんか引いた感じになり、どよめいていた。

「道開けてッ」

応援席、男子の一団へとやってきた長峰さんがぴしやりと叫ぶ。我々は訓練された兵隊のように、二列に分かれて整列した。その間を彼女はどしどし歩いていく。

「来て」

そして、ぎり、と花山薫ぐらいの握力で僕の腕をつかんだ。痛ツツツ

「来て、野原くん」

「えっ、ちよっ、お題なんスカ」

「いいから来い……」

そのまま腕を引かれ、耳元で低い声で呟かれる。怖。

行つてきます、と長峰さんはクラスメイトたちに爽やかな声で言い、僕はみんなに見送られた。友人の金田くんや佐藤くんと目が合ったのだが、このときは荷物という無機物を見る目だった。

そして、疾駆。凄まじいスピードで戻ろうとする長峰さんに腕を掴まれているので、肩がとれるかと思った。応援席からゴールへ向かうまでの間のうち、一瞬、僕は浮いていたのではないだろうか。

その甲斐もあり、どうやら長峰悠希は、逆転の一着を手にしたようだった。ゴールにいた判定員の生徒に、お題の書かれた紙を見せている。

ゼエハアしつっ肩をマッサージしつっ、その様子に目と耳を傾ける。何が書かれていたんだろう。

……判定員の女生徒が、僕を見て微妙な顔をしている。どうやら、審議が起きているらしい。

「悠希く、ほんとにそいつ……んっつ。えーつと、野原くん？ で、いいの？ 一応噂は聞いているけど」

「何か問題でも？ 平川さん」

「いやあ……まあ……あ、ないです。はい。あんたがそういうなら、はい。じゃあ、その紙回収で——」

「……………」

「あ、うん。はい、あげます」

長峰さんは友人らしい女生徒をなんか黙らせ、一着の旗を手中に収めていた。

「いったいなんだったんだ。自分の競技は終わったのに、疲れた。しばらく息を整え、僕は長峰さんに声をかける。」

「長峰さん、お題はなんだったの？」

「ん？ ああ……………」

しっかりと握っていたのか、くしゃくしゃになった紙を、彼女はしばし、改めて眺めていた。

そして、いつもの、清らかで印象の良い、よそ向けの笑顔をつくって言った。

「…………『オタク』、ですよ。あつてるでしょ？ 野原くん」

「なにっ」

くっ、なんだそれ。悪意ある実行委員の仕業か。

オタク、つていろいろニュアンスがあるけど、この場合絶対わるい意味だと思う。全生徒憧れの誰からも好かれる優し〜い長峰さんに、笑顔で罵倒された形になる。それは

それでご褒美とも考えられるが……。

「ムヌグググ……はあ。ちよつと見せてー」

ユウキくんに手を差し出す。特別見せてもらいたい理由は無いが、そうだな。そんなお題を入れやがったやつ筆跡でも拝んでおこう。

……。

笑顔を保つたまま、渡してくれない。

すつと手を伸ばす。

ふい、とかわされる。もう一度。かわされる。

なんやねん。

「しつこいな……」

ぼそ、と低い声が聞こえた。いや見せてくれるぐらいいいじゃん。

「……………。これは、だーめ」

あ、と声が出る。どうしてか、よほど見せたくなかつたようで――、

長峰さんは、なんと、紙をびりびりに破いてしまった。

そしてそのまま細切れの紙片を手のひらに乗せ、ふつ、と息で吹き飛ばした。

……紙吹雪は風に乗って遠くへ舞う。その景色を、彼女は切なげな笑顔で見送っていた。顔が良いので、それはまるで、雪の妖精のようにも、あるいは映画のワンシーンに

も見えた。

他の生徒も見惚れていた。

いや、でもよく考えたらそれ、ゴミを校内に散らしたただけだからね。

▽バレンタインデー

今日は学校のすべての男子がそわそわする日、2月14日である。

すべて、というのは、100パーセントという意味だ。口では「ああ……あれね。興味なさすぎて忘れてたわw」みたいなことを言うやつも、まず間違いなくそわそわしている。

それは当然僕もだ。朝から机の中とかロッカーの中とか、念入りに調べた。

なあくんにも入ってなかったけど。

バレンタインデー。

おそらくどのクラスでも、そわそわ男子と行動力のある女子の攻防が繰り広げられているのだろうが、このクラスではまた様子が違っていた。

「ええ。いつもよくしてくださる〇〇学友のみんなに、大切な贈り物を」

サンタクロースみたいなかい袋を肩にかついだ長峰さんが、男女問わずクラスメイ

トたちにチョココレートを配っていた。クリスマスはもう過ぎましたよ。

女子は友チョコとして普通に喜び長峰さんへの友情を深め、男子は感動にむせび泣いていた。佐藤くんなどは、一応は彼氏ということをクリックに周知されているはずの僕に對して、「なあ……長峰さん……俺のこと好きなんじゃ……」と聞いてきた。いえ。女子の方が好きらしいですよ。

配っていたものは、周りの手元をみるに、なんか高そうなパッケージのチョココレートだった。コンビニでは売ってないようなやつ。

満面の笑みでそれをクラス全員分に施している。成金？

「あ、野原くん。はい、どうぞ」

「あ……ッス」

席の前を通りがかった制服姿のサンタに、ぱぱっとブツを渡される。

……まあ、実は、周りのヤツとはグレードが違うのを貰えたりするんじゃないか、なんて浅ましい期待をしていたのだが。その気持ちを見透かしたかのように、超、みんなと同じやつだった。

ちらりと、向こうへ行く長峰さんの顔を見る。彼女はこちらを見下ろす角度で目を細め、くす、と笑いを漏らしていた。

……いいッスけどね……べつに……偽装彼氏だしね……。

「野原くん、彼氏なのにみんなと同じなの？」

「あ、うん」

金田くんに話しかけられる。もちろん、彼の手元にあるやつも、同じものだった。

「ふうん、そりゃいい。もしあからさまに本命のやつだったら、男子に袋叩きにされてたかもよ」

「たしかに……」

級友たちとはそれなりの関係を築けているとはいえ、長峰さんとの恋愛関係に話題が及ぶと、彼らはめちやくちや攻撃してくる。悪ふざけの範疇だけど。

それを回避できた。これはユウキくんの気遣いかもしれないな。

……気遣いかなあ。そんなことできるタイプじゃなかった気がするけどなあ。

小学校のとき、担任の先生がひとりに1個配ってくれたチョコの、僕の方までを勝手にぼりぼり平らげた、食い意地の張ったやつ。それがユウキくんだ。

うーん。

ともかく、施しをくれたのは、素直にありがたいな。昼休みにでも美味しく食べよう。

放課後になった。

バレンタインチョコを期待し、なかなか帰らず教室に残りまくる男子たち。僕も残ろうか悩んだが、チョコのあてなどあるはずもなく、潔く帰り支度を始める。

そうして、鞆を手に提げたとき。少し離れたところ、教室のドアから出ようとしている、長峰さんと、目が合った。

「……………」

そして、スツスツ、と小さくハンドサインを送られる。

あれは！

「いつもの校舎裏に來いや」、のサイン！

また告白者か。はー。そっか、バレンタインデーだしな。恋愛イベントということで告白率も上がる。

……めんどくせえ……。心痛え。でもいかないと、あとでボコだしな。

教室から出る。

我ながら、この不本意ですよ感を誰にアピールしているのか。そんないかにもな重い足取りで、校舎裏の倉庫に向かうことにした。

校舎裏にやってきた。いつものように、後から来るかもしれない男子に気付かれない影に潜もうとする。

「やあやあ。来たかね、貧しきものよ」

が、こちらを待ち構えていたかのような台詞を、ユウキくんは口にしたのだった。

「今回は何時に現れるの？」

「うん？ 何が？」

「いや、告白する人だよ」

「ああ。別に誰も来ないさ」

ん。じゃあ何のために呼び出されたんだ？

「お前ね、今日何の日か知ってる？ ……じゃあくんつ。彼女から彼氏へ、これをあげよ

う。タイトルは『憐れみ』」

「………… おお」

手渡されたのは、高そうなパッケージのチョコ……ではない、手のひら大の、小さな袋。

ラッピングされた、チョコレートだった。

興奮気味に、開けていい？ と聞くと、よいぞ、と言われた。

「その辺で買ってきたヤツだけど、あげるよ。犬には餌をあげないとねえ」

「性格わる」

犬ってチョコ食べたら駄目なんだぞ。

適当な会話をしつつ、内心では、正直感動していた。言っていることはともかく、これは紛れもなく気遣いではないだろうか。

あのユウキくんが……。僕に、まあなんか形の悪い安そうなやつとはいえ、僕だけに

何かをくれるとは。あのユウキくんでも、僕に彼氏役をやらせていることについて、何か思うことはあったのだ。これが、人間の、成長。

なんて。飼いだ根性染みつきすぎかな。

袋の中の、いびつなチョコをひとかけら、食べる。甘い。コーヒーか何かのみたい。

「なあ」

「ん」

倉庫の前の段差に座って、ちびりちびり、もぐもぐ食べさせてもらっていると、ユウキくんがとなりに腰掛けてきた。

「教室で配ったヤツと、どっちがうまい？」

「教室の方」

「あはは！ ま、そうだよなア。初挑戦だし」

「何が？」

「いや、別に」

食べ終わって、指を舐めながら、なんとなしに横を見た。

膝を抱えたユウキくんが、無表情で、こちらを観察するようにじっと見ていたので。

ちよつとぎよつとした。

「い、ちよつとぎよつとした」

「うむ……」

どちらからともなく、立ち上がる。

ありがとう、と礼を言おうとして、彼女に向き直って息を吸うと、

「ん」

と、何もない手のひらを差し出された。

?? なんだろう。お手！ つてことか……？

「あの、なんです？」

「なにつて。バレンタインデーつて、男がチョコ貰う日じゃん。だから、はい」

「？」

「よこせ」

えっ。

……あつ。チョコをよこせ、つてこと？ 男である自分に。

……な、なるほどお。

「あの、女の子がチョコをあげる日、ではなく？」

「は？ そういう性的役割の押し付けは良くないと思う」

「ええ……」

「なに？ 用意してねーの？ ああ？ ジャンプしてみろよ、ジャンプ」

用意……してないっす……もらう側だと思ってました……。

可愛らしいご尊顔をお怒りに染める長峰悠希。何故か、いつの不良なのかわからない文句を言われ、とりあえず言う通りにぴよんと跳ねる。

ちやりんちやりん、と。たまたま学食のおつりを財布でなくポケットに入れていたので、まんまと音が鳴った。

「ぶふっ。本当に鳴らすやつがあるか」

ユウキくんが歩き出す。この校舎裏から出るルートだ。

「おら！ チョコ買いに行くぞ、チョコ！ お前の金でな」

「ウス……」

バレンタインデーはチョコをもらえるもの、という男子の考えは、古いらしい。

このあと、クソ高いケーキ屋のチョコレートケーキを買わされた。チョコの定義を広げるな！

それと、長峰悠希は甘いものが好きらしい。昔はそんな様子はなかったもので、意外だった。

▽ホワイトデー

「見返りなど必要ありません。あれは、私からの気持ちですから」

俺のお返しを受け取ってくれ！ 俺もだ！ 俺も俺も！

という男子の声に、教室移動の度にさらされる長峰さん。他クラスの生徒からもだ。ちよつと男子イ〜という女子のSP達に守られながら移動していた。

大変だな……。

ま、僕には関係ないな。今日長峰さんと関わる予定はない。チョコレートもらったことへのお返しは、そもそもバレンタインデーであげたし。

「……………」

——ムッ！ あのハンドサインは！

「昼休み、屋上に来いや」のサイン!!

屋上にやって来た。

いつものことながら、なぜここの鍵を長峰さんが開けられるのか、謎だ。教師に許可を取っているってことだよな？ 一体どうやって。

ともかく。

待ち受けていた長峰さんは、腰に両手を当て、横柄な声色を投げかけてきた。

「おい。お返しはっ！」

「えっ」

「んー」

空いた片手をずい、と出してくる。

お返して……ホワイトデーの、だよな。

「えっでも、いらないつて、教室では男子に」

「はあ？ バカ？ お前のはいるよ」

「バレンタインデーにあげたじゃん、クソ高いケーキ」

「ふう〜」

ユウキくんは、きれいな形の眉をマンガのような八の字に曲げ、やれやれ、と口にしなくとも如実に伝わってくるジャスチャーと表情をつくった。

「ハア〜信じられないツス。心悟、お前つてさア……何て言うか……クソだよな」

えっ。いつも以上にひどい罵倒。

そして、心底見下げ果てたと言わんばかりの、冷たい視線であった。

なんでや……。

「とりあえず放課後は付き合え、お前の金でなんか買う」

「またか……」

「なに被害者みたいな顔してんだ、呆れるわ」

むむむ。なんか機嫌悪そう。

今いくら入ってたかな。金のかかる偽彼女である。

通学路から大きくはみ出し、繁華街の方に足を伸ばす。飲食店が立ち並ぶ辺りをうろする彼女の背中を追いつつ、どんな要求をされるのか内心冷え冷えしていると、意外な場所です足を止めた。

長峰さんは真顔で、ぴつと店の看板を指さし、白い息を吐いた。

「ラーメンでいいや」

ええ。普通の学生。

それなら1000円に収まりそうだ、よかったよかった。

店の中に入る。特別繁盛しているわけでもなさそうで、客足はまばら。夕飯時にはまだ早いので、もう少し経ったらお店のピークになるのかもしれない。

ふたりがけのテーブルに座ると、対面の長峰さんは、いそいそとメニュー表を手にとって眺め始めた。写真とかはない文字だけのメニューなので、どんなものが出てくるかは名前から想像するしかない。

心なしか、表情が明るくなった様子の彼女は、僕にメニュー表を見せてきた。

「どれが美味しいと思う？ ていうか何にする？」

こういうのは別に好みがなければ、1行目や1ページ目に書かれている看板メニューを頼めばいい。

「しょうゆ中華そば」

「じゃあ、オレもそれ！」

「ん。一緒のでもいいの？　なんか食べたいのあるから入ったんじゃないの」

「だってあんまりわからんし。食べたことないし、ラーメン」

「あ、そうなんだ」

ふーん。

……ラーメン食べたことない人っているんだ。もしやカップ麺とかも？

いや、まあ、女の子だったらそういうこともあるのかな。それにこの長峰さんが、大衆料理や安っぽいインスタント食なんかを食べているシーンは、たしかにイメージにそぐわない。

ん？　でもユウキくんは元々男の子で……いや今は長峰さんだから……。

まあいいか。

お店の人に同じのをふたつ、注文する。

しばらくどうでもいい会話をしていると、やがて、どんぶりが二杯、食卓に置かれた。グルメ意識の高い同級生たちみたいに、いちいち写真を撮ってSNSにあげよう……とも思えない、そんなに特徴もないラーメンだ。強いて言えば、よほどスープがアチチなのか、やたらと湯気が出ていた。

美味しそ〜、という言葉も口から出なかったが。割りばしを割りながら対面を見ると、なんか向こうは、感動している様子だった。

目を見開き、口を半開きにしてどんぶりを眺めている。え、何。かわいいな。いつもの昼食のときと違う。

ユウキくんは庶民の食事に思わず感動する深窓の令嬢だった？

「じゃあ、いただきま……あつと、その前に」

長峰さんは、ポケットから取り出した輪っか……ヘアゴムを、おもむろに口にくわえた。そして両手を頭の後ろに持って行く。どうやら髪をまとめているようだ。

……女の子が両腕を持ち上げて、脇の下——肋骨らへん？　が見えるのって。なんか、無防備だな。

……あ、いかん。麺が伸びるかも。

長峰さんのその様子を、ラーメンを食べずにじろじろ見てしまっていた自分に気が付いたのは、髪を結び終わったユウキくんが、人をからかうときのニヤつとした顔で笑いかけてきたときだった。

「おつ。ははあん。さてはいま、キュンとしたなあ。野原くん」

「は？　しっしてないし」

「ほんとお？　クラスの女子が言ってたぞ、『男は女がラーメンを食べるときに髪をまと

めるとキュンとするらしい』……と！」

結構クラスの子とは俗な話をしてるんだな、長峰さん。

そして僕は、断じてユウキくんにキュンとすることは無い。はず。

いただきます、と言つてずるずると食べ始める。

あつ、おいしい。よかつた。まあ、大衆料理などと言つてもこれは僕にとつて、外食であり、学生食堂と比べていい値段がするので、まづかつたりしたらたまつたものじゃないのだが。

「ん~~~~~！」

対面には、ずぞぞとおつさんみたいなデカイ音を出しながらラーメンを食う長峰さん。脳がおかしくなりそうな光景だった。

だが、明らかに機嫌の良いときのリアクション。どうも本当にこれを食べてみたかつたようだ。

「おいしい？」

「普通~~~~~！」

美味いらしい。

こんな顔が見られるなら、一食おごるくらい、別にいいか。

……いやでも、ホワイトデーにラーメンで。

まあ、いいのか。

▽学園祭

ガレリア王国とルフラン王国、長く敵対しているふたつの大国。

しかし、その果てのない戦火に、人々は疲弊しきっていた。

やがて、戦乱を終わらせるため、ガレリアの王子と、ルフランの姫が婚姻関係となり、ふたつの国が和平を結ぶという話が両国同意のもと立ち上がる。

しかしそれはルフラン側の罠だった。その姫は、和平を反故にする日のために用意されていた、偽物だったのだ。

仕立て上げられた偽物のお姫様。それを知ってしまった王子。二人の間に、愛などというものは生まれるのだろうか。

全米が泣いた珠玉のラブストーリー。この秋、ついに日本上陸。

以上が、我がクラスが一致団結して挑む、学園祭への出し物——演劇のあらすじである。最後の一行はよくあるふざげだ。

しかし、高校生にもなつて、シリアス系のオリジナル演劇かあ。十中八九、駄作になつてしまうだろう。まず、生徒の誰も真面目に見てくれるはずもない。

主役がこの人じゃなければ。

「はぁーあ。引き受けちゃった」

放課後。途中まで一緒らしい通学路を、並んで歩く。

クラスに、学校一可愛い女の子がいたりすると、クラスの出し物系のイベントではその子を前面に出すような演目を組んでしまう——、ということが、どうやらあるらしい。

主人公である偽物のお姫様役は、この長峰悠希である。

演劇の内容自体は、まだ適当に決めた仮のものだが、とりあえずお姫様役は誰！ という学級会議で、満場一致で彼女が推薦されてしまったのだ。たぶん、劇の内容自体も、長峰さんのイメージに引つ張られていくことになるだろう。

で、長峰さんは、いつもの上品な笑顔を保ったまま、それに頷いたのだった。

「しかし、ユウキくんがお姫様役か……」

長峰さんなら納得だが。

でもあのユウキくんが。お姫様。全校生徒の前で。

「ソッフフ」

「あッ、わっ笑うな!! 殺すぞ!」

長い脚でげしげしと腿を蹴ってくる。痛っ! すぐ手が出るんだからこの人は。脚も。

「茶化されるとやりにくいだろうが。覚えてろテーマ」

どうやら真面目に取り組むつもりようだ。

うーん。

……しかし、すごいよな。ユウキくんって。どうしてああいう、みんなの期待に応えるようなキャラクターを作っているのか。その理由はわからないけど、それを今日まで、いや、明日もずっと貫いていくっていうのは、ものすごく、ものすごいと思う。

久々におちよくるチャンスだとも思ったけど、そんなのはダメだな。クラスメイトとして応援しよ。

「フフ……。頑張ろうね、長峰さん」

「だから、笑うな。キモいし」

学祭が近づいてくると、いよいよ、演劇の練習や準備に力が入る。

夏休みも明けてしまい、本番の日までは、もう放課後の時間を使うしかない。どのクラスも、日が暮れるまで教室に残っていて、苦労している様子だった。

ちなみに僕は、このクラスにおける役割は、もちろん、「裏方」である。劇に使うセットとかを考え、準備する仕事だ。演者とどちらが労力的に大変なのか、というところ、どっちもどっち、つてところだろうけど、大勢の前で舞台俳優をやらねばならない緊張を考

えると、こっちのほうが気楽だろう。

「ああーきつい。あつ、見てよ時計、今日は帰ろうかな」

「うおお。ほんとかだ」

金田くんに言われて時計に目を向けると、あれまあ、学生が居残るには危うい時間帯であった。教室に残っている級友たちも数はわずかで、そして金田くんの声をきつかけに、彼らも帰ろうという空気になっていた。

進捗がなー。大丈夫かな。といつてもこれ以上少人数で残つてもあれだから、帰るのが正解だ。

未完成の小道具をしまい、帰宅の準備をする。教室でもいくつか、さよなら、ばいばい、といった挨拶が飛んでいる。

そうして、気が付くと。

「あれっ。帰らないの、長峰さん」

人もいなくなつて、机を全部うしろに退かした、いつもより広い教室の端っこ。長峰悠希が椅子に腰かけ、劇の台本を読んでいた。

「ん」

顔を上げる。きよろきよろと周りを見て、僕以外に誰もいないのを確認して、

「ちよつと、まだ納得いかなくてさ。練習が足りない感じ」

と言った。

……………。

もしかして、この人、努力家？

「…………お、わ、おっと」

イスから腰をあげたユウキくんは、ややテンション低めの顔で、突然、手に持っていた台本を投げよこしてきた。それをなんとかキャッチする。

台本は、クリップで、あるページのまま閉じないように固定されている。

どうやら劇の終盤のほうだ。ラブストーリーを盛り上げる、いち学生が音読するのはかなり勇気のいる、クサイセリフがいくつも書かれている。

台本から、顔を上げる。

いつの間にか、妙に真面目くさった顔をした長峰さんが、けっこう近くに立っていた。

「すー、はー。……王子。いえ、クラウド様」

「え？」

「『好きです。愛しています、あなたを。受け入れては、くれないのですか』」

「うお…………」

ぞわわ、と全身の毛が逆立つ感覚。

これは、悪い意味の鳥肌…………ではない。どうやら、目の前にいた人間が突然、台本の

中のお姫様が変わったことへの、感動らしかった。

表情、目力、息遣い。身体のしぐさ。それら全部が、今は長峰さんでも、ユウキくんでもなかった。彼女は、胸の切なさを隠しきれない様子で、こちらの目を覗き込んでいた。

演技うつつま。そして顔が良すぎる。こんなの、絶対客席に伝わりきらないのに、ここまで完璧にして。なのに納得してないって、なんでだ。

しかし、そうか。ユウキくんは、よく考えたらいつも、長峰悠希という女子を演じているから。こういうの、クラスの誰よりも得意なんだ。

「……………」

長峰さんの目が動き、僕の手元……台本に視線を送った。

え、なに。まさか、王子役をやれや、ってこと？

えっ……嫌だ。

「痛っ」

姫に足を踏まれた。

「……………」『けれど、あなたは偽物だ。その気持ちも、きつと、つくりあげたものなのだ』

ぼそぼそと早口で言い切る。

それを受けて、彼女は。

さらに近づいてきて、こちらの胸に、手をあてて。すがるように服を掴んで。

『でも。作り物だとしても。私は、あなたを愛しているのです』

潤んだようにも見える瞳に、教室の電灯が反射していた。

うわ。

すつごいドキドキする。あつ、まずいな……。からかわれる。手が胸に当たってるか

ら、絶対バレてるし。

不意打ちがすぎる。くそ……。

そして。この後は場面転換なので、台本に次の台詞もなく。無言で汗をながしている

と。

何秒かして、彼女は、ぱつと手を放し、僕から台本を奪い取った。

こちらに背中を向けたので……安心して、心臓をドキつかせる。

うはあー。やばいなあ。王子役の山本くん、絶対長峰さんのこと好きになるだろ。す

ごい詐欺だなこれは……。

「ん〜。セリフがあれなのかなア。……みんなして、最高に美しくてかわいい、長峰悠希

に言ってもらいたいセリフを適当にさあ。こんなの勝手に変えてやるもんね」

どかつとイスに座り、ペンで台本に、勝手な上書きをはじめた。いいのかなそんなこ

として。主役とはいえ。

ユウキくんは、長峰さん時の楚々とした座り方を忘れていいのか、長い脚の片方を反対の膝に乱暴に乗せていた。すっごい男っぽくて違和感。

あつパンツ見えそう。

「そういうときはお前が目を逸らすんだよ、エロボケ」

なぜか心の内を正確に読まれ、ペンを投げつけられた。

……そのあと。先生に追い出されるまで、彼女の練習は続いた。

学園祭の終わり。

僕たちのクラスは、舞台での出し物部門での、2位を頂いた。おそらく主役の演技が評価されたのだろう。演技力も、それまでの努力も、誰よりも上だったのだから。

1位じゃなかったのは、まあ。主役に頼りすぎていて、クラスの団結的な部分が評価されなかった、ととれるようなことを、先生が言っていた。僕的には、ストーリーとかが別に全然面白くなかったからだと思う。ああいうの、自分たちで作るとなると、やはり難しい。

それにしても……あそこまで頑張っていたからには、あの子は、1位をとる気満々だったんじゃないか。荒れてないといいけど。

後夜祭では、体育館にて、有志生徒の漫才・コントやら、ミスター&ミスコンテスト

などがあった。その次はバンド演奏がある。

どれも学校のスター候補にスポットライトがあたる催しで、僕はもちろん、ただの観客。金田くんや佐藤くん、他の男子たちとひとかたまりになり、体育館の床に座っている。

そして、今年のうちの高校で一番かわいい女子は、公式に長峰悠希で決まったらしい。ミスコンテストは、彼女の優勝で決着がついた。

演劇のこともあって、また顔が売れちゃうだろうな。それで男子諸君がまた寄つてくるとなると、ユウキくんにとっては歓迎しない事態だろう。

長峰悠希は、そんな内心は表に出さず、全校生徒の前で堂々とした態度で、謙虚なコメントを口にしていた。

自分が一番かわいい自覚があるはずなので、とんだ嘘つきだった。

しばらく、いくつかのバンド演奏を楽しんだ。

もちろん、プロに比べれば単なる騒音、なんて金田くんが貶すレベルのものもあったが。音楽などととてできない僕にとっては、彼らはすごい連中なのだった。

なので、けっこう楽しかった。その楽しさの中にいくらか、みんなで頑張った学園祭の終わりも感じて、妙にしんみりした気持ちもあった。

そういう、気分るときだった。

「野原くん。長峰さん、こっち来てるよ」

「ん?」

「よくきみを簡単に見つけられるもんだ。羨ましいね」

前の方で客席という地べたから立ち上がった影は、どうやら良く知る人物のようだった。

やがて金田くんの言うように、彼女はまっすぐこちらへやってきた。

「あの、なに?」

すぐそばに来てこちらを見下ろしたので、僕に用だろうと思つて、声をかけたのだが、返事はない。

長峰さんは、男子たちにひとつ、愛想笑いを振り撒いたあと、無言で僕の腕をひっぱつた。

いま、周りからはどう見られているだろうか。真実は、凄まじい怪力で引つ張られているのだが。

そうして、長峰悠希と一緒に、後夜祭の体育館を後にする。

さすがに注目を買った……。こんなタイミングで、まったく。

「二年生とか三年生にすごい顔で見られたんですけど」

「一緒に歩かないと彼氏アピールにならないだろ。演劇とミスコンのせいでファン増え

るんだから」

すげえ自信。

実は今日は、これが初めての会話だ。演劇の最中に話しかける暇ないし、それ以外の時間は、この人、人気者だし。姿すら見なかったな。付き合いであちこち奔走していたんじゃないだろうか。

ユウキくんが歩くのに合わせ、夜の校内をうろろうろする。

「そういえば、セリフ。本番、なんか台本と違うこと言ってなかった？」

「あ？ なに。人の台詞覚えてんの、お前。え〜、キモ」

「練習につき合わせといて……」

そんな話の途中、彼女は校舎の階段を昇り始めた。

二階より上をウロウロするつもりなのか、と思った。でも、この階段は……。

やがて僕は、ユウキくんと一緒に、いつもの屋上に来ていた。

またかよ。もしかして、この場所お気に入りなのかね。解放感あるし、風とか涼しいし、

けれど夜となると、また趣が違って見える。もしなんもない夜だったら、絶対コワイ。危ないし幽霊も出そう。

でも今は、後夜祭。向こうの方に明るい体育館が見えて、ずんずんとバンド演奏の音

もしていた。

とはいえ、この屋上はやっぱり、ちよつと暗いのだが。

「ユウキくん、ここ好きッスね」

適当に声をかけると、向こうの方を見ていた彼女は、こちらへ振り向いた。

暗くて、もつとじつと見ないと、あまり表情はわからない。

「な。最後に、練習。しようか。心悟くん」

「ん？ なんの」

静かにこちらへ歩いてきて、ユウキくんは言った。

「好きです。愛しています、あなたを」

「っ……」

「受け入れては、くれないのですか」

——びっくりした。熱の入った声だった。

この暗がりの向こうにいるのは、あの偽物のお姫様だ。

「な、なに、急に。びっくりした」

口ではマイルドな驚きを装ったが、本当は、心臓が止まるかと思った。

脳が一瞬、「あれ？ いま女の子に愛の告白されたかな？」と判断しかけた。

まだユウキくんの表情はよく見えないのに、その声色だけで。劇の完成形……裏方と

して頑張ったセットや、長峰悠希のドレス姿を見届けたこともあつて。今日の前にいる人のことを、本物のお姫様が制服を着ているようにしか思えなかった。

「もう劇は終わったでしょ、ユウキくん」

「……………」

え、何この空気。まるでここが舞台の上で、彼女は、相手役の台詞を待っているかのよう、唇を引き締めたままだ。

う、うう。なんだこの辱めは。

えーと。じゃあ。次の台詞、なんだっけ。

「……………でっ、『でも、あなたは偽物だ。その気持ちも、きつと、つくりあげたものですよ』」

こんな感じだったか。

言い切つて顔が熱くなる。なんだよー、もー。クサイことするなよー。高校生かよ。けど、これで正解だったらしい、暗闇の中から、少女が近づいてくる。

そして、僕の胸に手を当てて。すがるように服を掴んで。

顔を上げて、星か月の灯りで、表情が見えた。

「あなたを含めた、私の世界のすべてが、この心を認めてくれなくとも——」

「私は、あなたを、愛しているのです」

「――」。

「……おい。何役に入ってるの？ キーモっ！」

「えっ。あ、うん。ってキモいっていうな」

「うりゃ」

胸をそのまま突き飛ばされる。ひどいっす。

それで距離が開いて、また顔色が見えなくなつた。

「どうだった。アカデミー賞とれる？」

「と、とれる」

「へへ」

とりあえず、満足そうな声が出た。

演劇は2位だったけど、今日という日のこの夜は、長峰悠希にとつて、つまらない終わりにはなっていないようだった。

「あー、熱……。……。えっと、そろそろ戻るかア」

けっこう肌寒いはずなのに不可解な言葉を漏らし、そして戻る宣言。何しに来たんだ、まったく。

散々僕を振り回し、ユウキくんは、さっさと屋上の出口に向かうのだった。がちや、とドアの開く音。いかん、閉じ込められる。

「あ、お前はもう少ししてから来い」

「え？　なんで」

「あー、えつと……あつほら。一緒に歩いて目立つの、嫌なんだろ。明日までは勘弁してやる」

「うわっ」

「帰る前に返して」

何か投げつけられる。屋上の鍵、のようだった。顔を上げると、ユウキくんはもう、ドアの向こうに引っ込んでいた。

僕を屋上に置き去りにして、まったく。なんだあいつは。暗いし怖いっての。

………。

………。

ていうか、あー、どきどきしたー。

中身ユウキくんじゃなかったら、この子僕のこと好きなんじゃないのって思ったね。

………。

ていうか、恋しそうになった……。

うん。

「はあ」

そんなことになったら、ユウキくんにキモがられて、嫌われちゃうしな。

それは、ちよつと、嫌だ……。

……一応、友達だし。

うん、とにかく気をつけないとな。あの女の可愛さヤロウには。

「……うーっ」

さっきの顔が頭から離れない。

しばらくお姫様恐怖症になりそう。

四月バカ、夏祭り

▽四月バカ

せっかく家に遊びに来てくれたので、今日はユウキくんをいじめようと思う。

これは、いじめられっぱなしでは友達として成立しないと思うので、バランスをとるために反抗していこうという定期的な試みだ。

といつても暴力という分野では到底こやつには敵わないし、そもそも僕は人相手に拳を握ったこともないので、物理攻撃いじめではない。

ささやかな嫌がらせや、嫌味を言うなどして、ネチネチ追い込めたらいいなと思う。ちようどエイプリルフールだし、なんか嘘つくか。

……「ユウキくんがよく行つてた繁華街のスィーツ屋、3月で潰れたらしいよ。」これだ。

「重大発表があるんだ」

と。僕ではなく、すぐとなりで腰を下ろしてゲームのコントローラーを握っていたユウキくんが、真面目くさった声色で言った。

「実は……彼女ができたんだ。悪いな、お前は童貞なのにオレだけ……」

「へえー」

ちなみに、今彼女がやっているのは一人用のゲームだ。起動するなり、僕が頑張つてレベル上げといたセーブデータを躊躇なく選び、勝手に先へ進めていた。

ていうか、おい。童貞なのは、中学にはもう女の子になつていたというユウキくんも同じでは？

このタイミングで突然そんなことを言うつてのは、当然これは嘘だろう。先を越された形になる。

しかし、彼女ができた、か。突拍子もない内容、というわけでもない微妙な加減だから「ウソか？ 本当か？」という疑心暗鬼をわずかに引き起こす、という効果はあるな。ユウキくんはオラオラ系男子だし、長峰さんの容姿は女子からも人気なので、本気を出せば彼女をつくるというのには可能なのでは、と思う。百合アニメの見すぎだろうか？

「それでお前とは、もうこうやって遊べないかもしれん。ごめんなさいつ、野原くん」
「ふーん。謝らなくてもいいと思うけどね」

「またまたー。強がっちゃって。寂しいだろ？ ん？」

とん、と肩をぶつけてくる。長峰さんの髪の毛のいい匂いがしたが、気にしないようにして画面を見続ける。声の調子からして、たいそうウザい顔をしているに違いない。

しかし、彼女ができた、ねえ。ちよつと乗つかつてみるか。

「いや、ちようどよかった」

「なにが」

「実は僕も真の彼女ができたよ」

「へ？」

ユウキくんの操作キャラが死んだ。あゝ、へつたくそだなあ。

「……へー。そりやすごい。感心しちゃう」

「エイプリルフルだからと思ってるでしょ」

「いやあ？ 信じるよ？ ただ、もし嘘だったら……んー……ラーメンにしようかな。

リーズナブルでお前も安心だろ」

「もう奢られる気にいる」

僕の金銭感覚では、ラーメン屋のラーメンは別にリーズナブルではない。高い。マジで。

ともかく。

茶化さない声色と表情を心掛け、となりの少女との会話を続ける。

「4月1日に言うのは、自分でもどうかとは思うんだけど、いまに報告しようと思ってたんだ。やっぱ嘘だと思われちゃうか……」

「いやーそんなことないよ。試しに、どんな女の子なのか言ってみなさいよ」

くつ。そう来るか。なるほど、架空の彼女について話すのは恥ずかしい。後でそれをネタにからかわれるかもしれないし。

もう降参するか？ いや、まだだ。

「まあ、ユウキくんみたいに横暴ではなくて。オタクに優しく。大人しくて控えめで清楚で、笑顔が儂げで、あと、食事は割り勘」

「ふーん？ それはすごおい」

画面内のユウキくんの分身が、ばしゅばしゅと敵キャラ相手に無双している。僕がレベルあげたんだがな！

「じゃあ、その存在しない女子の名前を聞かせてもらおうかな。ま、同級生にお前のこと好きな子なんてひとりも……ふふふん」

なんでこいつは同級生に僕を好きな子がいないことを確信してんだ。いるかもしれないだろうが。まさかひとりひとりに確かめたわけでもあるまいし。賭けるよ、ゼロではない可能性に。

くそ。ええと、同級生以外で、誰か仲良い女子、仲良い女子……。

そうだ。

すまん、ちよつとやってることがキモいけども、名前を借りることを許してください。

「深山さんっていうんだけど。図書委員の後輩」

無双していたゲームの主人公が、ウツとのけぞった。ダメージを受けたのだ。はい、油断するから。」

「みやま……？　後輩……？」

「さつきも言ったけど、大人しい子でさ。身長とか小さくてかわいくて、何より優しいんだよね。趣味も合うし。理想の彼女かもしれない」

「あ、そう。理想の」

別に深山さんをそういう目で見たことはないが、いやなくはないが、ともかく人となりに関しては嘘ではない。理想の彼女、とまでは別に思っていないが。

なんかユウキくんから追及が来ない。よし！　この流れで、ちくちく言葉を吐く！

「まあそういうわけだから、明日から家に来ないでほしいっていうか。あ、学校で話しかけるのも控えてほしいな」

「……は？　なんで」

「彼女より目立つ感じの女の子と一緒にいたらダメでしょ。それに、真のカノジョともっとふたりつきりで過ごしたいし？　申し訳ないんだけど、偽装彼氏はお役御免で」

なりてえよなあ僕も、女の子と、家とかイベントスポットで、ふたりきりになあ。この貴重な青春時代になあ。

「……友達、なのに？」

「ん〜。向こうからしたら長峰さんは女の子だからねえ。ごめんね」

画面の中の主人公が、アアアー！ という情けない悲鳴をあげて死んだ。

ウツウツ、長峰悠希といえども、まだまだゲームは他分野のように超人級とはいかないらしい。ゲームオーバーになったら交代制なので、次は僕の番だ。

……操作がないらしく、画面がゲームオーバー演出のまま止まっている。コントローラーを奪い取ってやるぜという気持ちで、となりのユウキくんの方を見た。

「えっ」

膝の上でコントローラーを握りしめる手に、ぽたぽたと落ちるもの。

長峰悠希は。

唇を真一文字にして、声も出さずに。ぼろぼろと、目から体液を分泌していた。

えっえっえっ。嘘。これ嘘、エイプリルフールのドッキリ？

ユウキくん、泣いて……？ これほんとのやつ？

は、初めて見た。いじめっ子の泣き顔。

僕が泣かしたつてののか？ あのユウキくんを？ まさかだろ。この人、大人に怒られたときのウソ泣きとか得意だったし……でも……うつ。心が痛い。顔が良い女の子が至近距離で泣いている。

……いやでも、なんだ？

この……ゾクゾク感は。これがいじめっ子側の見る世界だということなのか？ だとしたら僕は……

「……ウ、ウツソ〜！ 僕にできるわけないでしょ、彼女なんて。すいませんッス、くだらん嘘ついて、へへっ」

言つてて悲しくなった。

どうしたらいいかわからなくなったので、嘘でした〜を言ってしまった。先に認めただ方が負けなので、負けである。

「そんなのわかってるよ」

コントローラーを静かに床に置き。彼女は、

僕の胸倉をつかみ、立ち上がった。必然的にこちらも立たされる。

「ちよ……ちよほっ、ちよっ、エイプリルフルなんだからさ、ウソは許さないといけないのだからユウキくん」

「そんなルール知らんよ。………。どうしようかな」

早口で情けない鳴き声をあげる僕に、うつむく長峰さんは、何かに耐え忍ぶような震え声を発してくる。迫真のそれだ。いやこれは真だ。これは怒りだ。胸倉だけでなく、命をも握られている気がする。

やがて。

「歯ア食いしばれよ、舌噛まないようにさ」

髪の間から、赤く腫らした目元が見えた。

「しゅっ」

「ゴ。ツツ」

顎に何かがぶつかり、脳みそがゆれ……眼の前の景色が、ぐらりと……

「ふええ」

「あつヤバ、加減が、ごめん——いやお前が悪いな」

おそらく僕は、前のめりに倒れていつているとおもう。

頭を、顔面から、安心感をおぼえる柔らかいものに受け止められ、そのあとは、わか
らな、

………?

「ここはどこだ？」

「大丈夫ですか？ 野原くん」

綺麗な女の子が、横になっているらしい僕の顔を覗き込んでくる。まるで天使か女神
のようではないか。

異世界転生かな？

「ああ、いいですよ、まだ寝てて。ちよつと、ふざけすぎたし」

つて、綺麗な女の子じゃなくて、長峰悠希じゃないか。

あれっ、ていうかこの角度……枕にしてはやや硬めだが、ぬくもりと、もちもち感のあるソレ……。こ、これ、ひざまく……

「ん？ 7時……夜!？」

「おっおっお、どうどうどう、無理に動かない」

時計が見えたので、よく確かめようと起き上がろうとしたが、ユウキくんが上体を押しさえつけてきて、また温かい枕の上に戻された。

ちよ、なに。恥ずかしくないんすか、君は。

それと、あと。

「なんか、朝からの記憶がないんだけど」

「……えっ。覚えてない？ マジで？」

「ゲームしてたっけ。僕途中で居眠りした？」

この状況に至った経緯が思いつかない。身に覚えがない。頭がちよつと痛い感じはするが。

気恥ずかしさに耐えながら、ユウキくんの顔を真下から見上げると。

「ふうん……」

すっごい冷たい目つきを、長峰さんは僕に落としました。背筋が寒くなる。

というのも一瞬。彼女は、いつもクラスメイトと接しているときの笑顔を貼りつけ、顔を覗き込んできた。

「転んで頭を打ってしまっただけですよ。間抜けなんだから」

やたら近い。長い髪が、ゆるやかな滝のように流れ落ちてきて、僕の頬をくすぐった。

少し表情が変わって、怪しい雰囲気的微笑。両手をこちらの頬にあてられる。末端冷え性なのか、ひんやりしていた。

「今度から気をつけてね」

「は、はい」

で、そのまま。

外から帰ってきた妹の、ガハハという上機嫌なバカの笑い声が聞こえてくるまで、自分でもよくわからない恐怖感と、柔らかどっしりな太ももの感触が合わさった、変な時間をごすごした。

▽夏祭り

「お。これ……そうか、懐かしいかも」

妹が戯れにシュツと投げつけてきた新聞紙やら何やらの中に、夏祭りのチラシがあった。(妹は戯れにシュツとものを投げつけてくることがある)

近所の大きい公園を使った、地元の大人たちが催してくれるイベントだ。しかし個人的にはあまりこういったことに関心がなく、ここ数年はまったく足を運んだことがない。せいぜい、祭りの最後にやる花火の音が聞こえて来たら、家の外に出てそれを眺める、くらいのものだ。

けれど小さい頃は、毎年あのお祭りへ行っていた。幼少の頃は親に連れていってもらったり。小学生の頃は、友達と一緒にいたり。

それで……その友達っていうのは、まあ。ユウキくんだ。

だから。高校生ももう卒業するって歳だけど、久しぶりに一緒に行ってみるっていうのも。もしかしたら楽しんでもらえるんじゃないか、とか思ったりした。

スマホのメッセージアプリを使って、長峰悠希に、夏祭りのチラシの画像と、一緒に行かないかっていうニュアンスの文章を送った。

向こうもたまたまスマホをいじっていたのだろうか、10秒後に「既読」になり、それから大体1分後くらいに、

「行く」

と2文字だけ返ってきた。

お祭りの当日。祭自体は朝からやっているけど、約束は夜。

ふつうの半袖半ズボンの格好で、待ち合わせ場所である公園の入り口のひとつに行くと。

「なあ、声かけちゃう?」「芸能人かなあ」というような声がしたので、そちらを見た。人が行き交う中に、微妙に空いている空間がある。公園の門になっている植え込みのすぐそこに、

「うおっ」

目立つ人物が立っていた。

思わず足を止めて遠巻きに見ていると、向こうはこちらに気が付いたようで、嬉しそうに手を振ってきた。人々がしゅばばとこちらを向いたので、僕も後ろを向いて周囲に同化した。

「いやいや。知らんぷりするなよ、恥かくだろ」

腕を掴まれたのだった。

長峰さんは、僕がじろじろと頭からつま先までを見てしまっているのに気が付くと、にいつといたずらっぽい表情で目を合わせてきた。

そして、くるりとその場で一回転して見せた。

「夏祭りを一緒に歩くなら、浴衣の彼女のほうが好きだろ、とは思ったけど。想像より効

いてるねえ」

「いやその、お似合いです」

自分のみすぼらしい格好が申し訳ないくらいだった。周囲からも視線を感じるが、多分彼らからは、僕は長峰さんの近くに転がっている石ころにしか見えていないだろう。

それくらいに、浴衣を着ている長峰悠希というのは、特別だった。さすがにちよつとユウキくんとは重ねづらい。小学生の頃はふたり似たような恰好で走り回っていたはずなのに、その片割れが今やこんな姿になるとは。人生何が起きるか分からない。

「わざとわざとこんなカツコしてきたんだ。感想を聞きたいね。何点中何点？」

自信のあるやつ、ふてぶてしい聞き方だった。

「……それはまあ……、ひ、ひやく……」

「おーっと、聞いといてだけど、皆まで言うな」

腕を引かれ、公園に足を踏み入れる。こちらを振り返った長峰さんの後ろには、ぴかぴかの安っぽいライティングが、逆になんだかわくわくしてくる、お祭りの出店が並んでいる。

彼女はこつちを向いたまま、背後のそれらを親指で指した。

「点数は財布で示してもらおうか。君のお気持ち分、貢いでくれたまえ。ひっひ」

見た目はきれいでかわいい浴衣女子であるが、その、歯を見せてにっとする笑い方

は、遊び尽くす気満々のユウキくんだなと思った。

それでやつと、重なった。

どうやら出店のたぐいに全部寄る気だ。くっ……地域のお祭りの出店というのは、正直、得られるものに対してクソほど値が高い。

でも、今日の長峰悠希の点数を示せと言われてしまったら。

これはもう、財布が空になるまでは、こっちが出すしかないだろう。

ユウキくんの機嫌と引き換えに、どんどん財布が痩せていった。

もはや見る影もない。ミイラぐらい干からびている。

「ん、あれは……」

ユウキくんの声に反応して、前方を見た。

……あー。

奥からこちらへやってくる一団は、同じ高校生くらいの男女たち。どれも見たことはある顔で、おそらく、同じ学校の同級生たちだ。

同じ学校の同級生たち、ということはずなわち、総じて長峰悠希とは会話をする関係、あるいは友人なわけで……。 (お祭りに男女混合グループでやって来るようなタイプのやつらは全員、長峰悠希の取り巻きなので)

これは、長峰さんも一緒にまわろうぜ、のパターンになるだろうな。そうでなくとも、立ち止まって長話にはなりそう。何故なら浴衣姿がこの会場にいる誰よりもかわいいから。

ああ。あー。

友達と、友達の友達が会話してるときって、居心地悪くて苦手だ。逃げてしまいたい。「じゃあ向こうに行ってるから」とか何とか言っつて。ユウキくんとはいったんここで別れることになるかな……。

なんて、陰キヤラの極みみたいなことを考えながら、そのまま歩を進めようとすると。後ろから腕を掴まれた。

「な。あっち……。高台の、遊具があつたところ。行こ。ベンチとかあつただろ」
「え」

そう言つて少女は、違う方向に僕をひっぱつた。

向こうから、長峰さんの友達が来るのは、彼女も見えているはずだけど。

……本人が、そう言つてくれるのなら。

「ベンチ、あつたかな。よく覚えてるね」

「そんなに昔でもないだろ。……ほら！」

長峰悠希は走り出した。

「そういえば、進路って決まった？」

さつきより人の数が少ない、この公園の高台になっている場所に、奇跡的に空いているベンチを見つけて。

座って、ユウキくんがもりもり食事をしている横で、下の、出店群の灯りをぼーっと見ていると。

落ち着いたところで、向こうがそんなことを聞いてきた。

「大学に行くつもり」

「どこの？」

「××大。隣の県の……」

「あー。親の金で4年間遊ぶってことね」

「いやいや。大学生をなんだと思ってるの。ていうかアルバイトするし、一応親の金に頼るといのは、まあ、まったく言い返せない話なのだが。」

数年ののち働いて返していくということ、向こうは了承してくれた。

「学部学科は。学費いくら。部屋借りるの。どの辺に借りるの、大学の近く？」

「そんな根掘り葉掘り聞く？ えーと、理学部の……」

やかましいくらいに質問してくる。

それに対して一生懸命、頭の中で情報を整理し、聞かれたことに答えているときだった。

「ふーん……」

ユウキくんは、膝に置いていた巾着袋からおもむろにスマホを取り出し、タツタカと何やら結構な勢いで打ち込んでいた。

自分から聞いてきたのにスマホにうつつを抜かすとか、失礼すぎない？ 僕はムツとした。

こちらが言うことが無くなって、言葉が途切れると、彼女はちらつとこっちを見た。

「話終わり？ 他になんかない？ 来年について」

「ないよ」

ユウキくんはスマホをしまった。

え、人が話しているとき限定でスマホいじり？ 許せねえな。

「何だいその態度は、最近の若者めが」

「あん？ ……あ、バイトは何すんの」

「え？ わからん。そこまで決めてないツス」

ユウキくんは、腕組みをしてうーんと唸ったあと、

「ゲーセンの店員とかどう。楽しそうじゃね？」

「おー。いいかもね」

「な。いいよな。へへへ」

なんか、変な言い方をしたのだった。まるで自分のことみたいだな。

ああ、ユウキくんもアルバイトするつもりなのかな。

「……ん。そろそろ移動するか。いい時間だし」

「え？ 花火見ていかないの。わざわざ上がってきたのに」

「花火があるからだよ。人が増えそうだし。……誰かと会っちゃいそうだし」

たしかに。

僕は人混みが苦手だが、今はユウキくんもそうらしい。互いの理由は違うのだろうが。

現在の彼女は目立つ容姿をしているから、人々の視線が煩わしいのだろう。

あと、学校の同級生たちとも、今日はあまり会いたくないようだった。

それなら、花火は適当なところから眺めればいいか。感動は減るけれど、見ようと思えば、どこからでも見られはするのだし。

ベンチを立つ。僕たちは、来た道に戻ることにした。

少し歩くと、背の高い木の枝に、キラキラターの顔を模した風船が引っかかっているのが見えた。

そして、木の根元のあたりには、今にも泣きだしそうな顔でそれを見上げる女の子と、苦笑いする母親らしき人。お祭りの風物詩のような光景である。

いや、しかし待てよ。

これはあれだな。例えばアニメの主人公なら、なんらかの方法であの風船をとってあげるはずだ。その人柄や身体能力を、視聴者に示すことができるイベントだ。

そして案の定、長峰悠希は、この光景を見て歩く足を止めていた。

「ふっ……。わかっているよユウキくん。僕は見守っているから、あの子を助けてやりな」
主人公らしくな。

何しろユウキくんという小学生は、猿の化身のような少年であった。こんなどっしりした登りやすい木なんて、目をつぶって四肢のうち二つを封じても、10秒とかからないだろう。

「ああ？ お前……ハア。この格好で木登りができると思うか」
「へっ」

帰ってきた言葉は、予想していないものだった。

足元をじろじろ見る。きれいに着こなしている浴衣の裾と、涼しそうな下駄。
た、たしかに。木登りに適した装備ではない。

「自分が行く発想ないの？ ほらいけ、心悟」

「えええ」

背中を押され、女の子のすぐ近く、つまり木の前に出てしまう。

ちよつとまってほしい。何しろ僕という小学生は、ユウキくんが猿のように信じられない高さへ登っていくのを、下から見えていた記憶しかない。

登れねーよこんなもん。

一応やつてはみる。

女の子とお母さんを下がらせたあと、とりあえず、数分くらいじたばたと挑戦してみ。なんか満足したので振り返る。

「登れませんでした」

女の子、お母さん、長峰さんが、一様に呆れた顔になった。

「わかったよ、もう。すつとろいなア」

もうしわけない。

ユウキくんは、風船のひっかかっているほうを眺めたあと、地面——、木の根元を見た。

「じゃあ、野原くん」

ちよつと枝の真下のほう、にあたる地面を指で示し、

「そこに這いつくばれ♡」

と言った。

そんな綺麗な笑顔で……。

「四つん這いになれっていつてんの。けっこう強く踏み込むから、根性見せろよ」

お、俺を踏み台に!?

下駄でそれされたら背骨砕けるんじゃないの、と思ったが、さすがにそれは脱いでくれるようだった。

「はあ。せつかく綺麗に……浴衣……ったく。行くぞー」

プライドなどありはしないので、素直に指示に従う。まあ組体操みたいなものだろう。

合図にあわせ、心構えをする。

「おげっ」

足が背を蹴った直後、僕はひしやげた。

「よっ、よっ。ん……っつと。……あ！ つッ……」

「とれましたか」

大地を舐めながら彼女の声を聞く。しばらくして、身体を起こした。

はてさて、いかにしてそれをやり遂げたのかわからないが、結果として、風船は女の子の手に戻っていた。

「お姉ちゃんにありがとうは？」

「ありがとうございます」

長峰さんはしゃがんで、女の子の頭を優しく撫でた。

撫でられた方の様子を見ると、しばらく長峰さんの顔を見て、ぼーつとしていた。また風船を手放してしまわないか心配になる。

そのあと、何度も振り返って手を振る女の子が、人の波に遮られて見えなくなるまで、彼女は律儀に手を振り返していた。

アイドル仕草が染みついているか？

「おつかれッス。さすがユウキくんだった。……ほんじや行こー」

「ん。ああ」

一仕事終えたあと。ユウキくんはそこに佇んだまま、なかなか移動しようとしなかった。僕から歩き出す。

少し進む。

振り返る。

「どうしたの？」

「……別に？」

なんか、あまり進んでない。

そのあとも、進み、振り返り、「？」ってなるやりとりを、3回くらいやった。

やはり、あちらが、あまり進んでいない。ユウキくんとの距離が開いてしまっている。

4回目。また前を向く——ふりをして、すばやく振り返った。だるまさんが転んだ、とちゃんとと言わないといけないのを、ダルムスクールアア!!とやるやつの勢いである。そして見た。

ひよこひよこ、と、片足をかばう歩き方をしているユウキくんを。

あー。これって。

「足ケガした？」

「……………」

「……………」

「…………まあ、失敗することも、ある。5年に1回くらいは」

驚くことに、あのユウキくんが、木登りに失敗して足を捻るかなにかしたらしい。

これは、動きにくそうな浴衣姿の子にそれを任せた僕のせい、だと言っているだろうか。だからユウキくんは、格好悪くない。

「肩かすよ」

そう言っただけは、気が遣えるかつこいい男として、

己の両手をなんとなく顔の高さくらいまで持ち上げながら、長峰さんの周りをウロウ

口した。

やり方が……わからん！

「ん」

呆れた眼で僕のウロウロをしばらく眺めたあと、ユウキくんは、左腕をあげた。それらのポジションにつき、ようやく文字通り、肩を貸す。

そしてその後は……わからん。

「やり方くらい勉強してからかっこつけろよ。そっちの手でちゃんと腰掴んで。あつ、ふわッ、くすぐったいわボケ！」

「アッ……カッ……」

首を絞められた。

悪いが一人で歩いてくれないか。

このようなやりとりのせいで、僕たちは、おそらくユウキくんが片足けんけんする速さの、十分の一くらいのスピードで、やつとこさ、階段の下まで降りきることができた。

(階段ではユウキくんも暴れなかった)

疲れてしまい、お互い、階段の二段目と一段目に腰掛ける。ユウキくんの方が上。

あとは平坦な道だ。ある程度休んだら、さっさとつきつてしまおう。

ていうか、そろそろ花火始まっちゃいそうだな。

「……………なあ。……………てくれよ」

「んああ？ あんだって」

頭の上から、ごによごによと聞き取れないちゅちゅええ声をかけられたので、変な人を演じているときの志村けんの声真似をしながら聞き返した。

「おんぶ。してくれよ」

「ヘアア!？」

……………ええ。おんぶって、あのおんぶ。

……………ええ？ 嫌だあ。

「ええ？ 嫌だあ」

口に出してしまった。

「むっ。なんで」

「なんでで」

こっちの台詞だよ。何言ってるのこの大将は、急に。僕をお馬さんとも思っているらしいな。

まず、おんぶする理由がない。ケガをしているとはいえ、肩を貸してゆっくり進めば大丈夫みたいだし。

次に。自分で言うのも悲しいが、こちとら非力なインドアマンだ。そして何より

……、

長峰悠希は、でかい。

脚が長いゆえか、身長も男の僕とそう差はないし、身体能力の高さからして筋肉量もあるだろう。

そして、胸。下半身。

もうでかすぎ。

健康の権化みたいな女。

「お前が木登りできないのが悪いんじゃない。覚悟決めろや」

「わかったよ」

一段降りて、しゃがんでみる。

うーん。でも、やっぱり危ないんじゃないだろうか。それこそ大怪我に繋がる悪ふざけなのでは。

「じゃ、じゃあ。いきますけど」

背後から変な言葉遣いの声がかかると同時、白い腕が、顔の横から伸びてきて。

むにゅ、から始まる重みがのしかかってきた。

!!!

それまで何を考えていたのか、すべてを忘れた。

いまあるのは、素晴らしい。とても。という気持ちだけだった。

この人は、やっていることの自覚はあるのだろうか、ないのだろうか。ないとしたら問題で、あるとしたら大問題だ。

「ぬ、んんんん」

胸の感触に集中しようとする自分を、なんとかして追い出す。追い出しきれてないけど。

それから頑張つて、全身のけなしの筋力を奮い立たせ、立ち上がる。

いつもより近く。耳のすぐそばで、ユウキくんの声と息があたつて、こそばゆい。しかし、それにしても。

「——っ。くっ。う」

「……何さ」

なにさつて、大将、そりゃあ。

「お、重いツスわ」

「あ………？　なんだと？」

「羽のように軽いなあ」

そんな怒ると思わなかった。

重いものは重いのだが、正直に言えなくなつた。

「あつ、におい嗅ぐなよ」

「ふらふらするな」

「落とすなよ」

「……離すなよ」

「セクハラするなよ」

うるせ〜〜！ 耳元でちくちくちくちく！

「はいはいー、あと100メートル」

「ひい、ひい〜」

そして。

——どれほどの時間が、経ったのだろうか。

「20秒だよ」

そもそも何故僕はこのような苦行を？ もはや記憶がない。

重労働すぎるのと、背中にあたつてる乳がすごすぎて、心臓のバクバクがやばい。それに気のせいかな、身体の前からも後ろからも鼓動が鳴って、二重のサラウンドになるという、未知の感覚さえしてきた。

「ぶつ。つふぶ。ごめん、もういいよ、ありがとな」

公園の門を飾る植え込みは、コンクリートでできたその縁が、ちょうど腰を下ろすの

に良い高さだった。そこで、ユウキくんを降ろす。

とはいえまだ、待ち合わせをしていた場所、公園入り口のあたりに、ようやく戻ってきたばかりである。

「ふへえ、へえ。も、もういいの」

「うん。ここがゴールってことで。家の人に迎えに来てもらうからさ」

明るく灯ったスマホの画面を見せられる。ここで連絡してしまうということらしい。

僕は、ユウキくんのとなりに座った。

「……おっ」

どん、と音がしたので、空を見上げる。

ついに、夏祭りの夜、あたりを淡い光に染める花火が、打ちあがっていた。

ちようどいいタイミングかも。

「はー。僕、久々にこんな近くから見たよ」

「うん」

空に咲いていくそれらをじつと見ていると、どん、ぱらぱら、という音を聴いていると、なんだろう。

自分は花火なんかにもう興味はないと思っていたが、今この瞬間は、とにかく楽しかった。

ユウキくんはどう思っているだろうか。

思ったよりずっと派手に、次々と空に広がっていく花火の音と、人々の嬉しそうな声。これだと、となりの相手に話しかけるのにも、大声じゃなきやだめかもしれない。

「今日、来てよかったかも！ ユウキくん！」

「……、……」

いま、ユウキくんなんか言ったか？

なるべく耳を澄ませる。

「……たしも、そう思……よ」

「はああん!? あんだってえ!?!」

バレないと思つて横暴な言葉遣いで聞き返してみたが、やはり返つてこない。よかつた。

見どころの連続咲きをしばし眺める。

それから、やつぱり、ユウキくんが楽しめているのか気になって、隣を見た。

それで――、

息が、止まる。

色とりどりの花火に照らされた彼女かれは、その空も見上げず。

ただ小さく微笑んで、こつちを見ていたのだ。

「……………」

すぐに花火に視線を戻す。

なんじやあ今のは。

え、なによ。顔が良いな本当に。どうやらたまたま目があつたらしいが、正直ドキツとしてしまった。

……………。

浴衣は見えるわ、一緒に歩けるわ、密着できるわ、芸術品みたいな顔が見れるわ……、もしかして、僕はすごく、得してるのか？

い、いやいや。

あれの中身はユウキくんなのだ。いついかなるときも、それを忘れてはいけなくて、うん。

でないと大変なことになる。

大変なことに、なるのだ。

最後の花火からそう時間の経たないうちに、僕たちの前方の車道に、車が一台停まった。

運転席から降りてきたのは、ぴしつとスーツで決めた女性の方だ。

それをぼうつと眺める。かつこいい女のひともいるもんだな。

「お迎えに参りました」

「ありがとうございます、夕崎さん」

「ん？」

女のひとは、となりのユウキくんに話しかけてきて、

ユウキくんは、長峰さんになって、相手の名前を呼んだ。

「あ、え。あつ、こんばんは……」

立ち上がって挨拶をすると、向こうは慣れた様子で、美しい会釈をしてきた。

……長峰家つて、金持ちっぽいとは思ってたけど。

運転手が存在するランクの家!?

長峰さんはおもむろに立ち上がり、車の後部座席に乗った。足の痛みは、引いたのだろうか。それとも我慢しているのだろうか。

そして目の前の車。黒塗りの高級外車……なんて、分かりやすいものではないが。外觀は、スーパーの駐車場なんかでは見たことのない、内部も、ファミリーでひろびろと使ったりはできなさそうな、洒落たつくりの、なんかいい匂いのする車だった。

要は金のおいがするということだ。

僕にめっちゃおごらせるくせに。別にいいけど。

……どんな人生、辿ってきたのやら。薄々そんな感じはしていたが、家庭環境変わりますぎだ。

まあ、知ったことじゃない。ユウキくんの家のことは気にしないのが、子どもながらに、昔から、暗黙の了解だったのだから。

「野原くん。ちよつと、ちよつと」

見送りモードで突っ立っていると、ドアを閉める前に、長峰さんが小さく手招きしてきた。

「んー、何？ ですか？」

「耳貸してつてば」

近くに行き、言われた通り片耳を差し出す。ひっぱったりするなよな。

長峰さんは、そつと顔を近づけてきて。

「……今日、楽しかった。ありがとな、誘ってくれて」

ささやかれた耳が、くすぐつたくて、熱くなつて、思わず手で押さえた。それを見て、長峰悠希ユウキは愉快そうに笑った。

「じゃあ、またね。野原くん」

浴衣姿のお嬢様。彼女が乗った車を、見送る。

ドアが閉まった。友達の乗った車を、見送る。

今日は……、

というか、今日も。

僕だって、楽しかった。

大学① 近すぎる家

▽近すぎる家

5月。連休が始まる時期。

帰省することもなく、できたばかりの友人たちと交流するでもなく、自分がこれから4年お世話になるだろう、狭くも新しい部屋で、だらだらと過ごしていた。

学生向けの賃貸で、築年数がなんと2年目の新品。1階の端っこ。かなりの良物件じゃないかと気に入っている。

「……………」

朝の静かな時間。こうして黙ってベッドに寝そべっていれば、音に悩まされることなどないはずだが、今朝はずっと隣の部屋から、ガタガタと模様替えか何かの音がする。

あと、一階ゆえは常に閉めきついているカーテンの隙間から、外を見ると、でんと引越業者のトラックが停まっていた。

これらのことから、隣の人がお引越しに関する作業をしていることは推測できる。

が、何故この時期に引越しが発生するんだろう。4月にはもう誰かが住んでいたはずで、新しく引越してくることはないと思うのだが。

出ていくところなのかな。なぜ？

まあ関係ないか。

薄い壁とはいえ、高校時代と違って、この部屋は僕だけの城なのだ。アホの妹がノックもなしに入ってくることもない……すばらしい。

このプライベート空間が守られるのなら、隣からたまに音がしたってどうってことはない。

イヤホンで耳を塞ぐ。今日は、お昼までこのままゆつくりすることにした。

あれから二日後。

高校のときの貯金プラス親からの借金で買ったパソコンの画面に、流行りのアニメを映して楽しく過ごしてしているときに、ぴんぽん、と呼び鈴の音。

ドキッ、と心臓が一跳ね。そして直後に、若干テンションが下がる。

誰だろう。大学の友人を呼びつけた覚えも、宅配便で届く何かを注文した記憶もない。

となれば、十中八九、例のテレビ局の集金人さん。あるいは宗教勧誘か。学生の部屋には必ず彼らがやってくると聞く。

ああん？ うちテレビないよ。テレビ放送が見られるスマホは持つてるだろうって

? スマホもないよ。

などと、面と向かって言う勇氣もない。居留守を決め込むことにする。

一応、相手を確認するため、忍び足で玄関に向かう。すると、ドアの向こうから人の声。よく耳を澄ませる。

「こんにちは。お隣に引越してきたものですー」

「!？」

……ウヒョオア!! 女の声!!!

いかん、女に飢えすぎて漫画の小悪党みたいになってしまった。

だがしかし……なんと清らかな声だろう。現実にはドアの向こうからなので、くぐもってイマイチ聞こえないのだが、心で理解した。田舎からやってきた純朴で垢抜けない、心優しい少女に違いない。

ドアアイから外を覗く。

幅広の帽子を深く被ってうつむいていて、顔の全貌が見えないが、その服装は、声から得た印象を裏付けるような、清楚な白いワンピース。夏の美少女という感じ。これはもうかわい。天使だ。

しかも、おい。胸がでかいぞ。

やった。

大学生活、勝ち。

1階なのにこんな、100億点満点の女の子がとなりに引つ越してくるなんて。これは、この子は、僕が守護らねば。

「あれ……いないのかな」

いかん、行つてしまふ。あいさつをせねば！

すべての警戒心を捨て去り、僕は笑顔を浮かべながらドアを開けた。

「は、こんには」

果たして、ドア越しの美少女は、生で見るとさらに美少女であつた。顔を見なくともわかるほどだ。いい匂いのするオーラを放出しているというか。

ちよつと心をウキウキさせながら、なるべく視線が胸とかに吸われないように気をつけつつ、相手の顔を見る。

彼女は、帽子の下の、愛想のいい笑みを浮かべていた小さな唇を……

にやりと、愉快そうなかたちに変えた。

「あれえ〜？ その気持ち悪い笑顔はもしかして？」

優雅な仕草で、金持ちのお嬢が被つていそうな帽子を取つたそいつ。

その瞬間、目元、髪型、意地の悪そうな表情、すべてが明らかになつた。

「心悟くん？ うわ偶然！ 奇跡〜！ こんなことあるんだ〜」

「ヒュツ……」

心底嬉しそうに笑う、見たことのある女がそこにいた。

幻覚かな？

僕は無言で、ドアを閉めた。

「あつ……こら！ 開けろや！ オラ！ ボケコラ！ つすぞゴラア！ はよ開けんかいワリヤア！」

どん、どん。怖い。宗教よりも国営放送局よりも……。ヤの事務所にカチコミする大阪府警くらい怖い。

ドアを背に、うずくまって耳を塞ぎ、がたがたと震えていると、やがて恫喝が収まった。

い、行ったのか……？ やはり二度寝中の僕が見ていた悪夢だったのか？

「仕方ないな。まったく」

「え……？」

かちやり。

何かが、いや、鍵が、回る音がして。

きい、と、背中を預けていたドアが、外へと開いていく。

バランスを崩し掛け、倒れそうになるのをなんとか堪え、僕は、上を仰ぎ見た。

長峰悠希が、にっこりと笑って、こつちを見下ろしていた。

「……なんで、うちの鍵を……？」

「んー？　なんでだろうね。とつても不思議だね」

これ警察呼んだほうがいいか？

「ちよつ、そんな顔すんなつて。合法だから。たぶん。……そうだな。大家——、という、漢字二文字だけを送っておこう」

ど、どういふことだ。

大家さんから鍵を奪い取つた？　大家さんから大家の座を奪い取つた？　どつちだ。とりあえず違法に違いない。ユウキくんだしな。

立ち上がり、じろじろと疑いの目を向ける。

くつ。こんな、さわやかで清楚な服を着て、うまく化けやがつて。彼女がいつも纏っている、ネフェルピトのオーラムみたいな禍々しいモヤモヤが抑えられている。正体がわかつていれば、まんまと在宅を明かしたりはしなかった。

「引つ越して、ほんとに隣に？」

鍵を指で弄びながら、僕の背後の空間を覗こうとしているユウキくん。覗くな。

引つ越しの話題に戻すと、彼女はパツと顔を明るくさせ、こちらに向き直つた。

「うん。元々こつちの予定だつただけど、前の部屋主が出ていく時期が諸事情でズレ

ちやつてさ。これでやつと仮宿とおさらばつてわけ」

ひひひと笑ったあと、長い髪を耳にかけ、こちらの顔をのぞき込んでくる。

「そんなわけで、これからよろしく、お隣さんっ」

仕草とセリフは清らかかつ可愛いが、いたずらっぽい目つきは恒例のもの。

大学での時間、だけでなく。どうやら他の、自由だったはずの時間さえも、僕は彼女に支配されることになる可能性が出てきた。このガキ大将がよ。

「いつまで表で喋らす気だ！ どけどけど！ ……ヒヤア、これが女友達のいない男子大学生の部屋か。キモいな」

そしてズカズカと人んちに入ってしまった。

えっ、実家以上にプライバシーがない……？

▽

8月のある日、対面に座る長峰悠希は、こう言いだした。

「飽きた」

小さいちやぶ台を挟んだ向こう側。アツアツのチャハハーンを半分ほど胃に収めたところで手を止め、不服そうな顔でそう言ったのだ。

「まさかとは思いますが、僕のつくったこの至高のメニューのことじゃないだろうね」

「そのことですな」

「何イ……」

いまこやつが飽きたと斬り捨てたのは、僕が晩御飯に振る舞ってあげたすばらしい料理のことだ。

うむ。

僕も実家にいたときは、料理をしてくれた母に、「このメニューは飽きた」などと言ったことはあるが。

なるほど。これはムカつくな。顔が良ければ何言ってもいいと思うなよ。雑巾食わせてやろうか。

ていうか、なんでこの人は飽きるほど連日、僕んちで飯食ってんの？ おかげで二人分作るのが当たり前になってしまった。

「雑巾食わせてやろうか」

「だ、だってキア。いっつも出てくるのが決まってるじゃん。チャーハン↓焼きそば↓生姜焼き↓蒸し鶏↓パスタ↓チャーハンじゃん、繰り返しまでが短いじゃん」

「十分すぎるレパートリーでしょうが」

「炭水化物多すぎなんだよ、太るだろ。……ていうか最近、脂肪が……ブツブツ……」
「きさまにこれ以上の料理が作れるというのか」

ユウキくんが台所に立っているところなど想像もできない。ふん、きみにはできま

い。

そう思つて投げた言葉だったのだが。

それを聞いて、彼女は……なんだろう。しばらく目を合わせたあと、目線を泳がせ。しかし口の端っこは上げて、こちらをうかがうような上目遣いの視線をチラチラ投げかけてきた。

どういう感情の表情？

「な……なあ。そういうことなら……たまには、というか、明日の夜は、さ」

悠希さんはコップを両手で抱え、それで口元を隠した。

そのままくぐもつた声で、

「オレの部屋……来る？　晩飯食べに」

「行きましょう」

「はやっ」

と言つた。

相手が何を言つたかを認識したころには、僕はもう返事をしていた。

ユウキくんとはいえ女性の部屋——あついや、友達の家。当然行きたいぜ。他意はない。

そして翌日。

自分の部屋を出て、徒歩3歩のところにある、長峰悠希の部屋。そのドアの前で、僕は緊張していた。

女性の部屋に入るのは初めてだから、というだけではなく、よく考えたら、『ユウキくん』の部屋』に遊びに行くのは、これだけ長い付き合いをしているにも関わらず、人生で初めてのことなのだ。

子どものとき。それとなく遊びに行っていたいいか尋ねたことはあった。しかし、なかなか強く拒否され、以来、ユウキくんの家に行っていないかと聞いたことはない。もちろん、高校生のときも。お互いに、ユウキくんのところで遊ぶ、という選択肢は、もうずつとなかった。

それがいま、初めて、向こうから誘ってきた。一大事である。

うれしいような。不思議なような。

よし。

と心の中でつぶやく。子どもの頃、友達の家の呼び鈴に手を伸ばしたときの、あのドキドキがよみがえる。いや、それがさらに倍増されたような感じだ。

深呼吸を何度か繰り返して、ようやく、キンコン、と彼女を呼び出す音を鳴らした。

耳が敏感になっているのだろうか、しつかり閉じているはずのドアの向こうから、ぱ

たばたと足音が近づいてくるのがわかった。

内側から、ドアが開く。

そうして現れた、部屋着姿の長峰悠希の姿を見て、数秒ほど無言になり。

「や、やあ」

とだけ絞り出した。

「あれ、あと30分あとの約束じゃなかったっけ。まだ掃除終わってねーんだけど……」

「あ……そうだっけ。ごめん、出直すよ」

見れば彼女は、長い髪の一部が首にひっついていて、汗をかいているらしかった。あと、肩や首元をさらした薄着だった。やりとりの途中、ほんの一瞬、胸をチラ見してしまい、向こうの目つきがムツと鋭くなる。すみませんでした。

ドアを閉めようとする。

が、腕を掴まれた。

悠希さんと目を合う。何故か本人も、きよとんとした顔をしていて、どうやら反射的に掴んだらしかった。

「あ、えと。……汚くてもいいんだったら、まあ。どうぞ」

お邪魔します、と言って、一番仲の良い友達の部屋へ、初めての一步目を踏み込む。

「あ、そのスリッパ使って」

そして、互いにばたばた音を鳴らしながら、後をついていく。

きよろきよろと内装を無遠慮に見る。同じアパートなので、同じ間取りだ。

玄関。僕の、安いスニーカーと安い運動靴とスリッパみたいなサンダルしかない玄関と違い、ショートブーツやら、ローファーやら、底の厚いおしゃれサンダルやらが並んでいる。スニーカーもあつたが、革製でつやつやしていてかつこよく、値段が僕のは違いそうだった。

次は細い廊下。1Kの部屋なので、キッチンがあり、冷蔵庫なんか置いてあつた。キッチンは普段から使っている様子がある。朝は自分で作っているのだろうか？

そして、ドア。この向こう側が、リビングということになる。

悠希さんは取っ手に手をかけ、そして、こつちをちらつと見た。

なんか、向こうも、変な顔をしている気がする。緊張してるみたい。まさかな。かちやり。

キッチンまでは僕の部屋とそう変わらなかったが。

果たして、リビングは、あそことはまるで別世界であつた。

机やベッドの配置は違うし、一部にはカーペットが敷いてある。姿見とか、でかいぬいぐるみとか、うちにはない物がある。掃除が終わっていない、というわりにはキレイで、というか、なんか、匂いが違う。彼女の髪のような、甘い香りがする……気がする。

想像したユウキくんの部屋とは全然違っていた。まるで、長峰さん、の部屋だった。
……感想を、口にして述べるのならば、

「女の子の部屋っぽい」

「女の子ですからねえ……」

「えっ」

「えっ、てお前。」

別にこっちは彼を、全く女の子と思っていないわけではないのだが、本人の口からそう言われるとは思わなかった。

「仕方ねえじゃん、親とか妹とか来るんだからさ。キャラに合った女の子要素が必要なわけ。お前の○○臭い限界男子部屋のようにはいかないの」

「おい」

女の子だというなら、女の子の口から聞きたくないことを言うな。それにそんな臭いは断じてしない。

しかし。長峰悠希としてキャラクターを意識した部屋、と本人が主張する割には……
なにか……違和感が。そう感じて、改めて部屋の様子を見る。

……!! あ、あれは……!!

部屋のある箇所に、目が吸い寄せられる。あの、普段生きていて全く縁のない、独特

のレースやらが施された布きれは！

普通に下着が干してあるッ！

「きやー、エッチ。訴えようかなア」

僕が何をガン見しているか、部屋の主には筒抜けだったらしく、背後から声がかかる。いつの間に後ろに。いや、僕が思わず前に出ていたというのか。

ひとまず、さっと両手で目を覆い隠した。

「ひどい畏」

「ラツキーですなあ、いいもの見れて。30分後には片付いてる予定だった」

そばを通り抜けられる気配。指の隙間を開けて彼女を見る。

干していた洗濯物をもそもそと下ろし、それらをまとめて、部屋の隅に積み上がった衣類の山に追加していた。どうやらちゃんと畳んでいない。

ズボラ……！ 大学ではけっこう衣装持ちな感じで、他の女子からひとつ抜けてるの。これが真実の姿だったか。

「さ、どうぞ。くつろいでください」

彼女はそう言って、ベッドを手で示した。

いやいや。たしかにあなたをよく人のベッドに腰掛けてますけど。こんな部屋のこんなベッドに、僕みたいな男が尻を落ち着けられるはずがない。

ということ、おそらく食卓にしているテーブルの前、カーペットが敷いてあるエリアに腰を下ろした。

「ていうか妹いるの？ ずっと一人っ子だと思ってた」

緊張をごまかすべく、適当な話題をふる。

悠希さんは、リビングを出た。何をしているのか首を伸ばして見てみると、冷蔵庫を開け、中を覗いていた。

そのまま、若干遠くなった声で返事がくる。

「ん？ あー、まあな。妹っていつてもあっちの……父親の子だし」

「おっ、複雑な家庭事情」

「だろー」

ユウキくんの妹を想像しようとするとかソガキみたいな少女像しか頭に浮かばないが、長峰さんの妹と思えば……さぞ、かわいらしい箱入り娘のお嬢さんなのでは。まだ幼くて、一挙手一投足が微笑ましい、こう、世間知らずな、可愛い感じの……。

「いま16歳」

「ほう」

頭の中で作り上げていた10歳ぐらいの子供が消え去り、高校時代の長峰悠希に似た、立派な体格の少女ができあがった。いや容姿は似てないんだろうけども。

「美人ですか？」

「殺すぞ」

「美人か聞いただけで……？」

「写真あるけど、お前には見せないからな。キモいから」

悠希さんが戻ってきた。べん、と、目の前の、僕んちのちやぶ台よりはだいぶ大きいテーブルに、お茶のペットボトルと、紙コップが置かれた。

お客様には紙コップで対応するのか。そして自分はマイコップを使うってことだな。いいね。

と思ったたら、本人も紙コップにお茶を入れてゴクゴク飲んでいた。その様子をじっと見上げる。

「ぶあ。……何？ 飲んでいいよ」

「紙じゃないコップなの？」

「あるけど、洗うのめんどくさいから使ってない」

ズボラ……！

「さて……。じゃあ、まあ、その。お腹空いてる？ 晩飯作るけど」

「いいんですかい、兄貴」

「いつもオレばっか食ってるから、返済ね」

にこ、と朗らかな笑顔をつくる悠希さん。

胸が締め付けられる気持ちだ——返済という概念が、この人にあつたなんて。僕はいま、感動で泣きそうになっている。彼は一生ジャイアンのように生きていくんだと思っていた……。人は、成長するのだ。

しかし、長峰家の令嬢の手料理か。どんなのが出てくるんだ？

「なに作るの？」

「ないしょ」

期待させるじゃないか。

悠希さんがキッチンへ向かうのを目で追う。薄いトップスなのはさつきも確認したが、下はショーパンで、相変わらずどっしりした四肢が眩しすぎる。自分の部屋だとこんな格好なんだな。

やばくなりそうなので、目で追うのをやめる。

……………。

やることがないな。

「あの一。手伝うツス」

「あー？ いらんし、座つとけば。テレビのリモコンあるつしょ」

言われるがまま、とりあえず部屋の隅つこのテレビを点ける。僕の部屋にはゲーム用

のモニターしかないので、テレビ番組は久々だった。

バラエティ番組で、ゲストに若い女優さんが出ていた。映画の宣伝をしている。誰かさんのほうが容姿は上だなと思った。

しばらくして、ちら、とキッチンの方を見る。

「ウオツ」

髪を上の方で一つ結びにして、あの薄着の上からエプロンをした長峰悠希が、機嫌良さそうに台所に向かっていった。

ええ……。

やばいな……。

ぎゅっと自分の内腿をつねる。痛っ。……いやあなんとというか、マジメなんですわ、エプロンなんかしちやって。

「——できた!」

煩惱を断つべく無の境地への到達を図っていると、嬉しそうな声が耳に入る。いつの間にか、それなりの時間が経っていたのだろうか。

いや? あんまり経ってない気もするけど……?

エプロン姿の悠希さんがやってくる。僕は彼女を直視しないよう、相手の斜め上の何

もない空間に意識を集中した。

やがて、小さな食卓に置かれたのは、あつあつの湯気を立ち昇らせる一杯の……

「インスタントラーメンやないかい」

いらんでしょエプロンとか。逆に何してたの台所で？

テーブルの向こう側に悠希さんが座る。ウツ、直視してしまった。

「何かね？ お前の出すパスタと、味のランクは同等だろ」

「なんだとお……！」

言っではいけないことを。

「がっかりー」

「そう言うなよ、ちゃんとアレンジレシピ？ してるから……この前テレビで見たやつだから」

たしかに、具とかちやんと乗ってるし、なんかスープにいろいろ入ってそうで、見た目がごちゃつとしている。

つまり、まずそうだった。

「いただきます……ん〜！ 天才の仕事〜」

作った本人は満足そうだ。僕も、彼女に向かって頂きますをする。

ずる。

「あつうまい」

そう言うのと、悠希さんと目が合った。

そしたら、いひひ、と眉を吊り上げて、嬉しそうに笑った。

お互い食べきって、食器をシンクに片付けたあと、彼女は手に何かを持って戻ってきた。

「デザートあるぞー。じゃーん、チョコレートクッキー」

「ラーメンと組み合わせ悪っ」

甘い焼き菓子。個人的に、ラーメン食った後に食べようとは一ミリも思えないのだが。

目の前のテーブルにそれが置かれる。タッパーに乱雑に収まっているが、一個一個のかたちは凝っていて、きつと、どこぞのお店の品を移し替えたものだろうと思った。

「買ってきたの？ お高そう」

「んー？ ……まあね。甘いのが好きなんで。あ、コーヒーとお茶があるけど？」

「こっちの冷たいお茶でいいよ」

「うーい」

テレビを眺めながら、もそ、と口にひとつ運ぶ。

あつこれ美味しい。ちょうどいい甘さだ。

つい、もう一個取ろうとテーブルの上に手を伸ばす。すると、一緒にテレビを眺めていたと思っていた悠希さんが、こつちをじつと見ていたことに気が付いた。

机にやや行儀悪く、肘をついて、頬杖で顔をむにとさせながら、聞いてくる。

「味はどうかのお、心悟プロ」

「ん、うまい。いい値段しそう」

「……ほんと？」

悠希さんは、頬杖から顔を上げた。

「につひひ……。いい舌してるじゃん」

何故か。

目を細めて小さく歯を見せ、はにかんだ笑顔……照れたようにも見える表情になった。さつきも見た顔だ。

可愛い。何か知らんけど。

……あついや、普通。

大学② お酒

▽お酒

飲める歳になると、酒の席、というものが人生の中に追加されるようになる。

今夜は学科の飲み会。その実態は、企画者の先輩が、狙っている女子との仲を進展させるための催しである。僕は人数合わせに呼ばれた。

学科の人と仲良くなつて損はないので、うまく交流を深められたらと思う。あとあわよくば彼女ができたらいいなと思う。

無言で枝豆をつまむ。

人の声がうるさい居酒屋。お酒が入ればそう気にならない。向かいの席には、大学生らしいあか抜けた女子学生。ひとつ上の先輩だ。途中までは話も弾んで、楽しい夜になりそうだが、僕も陽キャラデビューだぜ、などと。

思っていたのだが。

「まさか飛び入り参加してくれるなんてな〜」

「長峰さんもこういうところ来るんだ」

「席替えタイムにしない？ なあ」

なぜこいつがいる？

後輩なのに上座という端っこに座る僕から、最も離れた位置。テーブルの対角に、参加男女すべての視線を集める女がいた。

「突然やってきてすみません。成人したら、こういうことを楽しんでみたくて」

そうやってみんなに満点のほほえみを向けるから、彼氏役を作っても誰かに言い寄られるんだと思うけど。あのキャラやめられないのだろうか。

というか、学科が違うのに何故いる。誰が呼んだ。

まあ、この人数、この位置関係なら、同じ空間内にいるとはいえ、ほぼ関わることはない。僕は僕でお酒の席を楽しませてもらうからな。

と、思っていたら、合コン特有の席替えが行われた。

5回くらい。みんな、誰かさんの近くに行きたがったからだ。

そして結果として、ついに隣同士になってしまった。

「お隣失礼しますね」

よそ行きの高い声でそう言った悠希さん。座るとすぐに、こちらの足をつねってきた。

いいでで。小学生か？

「長峰さんはどこ出身だっけ。家どこらへん？ ラインやってる？」

「ライン？ さあ……。文通なら」

嘘つけ。

「出身は〇〇県の××高です」

「あつ」

「へへ。……あれ、××高校つて。野原、お前と同じじゃない？」

「いいえ？」

「はいつ。心悟くんとは——」

「すいませー……ん。あー、カシスオレンジ？ ふたつください」

重要な情報を口にしようとしたので、悠希さんの言葉を遮る。

大方、僕が彼氏だという情報を、大学でも広めようと画策してやってきたのだろう。そうはいかん。あわよくば女子大生と仲良くなりに来たんだ僕は。

「……………」

キルアに心臓を盗られた人くらいある握力で足をつねられ、肉をむしり取られた。

ふん、そうやって僕を牽制しようつてんだな。思い通りにはいかんぞ。

やってきたカシスオレンジを悠希さんの前に置く。

「どうぞで」

「ん？ ……えと、ありがとう」

少し戸惑うような表情を見せた悠希さんは、上目遣いで髪を耳にかけながらお礼を口にした。え？ 仕草があざといんだが。何を狙っている。

しかし、悪いね悠希さん。これは気遣いでもなんでもない。

これは攻撃だ。飲み会にいられると厄介な人（嫌いな上司など）は、こうしてたくさん飲ませて「潰す」のだ。バイト先の社員さんから教わったテクニクである。

そうして、しばらくして。

「……すう。……すう」

「ヤバ、なんだこの生き物。持ち帰っていいの？」

飲み会がおひらきになる頃には、果たして目論み通り、悠希さんは酔いつぶれていた。意外な弱点だ。

そして、今日の参加者の中で一番かわいい女子の先輩の肩に寄りかかっていた。うらやましい……！

会計を済ませ、参加者たちが続々と表に出ていく段になっても、悠希さんはうつらうつら、ふらふらとしていた。起きてはいるようだが、半まなこだ。

……やりすぎたっばい。

「どうするよ？ この子はやく帰らせないと、そこらのチャラ男にお持ちかえりされちゃうぜ」

「いや、ウチが持ち帰る」

「どうするよ？ この子はやく帰らせないと、そこらのチャラ子にお持ちかえりされちゃうぜ」

うーん。失われるはずのない彼の童貞が、ついに奪われてしまうのだろうか。先を越される。

残った先輩ふたりと僕は、ちょうど最後に悠希さんと話していたグループだ。長峰悠希に下心のある絡み方をしていなかったのも、個人的に印象が良い。

岡谷先輩（女性の方）が彼女の手を引いて、やっとこさ店を出る。

他のメンバーたちは少し離れた所にたむろしていた。二次会のカラオケに行く行かないの話でもしているのかも。

「冗談はともかく、送ってあげないとねー。ここでほったらかしにしたら心配だし。……でも、家わかんないな。おーい、ユウキちゃん」

「はいはいはい、俺が行きます。彼女を家に送り届けます」

「あ？ 殺されたいか？」

「えっ怖……なんで……？」

「（この子がかわいいとはいえウチという女がいながら他所に現を抜かすことを）許すと思うか？」

「え……？　ごめんさい」

「あ、あの」

二人の会話に入る。

悠希さんを部屋まで送ろう、という話だった。そういうことなら、誰がそれをやるべきかは明白だ。

「僕、この子の家知ってるんで、その。送っていきます」

酔いつぶれるように仕組んだのは僕だ。我ながら、よくないことをした。

一瞬、ふたりが訝しむ表情でこちらを見てきて、心臓にひやりとしたものが刺さる。よく考えてみれば今の僕は、傍から見れば、人気の美女を酔わせてふたりきりになろうとしているヤツ、である。

まずいな。

でも、かといって。

他の人に、悠希さんを任せるのは……、嫌だ。

「野原、お前……」

ヒロシ先輩（男性のほう）がおもむろに口を開く。

「長峰さんと付き合ってるって本当だったん？　そういう噂あるけど」

「えっ！　マジで!?　宝くじで一等当てるよりすごいけど？」

ふたりの視線が、ふらふらの悠希さんと、僕を交互に比べている。釣りあっていないなあ、とか思われているのだろうか。全くその通りだ。でも。

「はい。高校生のときから」

……ついに、自分から言ってしまった。でも、これなら、彼女を連れて帰る正当な理由だ。

……まあ僕が言ったところで、悠希さんが肯定してくれないと誰も信じないか。どうしよう。

さて、先輩方の反応は。

「なんでこんな飲み会に来たんだお前」

「犯罪だろ。この子キミに釘差しにきたんじゃないの？」

「あー……っす。ツス」

非難された。

違う……違うのだ。違わないが……違うのだ……。

「悠希さん、おーい。帰りますよ」

「んうう。あい。あい」

「ウオツツ」

半まなこの長峰悠希を起こそうと働きかけると、僕の腕にしがみついていた。

いい匂い。そして服越しでもわかるこの感触。あーっ、あーっいかんいかん。

「くああああ、許されないわこの男は」

「早く死ね」

「ひどすぎませんか？」

「妥当である」

「いずれ地獄行く」

先輩方は抜群のコンピネーションで僕を口汚く罵った。

その後、なんだかんだで、ふたりして駅までついてきてくれた。

「ギイイツ、重い」

アパートに帰ってきたところまではなんとかなったものの、そこからはぐてつと力を抜いて己の部屋の鍵を開けてくれない悠希さんに業を煮やし、とりあえず自分の部屋に誘導した。

そのまま、こいつが普段くつろいでいる僕のベッドに投げ捨てる。

これでようやく一息つける。相棒の座椅子に腰を下ろし、はーと疲労の息を吐き出した。

「んん。んううーん。んんんー」
うるせ。

酒に酔った人ってなんか、横になってもやかましくなるね。僕の父とかもそうだった。やたらでかい声であくびしたり、こうやってうなされてるみたいな声出したり。

だが眠りに入るのは早くなる。

悠希さんはちようどこちら側に、丸めた背中を見せている。ほーれ、背中とんとんしてやる。眠れ、さつさと眠るがいい。

子どもを眠らせる母親のごとく、ゆったりしたりリズムでとんとんする。

「んー。んう。……んあああつ、寝かしつけるなっ！」

長峰悠希は上半身を起こし、人間の言語を発した。

チエツ、と口から音が出る。思わず鳴ってしまった、心底からの舌打ちだった。

そのままベッドから降りてきて、いつもの定位置、ちやぶ台の向こう側にどすと座る。寝ぼけた目つきだ。

「^二に^次じ^会かいを……やりませ

そしてだみ声でそう言った。

頼むから寝てくれんか。

とりあえず冷蔵庫からお水を出し、悠希さんがいつも使っているコップに注いで目の

前に置いた。

彼女はそれをぐびぐびと喉に流し込み、そして、僕をにらんだ。

「おまえっ！ おまえなーおまえ」

「なんですか」

「あの女の先輩のことばっかり見てただろ。顔がかわいいからって」

「いや、対面にいたからだけ。それはそれとしてたしかに可愛いと思ってたけど」

「なんで。なんでなんでなんで。わたしがいるのに。オエツ」

絡み上戸だったか……。

なんで家に帰ったタイミングで元気になるんだ。めんどくさい。

「わかった。着替えてくる」

「え？ うん。え？ いやそのまま帰っていいよー」

全く脈絡のないセリフを口にしながら、悠希さんは突然ピンシャキと立ち上がり、速足で玄関から出ていった。

脈絡がなさすぎて、ページ飛ばした漫画かとおもった。

出ていったからには、自分の部屋に戻ったのだろう。隣の部屋から玄関の開け閉めの音はした。

そして、数分後に戻ってきた。戻ってくるなよ。

僕はあくびをしながら、玄関の音に振り向いた。

「じゃーん。これでどうだ」

「……………」

長峰悠希（20）が、高校時代の制服を着てドヤ顔をしていた。

……………。

いかがわしい店？

「ほらあ、これがええんやろ。嬉しいでしょお、心悟くん」

何を考えているのかわからんが、久しく見ていなかっただその姿を見せつけてくる。しかしそれは、寝ぼけた状態で着替えたからか、あちこちがまずいことになっていた。思わず目が泳ぐ。

「あつあれ？ ちょっとキツ……………」

本人も気が付いたのか、腰のあたりにあるスカートのファスナーを上げようとして、そして目がついていた。

そして目が合う。

「見るな!!」

理不尽——。

僕は目潰しをくらい、マジでのたうち回った。何がしてえんだ悠希くん!!

しばらく嘆いたあと、元の姿勢に復帰する。いつの間にか、悠希さんはぺたん床に腰を下ろしていた。

短いスカートとふとい太ももが怖い。怖いなあ。

「なあ」

「はい」

「女子高生が好きなんだろうお前え。塾講師アルバイトなんかやって」

「は？」

別に女子高生をメインで教えているわけではないが？　ないんだが？

ていうか何の話。

真意を量りかねていると、彼女は座っている状態から動き、もたもたと四つん這いの姿勢で、こちらに近づいてきた。虎かライオンに襲われる恐怖感をおぼえた。

そうして、真横にやってくる。肩が触れ合う近さだ。

この状態で、顔を合わせてしまうと。その。

「こうやってこうやって、密着してえ。それで教えてるんだろうがこの変態が」

「酒くさっ」

顔の良い女からおっさんのおいがする。

「んー？　……へへ。にゃーん」

「なんて?」

「にゃーん」

キツッ。突然あざとい真似をする長峰悠希(20)。

お酒つてコワイな。いま彼女がやっていることの理由とかが全くわからない。何を
見せられているんだろう。

「恥ずかしくないの悠希さん。酔い醒めたら青ざめますよあなた」

「むうつ」

感想を述べると、不満そうな顔になる。

「……恥ずかしかねーよ、可愛い自覚あるんだから」

無敵の人か?

「ていうか、なんで効かないんだよお前、心悟お。タマついてんのかほんとに。おーん
?」

「タマとかいうな」

「男なんか、男なんかさー。わたしがちよつと演技してやったらさー。なー。なんでお
前は思い通りになんないの? なあー」

「ハッ」

鼻で笑ったった。

そりや長峰さんしか知らないやつは虜になるだろうけど、こっちはユウキくんを知ってますからねえ。笑い飛ばせちゃうね。

あつ、ていうか何。こいつもしかして、さつきから、僕を……。

「むんんん。じゃあ、ドキドキしたら、負けだから」

「は？ ヴオエツ」

胸のあたりを張り飛ばされ、悶絶し、気が付くと自分ちの天井を眺める格好になっていた。

そして、

「よつと」

「オエツ。は!? あの、いや、待つ、バツ」

「あああ、揺らすな、気持ち悪くなる」

制服姿の悠希さんは、僕の胸につき、下腹のあたりに押し掛かってきた。

「何これ？ いま、僕の上に、悠希さんの——、いや、考えるな。しかし重いな。多分体重100キロぐらいある。」

「心悟……。ドキドキした？」

「ああああ女子高生の姿は効きませんーていうかそんなの効いたら塾のバイトできません」

「ぬううう、そっか」

目を閉じ、老婆の裸を想像しながら適当に言葉を返していると、重みはあっさりと消えた。彼女は退いたのだ。

——勝った！

「じゃあ、着替えてくる」

そして数分後。

悠希さんは戻ってきた。元の格好、すなわちよそ行きの、あかぬけた女子大生の服装。ノースリーブのニットの服。さっきまで制服を着て暴れていたからだろうか。比べるとずいぶん、大人びて見えた。飲み会ときはなんとも思わなかったのに。

「電気を、消します」

「え？ あっちよ、なにすんの」

「ちよつと立って」

「え、なん」

「立って。立って」

部屋の中が真っ暗になり、そして胸倉をつかまれる。いや怖。

「うりゃ」

そのまま突き飛ばされて、ベッドに受け止められる。

それで、立ち上がろうと思ったけれど――、

「っ……………」

「ヤバ……………近いね。まだ効かない?」

「う、ウス」

ほとんど見えないはずなのに、僕には悠希さんの顔が見えている気がした。

腕に、胴に、脚に、重みと体温を感じる。鼻の先に息遣いを感じる。互いにどんな姿勢になっているのか、想像できてしまう。

「……………。ふ……………す……………」

深い呼吸の音がする。目の前から鳴っていたそれは、やがて、右耳のそばに移動してくる。

首にまで、相手の体温を感じる。髪が頬をくすぐる。においがする。心臓の音がする。

「……………悠希さん。僕は……………」

「……………すう。……………すう」

「悠希さん?」

返事はない。返ってくるのは、深い息だけだ。

それと、体温が高い。気がする。もしかして。

「寝た？」

やはり返ってくるのは、深い寝息だけだった。

そこからかなりの時間と労力をかけ、自分を下敷きにしてしている物体を撤去し、ベッドに寝かせ、脱出。

ベッドに背を向け、床に寝そべり、目を閉じる。

あつぶねーリーリー。

たぶん友達だと信頼してくれているだろう相手に、ついに、ついに異性ということにして、手を出すところだった。

あつちがどういうつもりであんな悪ふざけをしたのかは、その。わからない。わかっ
てはいけないので、ひとまずおいておくが。まあ酔うと全裸になってしまう人も世の中
いるし、そのたぐいかもしれない。

しかしともかく、こっちだってお酒入ってるし、あんなことされたらもう。僕だつて
男なわけ。いまのは人生最大のピンチだったと言っていいだろう。

神様、見てくれたかよ。僕の鋼の理性をよ。

とにかく寝る。寝る寝る。もう寝る。

▽

たぶん少し眠った後、目が覚めた。トイレに行つて来て、また横になった。

すると、背を向けたところから、声が聞こえた。

「心悟」

寝言か？ と思っただけど、一応「なに」、と返事してみた。

「オレ達……。……付き合ってる？ ……高校のときから？」

なんだ、その質問。

……。

もしかして、先輩たちとの会話を聞いていたのだろうか。

「何を今さら」

自分が始めたんじゃないか。『いいこと考えたんだけど』、って言うて。

あのときからずっと、僕たちの関係は変わっていない。変なことを聞く人だ。

「そっか。……ふふ。そっか」

とだけ聴こえて、そのあとは何も。

小さく、かすれた、高い声だった。

▽

日が昇ってからしばらく、スマホの画面を眺めながらぼうつと過ごしていると、ベッドからのつそりと動く影が。

「頭……いた……ウワオオーッ」

悠希さんは苦しそうに変な声を出した。笑える。

「おはよ」

「ああ、おはよう。……あれ？」

ここは……と呟いたあと、悠希さんは僕を見て、みるみると変な表情になっていった。自分の格好を眺めて、髪とか服とか、あちこち触ったりしている。

それで、僕を見て。

「……手え出した？ ……男ですが？」

などと言った。

「誓って出していない」

「………。あ、そ」

一転、つまらなさそうな顔になった。

何？ 僕を豚箱にぶちこもうと画策してる？

大学③ クリスマス

▽クリスマス

クリ……年末の、別に特別でもなんでもない12月下旬のある日。

この日は悠希さんに誘われて、少し離れた県まで一緒にデー……ドライブすることになった。

イルミ……特定の時期に屋外でたくさん飾り付けた電球をピカピカさせるイベント、をやっていることで有名な、地方のかい公園の景色を見に行きたいらしい。

そういうの興味ない人だと思っていたが、大人になれば感性も豊かになるのだろう。朝。寒さをこらえながら外出の準備をして、ひとり、近所のレンタカー店を訪ねる。

たつぷり一日分借用する契約を取り交わし、なるべくセンス良く見える車種を選んで乗った。

免許は持っていますが、これまでに運転した経験は実家へ帰省したときだけだし、これは当然ながら運転したこともない車、走ったことのない車道。正直かなり緊張したが……、

やつにそれをからかわれるのはムカつくな、と思うと、嫌なドキドキは解消した。

自分の住むアパートに戻ってくる。自分の住むアパートというのは、すなわち誰かさんの住むアパートである。

約束通り、正面入り口の前で、僕を馬か何かだと思っっているらしい女王様、ないし王様は待っていた。

路肩に一時停車。

助手席側の窓から外を見る。こちらを覗き込んだ悠希さんは、朝つばらから機嫌が良さそうな顔に変化していった。

エンジンをかけたまま、車の外に出る。

「おせーぞアツシーくん」

アツシーくんてなんだ？

「ごめん、ちょっとトイレしてくるから中で待って」

「えー？ はよしてこい」

車で長距離移動することになるため、トイレを済ませることは大事だ。

一旦部屋に戻り、用を足す。

少しして元の場所に戻ると、どうしてか、悠希さんはまだ車の外で待っていた。

「おせーぞメツシーくん」

さつきも聞いたそれ。ん？ 微妙に違う？

無視して車に乗ろうとして、しかし。

その前に、僕はどうしてか、彼女の姿をじろじろと見てしまっていた。

上着のポケットに手をつっ込んでいる立ち姿。少し、ユウキくんっぽい、と思った。

上等そうなブーツと、短いスカート。その間を繋ぐ脚はタイツに包まれているけれど、寒くはないのだろうか。

どうも、いつもの『長峰悠希』の服装とは違う気がする。短いスカートとか、ポケットに手をつっ込んでるところとか。大学生になってからはあまり見てない。

「いつもと雰囲気違うね、悠希さん」

「へっ」

言われた後、少し間が開く。

そして、視線を右へ左へと動かし、長い髪を耳にかけた。

あれ、ピアスしてる。いつもしてたっけか。してたかもな。

「……………。なんか違う？ オレ」

そして、また目があった。こちらを伺う上目遣い。

「あー、いつもほら、長いスカートとかコートで清楚な感じだしってるから。そういう……えっと……ジャンパー？」

「ブルゾン」

「なにそれ？　ともかく、あんまり見ないかつこだなって」

まあこの人は衣装持ちだから、僕の見ないところでは普通にこれで通学していたのかもしれない。学科が違うし、日中は会わない日もある。

悠希さんは、

「……へー。へえー。人の服とか一応見てんだ。ほーん」

と、不思議としおらしくも見えた表情を、徐々にニタニタさせながら言った。

「大学じゃこういうの着ないキャラで通してるからさー。でも、今日はこの自分がいいなって思ってる」

「ふーん」

「ほ、ほら。隣の隣の隣の……県まで行ったら、さすがに知り合いと会わないだろ。だから」

悠希さんは、いつかのように、自分の格好を見せつける少女のように、くるりと一回転した。もう20代のみそらで。

「かつこよかろ」

かつこいいっていうか、正直かわいい。

「かつこいいッス」

車に乗り込むことにする。当然のように、僕が運転席、悠希さんは助手席。

そういうえば、と思い、運転席に座る前に、コートを脱いだ。車内だと、それでちょうどいいぐらいだった。

「あつ、おまえ！」

すると、同時に乗り込んだ悠希さんが、こちらを見てすつとんきような声をあげた。近い。うるさい。

「チエツク柄のシャツはやめろよ……！ 隣歩く人間のことも考えてくれよオタクくん」

「えっ？ なんで。いいじゃんチエツク柄」

「ダメに決まってるだろ。普段は我慢してるけど、クリスマスにお前……ハア。それ着るなら、筋肉ムキムキかイケメンのどっちかになれ」

しばし人の服装を眺めて文句を言ったあと、彼女は正面を向いた。

僕も前を向いて、ブレーキを踏む。あー、右よし、右後方よし、後方よし。

一応、また左を見る。アツ、シートベルトで悠希さんの胸が……左後方よし。発進する。

「今度服買いに行くぞ」

「うん」

「一緒にだよ」

「うん。うん？ ええ、別に困ってないし」

「いくんだよ！ わがまま言うんじゃないよ」

えっ。僕がわがままだと……？ しかも悠希さんに言われるだと……？

いたく自尊心が傷ついたな。

▽

街中の様子を見てどうでもいい感想を述べたり、年末年始の話をしたり、卒論の話をしたり、そういういつもと変わらない話を車の中でした。

そして、高速道路に入ってしまったら、しゃべることも無くなる。

横をチラ見すると、悠希さんは目を閉じてシートに身体を預けていた。どうやら寝ている。これが悠希さんじゃない別の友達だったら、怒り狂いながら叩き起こしているところだ。

なんせ眠気は感染する。高速道路においては、起きて話題を提供するのが同乗者の努力義務ではなからうか。

「あつこの曲知ってる。ふんふん」

カーオーディオにスマホを繋いで音楽（だいたいアニメソング）を流していると、寝ていたはずの横のやつが突然歌い出した。鼻歌だったものが、暇なので、やがてマジ歌に変化していく。

うっ、うまい！ 前に無理やりふたりカラオケに連れ込まれたときも思ったが……。声がきれいだからかな。そして子どもの頃から声がデカかった。つまり声量がある。

そういえば悠希さんって、男性の声変わりは経験してないんだよな。多分。

僕の好きなアニソンは女性ボーカルが多く、気持ち良く原曲キーで歌ってみたいときもあり、声が高くて歌のうまい悠希さんが羨ましい。

みたいなことを、言ってみた。

「おー、そう思う？ でも、オレは低い声のおまえがうらやましいけどね」

「そうなんだ」

「そうなんです。なんか、いつまでも、子供のまままみみたいでさア」

なんかシリアスな感じ出してきたね。

本人はそう言うが、女性だって声変わりはあると聞く。

「小学生のときと比べて、落ち着いた声になってると思うけど。割と好き」

「え？ あー……、そう……？」

小学生と接してみれば分かるが、彼ら彼女らの声は、耳のそばでわーきゃー絡まれると、想像できるものよりもう一段階甲高い。バイトしていた塾にやってくる、かわいいクソガキ勢がそうだ。

きつとユウキくんも僕もそうだった。でも、今の彼女の声は、まあ本人の性格がうる

さいけど、別に嫌いじゃない。

「……………」

あれ。

会話のキャッチボールが途切れた。向こうから言葉が返ってこない。

チラ見する。悠希さんは、窓の外に顔を向けていて、表情は、わからなかった。

「おなかすいた。トイレいきたい」

道の駅だかサービスイリアだかに寄る。ちようどお昼どきだった。

「デカイ駐車場に停めて、施設内へ。トイレは？」と聞いたら、食べたあとで行く、とのこと。

中にはいろいろな種類の食堂があったが、やっぱりこの県に来たならうどんでしょ、と悠希さんが言うので、昼食はうどんに。

食券を買い、それと引き換えに出てきたものをテーブルに持って行き、食べた。

「うまい。学食のうどんと違う」

と言うと、

「当たり前だろ」

と怒られた。

「なー。免許証みして」

食べ終わって、しばしその場でお腹を休めていると、対面からそんな声をかけられた。運転免許証を財布から取り出し、手渡した。

「どれどれ……。ううっわ、オートマ限定？　ダツサ〜！　男ならマニュアルでとれよな〜、はーかつこわる」

何がそんなにバカにされることなのかわからんけど、とりあえず免許自体持つてない人に言われたくないですよね。

きみ運転手への感謝ないの？　置いてくぞ。

「写真もパツとしない。半目。フフツ」

それは……別にいいだろ……！

▽

そのあと、ちよくちよく観光して、日も暮れて、夜になって。

ほんとにここで合っているのか？　と思わされる田舎道を走り、やがて閑散とした土地に見合わないとんでもない渋滞に遭い。

それを取り越え、高台にある、くだんの公園に辿り着いた。

「おぉおぉお」

「おぉおぉお〜」

イルミネーションなんて、そのへんの金持ちの家がやつてるやつか、繁華街の街路樹なんかにあるやつしか見たことなかったから。

暗い空の下に、一面の光の花畑があるその景色は、まあまあ感動できるものだった。人々の流れに乗って、大きな公園を回る。光のアーチ、光の湖、光の畑、光の休憩ゾーン。

ぜんぶ光だな。

「おい！ こつち向けこつち」

「ん？ あつ！」

パツ、とフラツシユの点滅。写真を撮られた。

くつ。僕は某国のスパイあるいは裏社会の人間あるいは異星人なので、記録に姿を残されてはいけないのだ。

「なんだよ、顔ぶれてるじゃんか……。言っとくけどな、こういうの、大事なんだぞ。おまえ、自撮りする女子とかバカにしてるクチか？」

写真嫌い。

「陰キヤの小学生か。はいつかまえたー」

ええい、はなせ！

悠希さんは僕に追いつき、離れないように腕を組んできた。やめろ！ いろいろ当

たったり温かかったりして変な気分になるだろ。

「こういうの、残さないと、無くなるんだぞ。誰も思い出してくれなくなるんだから。昔のことなんて」

「……は、はあ。たしかに」

「はい、にこー」

「ニチャア……」

イルミネーション畑を背景に、画面に収まるようにちよつとくつついて、笑顔で写真を撮った。

悠希さんがスマホの画面を確認する。横からのぞき込むと、四角い画面の中には、非常に写りの良い女と、非常に写りの悪い男が並んでいた。

「キモ。写真慣れしてないからこうなるんだよ、アホ」

「はい」

悠希さんはスマホをしまった。

「さて。次は……、うん。あっちがいいかな」

そのままずっと歩き出す。僕は、なぜか腕を組まれたままなので、引きずられるようにしてついていった。

小一時間くらい、一通り回って、幻想的な風景を楽しんだあと。

いかにも人気スポットそうな高台まで行って、足を止めて、色とりどりの光を見つめている。ちょうど、周りに人があまりいなくなる瞬間が訪れた。

「あの子。……心悟」

「うん？」

横から声がしたので、そちらを見る。悠希さんは、眼下に広がるイルミネーションの花畑ではなく、こちらに身体を向けていた。

僕も、相手に向き直る。向かい合うかたちになる。

「オレ……オレ、さ。……心悟、オレは……」

10秒か、30秒か、1分くらい。悠希さんは珍しく、歯切れの悪い様子で、言葉にしきれないことを漏らしている。

あまり見ない姿が、なんだかおかしかった。さすがに、こちらも手持ち無沙汰になつてしまつて、

「なに、あらたまつて。まさか、このいい男に愛の告白でもする気ですか？」

と茶々を入れた。

そうしたら。

「……！」

目を見開く、という表現がぴったり当てはまる。そんな顔をした。その視線が泳ぐ。きれいな瞳が、くりくり、左下、右下に動いた。

何かを言いよどむように口を開いたり、閉じたり。息を吸ったり吐いたりして。そのあと。

「バーカー！ そんなわけないじゃん。調子乗るなって」

と笑った。

僕は、『あつ』と思つて。

すぐく、ズキン、とした。

「じゃあ、何さ」

「ごめん、忘れちゃったわ。……わ、もうこんな時間かよ。帰るかア？」

悠希さんが、手首の内側にした時計を見て、笑いながらそう言うので。僕は。

「うん」

▽

帰り道。

「あかん、眠い」

時刻はそろそろ日付が変わる頃で、ここからまた長〜い道を運転しないといけない。行きと違って寄り道はしないので、我が家、の近所のレンタカー店までの、最短距離で

はあるが。

夜通しの戦いだ。多くの大学生の例に漏れず徹夜なんて割とよくやってきたが、しかし、車の運転となると、ちよつと。

少しでも判断力の低下を感じたら、仮眠はした方が良さだろう。

「おいおいおい。シャキッとせんかい」

「優しく接して」

「だいじょうぶ？ ビンタする？」

「気絶するので結構です」

そのパワーでバチンとはたかれたら、意識がバチンといく。

「よ、よしわかった。夜通しカラオケ大会といこうじゃない」

悠希さんはカーオーディオに繋がっていた端末を、僕のものから自分のものに変え、自分の歌える曲を流してきた。この人のレパートリーは、①大勢でカラオケへ行くとき紅白歌合戦とかで聞く有名なやつ、②僕とふたりだと00年代とか90年代とか80年代のヒット曲、となっている。

ついでに音量も上げ、それに負けない大声で歌い始めた。

「やかましっ」

おかげで、元気は出た。眠気覚ましのキツイ風味のガムを口にしつつ、発進した。

そんな感じでスムーズに帰宅できた！ となることを期待したが。

盛り上がる系の曲だけでなく、なんかしっとり系のバラードとか、切なくいい系のラブソングとかも、彼女のプレイヤーには入っていて。

窓ガラスに頭を預けて、静かで冬っぽいそれを口ずさむ悠希さんは、あまりにも画になっ

ていて。

それで思わず、見惚れて。

事故りかけ、めっちゃ怒られ、暴力を振るわれて眠気が覚めた。

大人になってしまったふたり

△ △ △

長峰さん、というかユウキくんは彼氏役を命令されて、少し経った。

「ごめんなさい。私、この人と付き合っているんです♡」

「……………」

彼がよく男子に告白されてしまうという話は、高校に入学したばかりのこの時期でありながら、もう現実のこととなったらしい。実に短いスパンで、よく男子生徒に呼び出されていた。

僕らがカッパルのようにくつつくさまを見た男子生徒は、ショックを受けて去っていった。うう……。向こうに感情移入してみると、いくらなんでも、かわいそうだ。

「行ったか。……ほれッ、いつまでくつついてる。離れるや」

「理不尽」

自分からしがみついていたくせに、とんと突き飛ばされる。この野郎！ なんとという

乱暴者だ。顔とスタイルと成績と人望と運動神経だけはいいからって！

「あー、疲れた。じゃ帰ろうぜ」

「うい、おつかれーす」

「ちよつと先生に用事あるから、10分くらい校門で待つとけ」

「うん。ん？」

会話の流れがおかしいな。まるで一緒に帰るような感じになっていないか。

「彼氏アピールしないとなんだから、勝手にひとりで帰るなよ」

一緒に帰る感じらしい。

通学路の、歩道と一緒に歩く。途中までは一緒らしい。

一応、まだ人目があるからか、その歩き方はお嬢様と噂の長峰さんのものだった。こ

うして見るとユウキくんには見えない。

「ん」

前のほうから大人の男性。すれ違う前に、若干位置取りを変えて、ユウキくんのやや斜め前に。もちろん、とくに何事もなく、相手とすれ違う。

あ。ガードレールの切れ目、前方からスクーター。ユウキくんの左側に移動する。

「……おい。メガネ」

「あん？」

「女扱いしただろ、いま」

「え？」

「それ、おせっかい男が女にやるやつだろ、さつきから。そういうのやめろよ。やめろ、おまえまで。おまえ！　こら！　このやろ！　ボケコラ！　おどれワリヤア!!」

「あたっ！　いで、いで、や、やめっ……やめ！　やめろやあ！」

ガードしながら情けない声で抗議した。なんだこいつ！　導火線短いダイナマイトか。

そして存外重い攻撃が飛んでくる。昔よりパワーアップしてやがる……！　この暴力ヒロインめが。ヒロインじゃないか。

「ま、前にユウキくんが言ったんだろ。一緒にいるときはお前バリアーになれくみたいな。覚えてないのかよ。別に女扱いとかじゃないって」

「え？　……………！」

まあほんとにだいたい前の話だけど。小学校低学年とかだったかな。ともかく、僕はユウキくんの家来ポジションであり、ときにはSPか何かだった。最近思い出したことだ。

幼き頃より他人を盾として扱うことを自然に行うヤバい人間である。

「……………ふーん」

攻撃が止む。僕は、お、終わったのか？つて言いながら物陰から顔を出す雑魚キャラみたいに、腕のガードの向こうを覗いた。

長峰悠希は。

なんというか、こう。

教室では見たことのない――、

嬉しそうな顔。をした。小学生のときみたいに、にいー、つて。

暴れたせいで、ちよつと、紅くなつた顔で。

「よく覚えてんじゃん。……心悟」

このとき。

ああ、この顔を好きにならないようにするの、大変だな。

とか、思った。

▽卒業、引越し

今日は、大学の卒業式だ。

高校の卒業式とそう変わらないが、ここで仲良くなつた友人たちとは、就職先も、住む県すら、まったく違ってくる。別々の道に進むことになる。

そういう意味では、高校よりもみんなとの別れが惜しく。しかし、夜には最後に学生

らしい宴会なんぞあるので、寂しくはないような。あるいは、高校の仲間たちほど深い友人関係になったやつらは少なく、結構ドライな気持ちもあったり。

適当にまとめると、かかわった相手の人数分、いろんな想いがある、とでもいえるだろうか。

そして。

「あ、いたいた、野原くん」

耳馴染みの声。

今回は、僕がかわいい後輩に告白されそうなところを邪魔された、といったこととはとくにないらしい。残念。

声に振り返ると、

「オッ」

周りの学生たちの姿からして、別に不思議ではない光景であるが。

人混みの間を縫い、悠希さんは、ハイカラな袴姿でこちらへやってきた。

「おつ。ふふ……スーツ姿、意外とお似合いですね。今後はずっとそれで出歩くのはどう？ チェック柄とかやめて」

「はいはい。そつちも、その。めつちや似合ってます」

「ん。ありがとう」

にこり。悠希さんは、楚々としたモードで微笑んだ。

「4年間、すぐ終わっちゃったね」

そんな、当たり障りのない話題をふると、悠希さんはもう一步、こちらに寄ってきた。いつもの、彼女のおい。心拍数が上がってしまったのだが、それは割と心地のいいものだ。

やや小声で、悠希さんは口を開く。

「たぶん、楽しかったからかな。そういう時間って、すぐ終わるだろ」

「たしかに。ゲームしてるときとか、休日とか」

「そう、そういうの。……心悟は？ どうだった。今日まで。……」

オレと、一緒にいて。

と、すつごい小声でつぶやいたのだが、普通に聴こえてしまった。

その問いについて、答えは明らかだ。最初こそ、まじかこいつー、って思ったけど、今は……、

「めっちゃ楽しかった。ずっと学生のままがいいなーって感じ」

「そーか。あはは、同感」

その笑い方は、こっちの意図には気が付いていない。もしもずっと学生のままであいられたなら、悠希さんとも、ずっと……。

その後。悠希さんは同級生に声をかけられてどこかに行つては、律儀にここへ戻つてくる、といったことを繰り返す。卒業の日特有の話題も尽きて、もうそろそろ帰つてもいいか、という時間帯になった。

すると。

「あ。——姉さん。そろそろ帰りませんか？ 駐車場に夕崎を待たせてます」

どこからかやってきた、見たことのない女性……というか少女が、こちらの方向へ声をかけてきた。

「姉さん」。台詞からして、卒業生の妹さんだろう。服装はあか抜けているが、まだ高校生か、大学の一年目か、それくらいにも見える。

しかし容姿のレベル高いなく。うちの妹が魔人ブウ編の天津飯くらいのかわいさだとしたら、あちらは超3悟空くらいのかわいさだ。髪とか長いし、目つきキツめだし。まあつまり、人目を引くレベルの美少女だった。いいなー、こんな妹いる人。

「あ、もうこんな時間か……ごめんね、わざわざ」

と、僕の横に立っていた人物が返事をした。

「ん？ え!?!」

ベジット!?! お前の妹だったの!?!

そういえばいるって話聞いたことあるな。ただ、血のつながりはないとか。たしかに

あまり似てはいない。清楚時の悠希さんと同じ、金持ちっぽいオーラは纏っているが。

義理の兄弟姉妹でどっちもこれだけ顔が良いって、どんな確率だ。どんな家？

「……あー。もしかして、あなたが野原さん？」

「えっ。あ、どうも、はじめまして。野原です」

「なるほど」

あいさつもなく、足元から頭までをじろじろと見られる。少女のやや強気そうな目つきがさらに絞られ、怪訝なものになっていった。なんだその顔は。敵に向けるやつじゃないの。

「……姉さんがあなたに、いつもお世話をしてあげているとか。姉さんほどの人が。あの、あまりそういう、だらしない関係は」

「ちよ……マナ！ その話は……！」

あ？ 姉さんがいつも「お世話をしてあげている」……？ お世話になっていきます、ではなく？

思わず悠希さんをにらむ。おい、どんなふうにも僕のことを話したんだ。そういうテレパシーを送る。

彼女は、にへらと変な笑顔をして誤魔化した。

「はいはいじゃあはい、帰る、帰るから。……あ。ねえ」

悠希さんは、僕に流し目を寄越してから、妹さんに向かって声をかけた。

「その、写真、撮ってくれる？ マナ」

「えー」

「えー」

「なんで二人とも嫌そうなの」

妹さんと声が重なり、視線がぶつかった。

なるほど、この妹さん……さては僕のことキライだな。完全初対面のはずなのに。

ちなみに僕のほうは写真がキライだ。とはいえ、悠希さんが撮ろうというなら、それは聞く。

悠希さんは、自分のスマホを撮影者に手渡した。

彼女が、僕のとなりに立つ。肩は触れない、くらいの距離だった。

「仕方ないな。……じゃあ、撮りまあす。……離れて、もつと離れて、離れて。ちいっ……!」

離れてとか言ってくる撮影者はじめて見た。しかし言われるたびに、悠希さんは僕のほうに近づいてきて、最終的に肩がくっついた。妹さんは、アニメのキャラが苦虫を踏み潰したような声を出した。なんだこいつら。

「どれどれ。あ、また気持ち悪い笑顔になってるよ、野原くん」

スマホをチェックした悠希さんは、嬉しそうに僕の悪口を言った。
妹さんの厳しい視線にチクチクと刺されながら、いくつかの会話をしたあと。

「姉さん」

「ん。じゃあ、野原くん。……帰るね」

「うん、おつかれ」

やや大人しい、よそ向けの口調で別れの挨拶をして、ひらひらと手を振った悠希さんを見て。

いつもみたいに、「また」とか「後で部屋行くわ」とは、言わないことに気付いて。
お互いに、モラトリアムはもう終わりなんだ、と、強く感じた。

アパートの部屋を引き払う日があった。

家具や荷物はすっかりなくなり、掃除を済ませた部屋は、自分が4年間過ごした場所
が消え去ってしまったみたいで、なんとも寂しかった。

あとは、大家さんに引き継いで、鍵を返すだけだ。

「んっ。」

きんこん、と呼び鈴の音。

こちらの返事も待たず、がちやりと開かれるドア。

悠希さんだった。よく、何度も、呼び鈴も鳴らさないで勝手に入ってきたことを思い出す。おかげでプライベートのプの字もない学生生活だった。

苦痛そのものだ。まったく。

でも、それを上回るくらい、好きな時間だった。

「どうしたの、悠希さん」

感傷にひたりながらキリツとした顔で声をかける。

彼女の引つ越し日は、もう数日先の予定だ。引つ越しの手伝いをして、僕がいかに頼れる人間であるか見せつけようとしたのだが、別にいらんと断られていたのだった。

「なんか手伝うことある？」

「いや、別に」

やはり必要ないらしい。でも、じゃあ何しに来たんだろ。

「ん」

と、無造作に握りこぶしを出される。

なんだ？ グータッチか？ それともお手か？

迷って、手のひらを差し出す。すると、こちらの手の上に、ちやり、と何かを置かれた。

部屋の鍵だった。

.....。

「ああ」

そうだったそうだった。こいつこの部屋の鍵持ってたんだった。

「大家さんに返しといて、長峰からって」

「了解」

これでもなにもやり残したことはないな。あとは、大家さんがくる時刻まで待つて、いろいろして。それから、ホテルで一泊したあとにはもう、引越し先に向かうことになる。

「.....」

「.....」

しずかな空気が続く。

あれだけたくさんの時間をここで一緒に過ごして、くだらないやりとりをして、それで僕らはもう話題のタネが尽きたのかもしれない。悠希さんはしばらく、広くなつてしまったこの部屋を、無表情でただ眺めていた。

「心悟」

ようやく、この部屋で、息遣い以外の音が出た。

悠希さんはこちらに向かってやってくる。何畳もないので、目と鼻の先まで近づいて

くるまで、2秒も使わなかった。

高校生のときと違って、遅めの成長期で、ほんの少しだけ勝つことができた身長。悠希さんは、長い睫毛にふちどられた眼で、こちらを、おそろおそろ、覗き込んできた。

「ちよつと、お願い、あるんだけど。よい？」

「よいよ」

そう返すと、んん、と彼女は咳払いして、眉をひそめてすーはーと呼吸を繰り返した。重大発表があるらしいな。

「あのさ。オレたち、これからはちよつと離れるけど。でも、だから、その……」
それから5秒くらい、言葉に悩むような間が開いて。

「これからも、ずっと……友達で、いてほしい」と、言った。

ユウキくんの言うことにしてはなんとも殊勝で、おかしくて、うれしくて。でも、胸がぎゅつてなる台詞だった。

「えつと。あの。わたしには、友人はいつぱいいるけれど。……オレの友達は、心悟だけだから」

「何言ってるの、そんな」

「だから、忘れないでほしいんだ。忘れないで」

きつとなんでもないことなのに、あまりに真剣な様子なのがおかしくて、笑い飛ばそうとしたら、なんか、右手を両手で握られてしまった。

まだ寒い時期で、暖房も効いてないからか、手は冷たくて。すごく、不安そうな顔だった。

「うん」

忘れるはずがない。きみみたいな強烈なひとは。

長峰悠希ユウキという人物に関して、僕は、表情の全部、セリフの一字一句まで、もう忘れたりほしくないと思う。

そもそも、離れ離れになるったって、ちよつと電車乗ったり車運転すればふつうに会えるくらいの距離だ。休みの日とか、会おうと思えば全然会えるんじゃないの。

だから、無用な心配なのだ。

僕は、力のこもった彼女の両手に、そつと左手を乗せる。意識して、優しい声を出して、語りかけた。

「悠希さん」

「うん」

「手の骨折れるから」

「あ、ごめん」

▽大人になってしまったふたり

あれから数年が経ち。小学生のときと、高校から大学までずっと一緒だった僕たちは。

普通の大人らしく、疎遠になった。

「野原、来週の夜だけ。行くだろ交流会」

ようやく今日の分のタスクを終え、職場のイスを立って荷物をまとめているとき。少し歳上の、お世話になってる先輩に声をかけられる。

恰好からして、彼もちょうどこを出るタイミングらしかった。

「合コンですか」

「ちーがうよ、交流会だよ交流会。不思議なことに20代の若手しか来ない、男女比は限りなく1:1に近く、気遣いとかナシの楽しい会だよ」

「合コンじゃないですか」

先輩がこうして声をかけてくれる。ありがたい話だ。

けれど、ここのところ、あまりお酒の席を楽しいと思えなくなつた。人生、そういう時期もあるだろうと思う。どうしても必要なもの以外、行かないようにしていた。

それは先輩にも（後輩の分際で失礼なことに）、正直に話していたのだが。

「ご指名なんだよ。受付係の女の子がお前のこと気になるんだってよ」

「!! マジですか!?! ついにモテ期が……!」

「まあ、全然集まりに來ないから、気を配ってくれてるだけだと思っただけだな」

「それを言わないでください」

「ん?」

社の出入り口へ向かう途中。くだんの、話に出てきた受付係の女性がまだ仕事場に立っていたので、目が行った。

その人は、こちらに向けて、会釈の代わりに、手をひらひらと振ってきた。

「…………… 見ましたか先輩。あれは僕に振りましたね」

「違うよ、俺だよ。……嘘。お前に振ったと思うよ」

「あれっ」

冗談のつもりだったのだが。

そう言われるとそんな気がしてきた。ついにきたね、野原の時代が。

「それで、来るだろ。あの子、多少は脈ありそうじゃんか? 可愛いから倍率すげー高いのによ」

「え、そうですかね」

「え？ お前失礼すぎない？」

「あつ、いや。あはは、適当に返事しちゃいました、いま」

「可愛いかな。可愛いかなあ。ふつうに見える。もちろん、僕ごとき木っ端男性に対して本当に脈があると言うなら、それは相手の容姿は関係なく、至上の喜びだが。」

「で？ どうする？ 人数調整したいのと、今から他にも声かけしてくるから、できたら今決めてー」

「あ、はい」

先輩は足を止めてそう言った。こちらもストップする。

少しの間黙考し、参加しないための言い訳を考える。そうしたら。

——すみません。好きなひとがいるので。

そんな言葉が、頭に浮かんだ。

「……じゃあ、わかりました。ぜひ行かせてください、これはもう」

思い浮かんだそれは、まるで青春まっさかりの学生のような、あるいは練りの足りない恋愛もののような台詞で、冗談にしてもなんだか恥ずかしくて。

さすがに、口にできなかつた。

「顔に仕方なくって書いてるぞ」

「いやあ、まさか。先輩への感謝の言葉が書いてあるはずですが」
「ぜんぜん書いてないよ」

適当に一次会で逃げよう。

先輩に「お疲れ様です」と定型文を投げ、職場の出入り口へ再度歩き出す。
途中。なんとなく、自分の後方、オフィスの受付をちらりと見る。

視力は高くないので、これは勘違いの自惚れに違いないが。

その女性と、また目が合った気がした。

▽

▽

▽

ぴしっと着飾った格好で、友人一同、というテーブルに座って、誰かと話しながら、その時間を待っていると。

司会者のアナウンスと共に、会場の照明が落とされた。

薄暗い中で響くBGM。なんだか緊張でのどが渴いて、こんなことをしている場合ではないと思いつつ、始まる前から勝手に開けていたお酒を、少し、口に含んだ。

スポットライトが、会場のドアを照らす。

——新郎新婦の、入場だ。

拍手。みんながカメラをふたりに向け、その歩みを見守る。

最初に目に入ったのは、新郎のほう。すぐに、胸の中の何かがぎゅつと縮んで、眼球の奥がつんとした。

そして、次に、花嫁のほうを見て。

すぐく、きれいだ、と思った。

幸せなふたりを祝う時間。

ケーキ入刀、知らない人のスピーチ、余興、お色直し、両親への手紙。

それらをじつと見ていると、気が付くと、もう、披露宴が終わる時間だった。テープルに乗ったそこそこの高級料理は、食べ損ねてしまっていた。

——新郎新婦の退場です。

みんなが立ち上がり、花道をつくる。少し迷ってから、その中に加わった。

ふたりが、近づいてくる。それを意識すると、自分の胸が、笑えるくらいうるさくなることに気が付いた。

胸のどきどきという音は、耳や喉をどくどくと動かすほどのものになっていく。周りにバレやしないかと緊張するほどだ。

誰もが、口々に祝いの言葉を投げかける。その喧騒は徐々にこちらへ。そして。

自分の番が来た。

「あ。えっと」

とても、近い距離。もう目の前にいる。いつかの自分たちのように。本性をさらして、楽しい内緒話をした、自分たちだけの距離。

でも、今は。あつちには、横に並ぶパートナーがいて。周りには祝福する連中が大勢いる。

だから、

「おめでとう」

と。これまでの人生で、一番、演技力を振り絞って、なんとかかふさわしい表情と、声を出した。

向こうは、すぐにこちらに気が付いて、

「ありがとう」

本当に機嫌のいいときだけ見せるはずの、嬉しそうな顔で、そう返した。

玄関へたどり着く。どうにも長い一日だった。

ドアをくぐれば、結構気に入っている我が家。でも、今は。

自分以外に、もう誰もいない、誰と共有することもないこの空間が。ひどく、寂しいものに見えた。

バッグに、引き出物。荷物をぼいぼいと放り投げる。

わたしは、こういうときしか履かないお呼ばれ用のパンプスを、乱雑に脱ぎ捨てた。

ふと思いついて、棚から引つ張り出したいくつかのアルバムを眺めている。高校の卒業アルバム。家のアルバム。それと、自分で作った、薄いやつ。

太いやつの一番昔のページを開いても、そこには女の子の自分しか写っていない。どの写真も我ながらよくできた笑顔だけれど、それがぜんぶ、作り笑いだというのは、自分のことだからすぐにわかる。

いや、楽しい思い出とは認識している。作り笑いだって笑顔だ。誰だって写真を撮るときにやっていることだ。なにもこれらの写真を、嫌なものとして位置付けたいわけじゃない。

ただ。

薄いやつを開く。

何枚かだけ。自分が、本当の意味で、笑っている写真があった。

オレがその笑顔をしているとき、大体横に並んでいるやつは、顔がブレてたり、気持

ち悪い顔で写っていたり、まあひどいもんだ。でも、おかしくって、やつぱり今見ても笑えた。

野原心悟は、ダメなやつだ、

愚か者だ。鈍重だ。バカだし、性格は悪いし。

でも、いいところが、ほんのちよつとだけだが、なくもない。

そしてそれは、きつと、わたしにしか見つけられないものだ。

そう思っていた。

あいつにも、いよいよ、いいところを見つけてくれる相手ができる。そして、その相手が、本物の女の子だった、という話。

それって、なんて嬉しいことなんだ、と思う。オレは、あいつはいつか幸せになるってわかってた。実のところ、そこそこいいやつではあるから。友達としては、本人が望む通りの人生になるといいなーとか思っていた。

友達としては。

「おめでとう」

写真の中の心悟を覗きながら、披露宴で言ったことを、もう一度口にする。

きつと、心から漏れた言葉だった。こんなに、胸があたたかいのだから。胸が熱を持っているのだから。

今日はなんて、良い日なのだろう。

友達の結婚式。これほど純粋に良い気分になれるイベントもない。

「……あれ」

どこかから、しずくがポタポタと垂れてきて、大事な大事な写真を濡らしていく。わたしはあわてて、アルバムにこぼれたものを拭き取る。でも、それは次から次に降ってきて、きりが無い。

化粧で整えた外出用の顔がぐしゃぐしゃになる。

しまいには、視界がふやけて、大切な想い出が、何も見えなくなってくる。

目と鼻の奥が熱い。のどが、ふるえている。

息を吸おうとして、口を開ける。

「……嫌だ。嫌だあ……。なんで……。なんでだよ……。……」

誰かが、駄々をこねる小学生みたいなことを言っていた。
疲れて眠るまで、いつまでも、いつまでも。

▽ ▽



「心悟。しんご……。……あ、あれ」

自分の寝言で、目が覚めた。

ベッドから身体を起こす。

自分の服装を見る。普通の部屋着。

記憶を確認する。昨日は、普通に仕事をしていて、いつも通り眠ろうとして、その前に、なんとなく、アルバムを見て。そのあと寝た。

「………あー。うあー。うわあ……」

自分のみた夢の内容に頭を抱える。どんな精神状態ならこうなるんだ。夢だよそりゃ、気付けよ。友人席に相応しくない服装のやつとか、小学生とか高校生とかいただろ。

「うわ」

目からひとしずくだけ、つつつと水分がこぼれた。すごいな。寝てる間の夢で、涙つて出るんだ。あいつんちで読んだマンガみたい。

………恥ずい。



スマホの画面を点ける。深夜もいいところだ。

少し考えて。

連絡先一覧から、夢に出てきたあいつの名前を探して。

少し考えて。

こんな時間に迷惑極まりないが。……電話をかけてみる。

呼び出し音が鳴る。徐々に頭が冷えて、やめた、と思いだしたタイミングで、

『……………もっもっ』

長峰さんは…

「もしもしっ？」

スマホに向けて、寝起きのガラガラ声を出す。

こんな時間にかけてくるとは何事だ。明日は休日とはいえ。

『心悟……。……ああ、ごめん、寝てた？』

向こうもたいへんなガラガラ声だった。

それを聞いて目が覚めて、徐々に頭が回ってくる。

「——なんかあった？ 大丈夫？」

『ん？ あー、いや、その……。……花の金曜日だし、どうせ徹夜でゲームやってるとか、

アニメ見てるとか、暇だろなーって思って』

「ぶっとばすよ」

『えへっ。ごめんね野原くん』

様子がおかしいと思ったけれど、取り繕うくらいの余裕はあるようだった。

「……………」

寝落ちする前に机に広げていた、あるモノが視界に入る。たしかに、今日はたまたま

だが、夜更かしはしていた。

すごいタイムニングでかけてくる人だな。

『あ、あのさ。えっと。どう、仕事は。職場になじめたかよ？ 陰キヤだから苦勞してるんじゃない？』

「んなことないし。もう入社して鬼門の3年目は越えたんだから。まあ苦勞はこれからかもしれないけど」

『へ、へー。3年。そうだった』

「寝ぼけてる？ 悠希さん」

『んはは、そうかも』

灯りの点いていない、暗い部屋。相手の声に集中する。

『なあ。……か、彼女とか。できた？』

「え？」

……一瞬、思考が停止した。長峰悠希の口から、こんな質問を聞く日が来るとは。

意図を読むために考える。うーん。

つまりこの人の中では。やっぱりもう、あのときからずっと続いたニセ彼氏彼女の関係は、もう終わっている、ということになるのか。

まあ、お互いもう一緒にいることはなくなつたし。それはそうか。

「その話だけ。この前合コンがあつてき。受付の人と仲良くなつただけ」
『っ——』

「そのあと別になんもなかつたっていう」

『……………』

「悠希さん」

『な、なーんだ。やっぱりしょうがないな、おまえは』

「きみは？」

『ん？』

「できた？　好きなひと。相手が女の子だと、まあその、社会的なハードルがあるかもしれないけど」

話の流れに乗つて、ややセンシティブなことを聞いてしまった。少し後悔する。一応、この程度で気を悪くする人じゃない……と思う。

電話の向こうから、すぐには返事が来なかつた。地雷を踏んだだろうかと不安になる。

『……………できた。けど、女の子じゃない』

それを聞いて。頭の中にすぐ、悠希さんが、知らない男性と一緒にいる光景が思い浮かんだ。

すぐにそれを消す。電話を続けながら、僕は胸の真ん中あたりを掻いていた。

「そうなんだ」

「うん」

「……………」

「……………」

久しぶりに声を聞く、友人との電話。楽しいやりとりを目的としたもののはず。

なのに僕はいま、ひどく緊張していた。さつきまでぐっすり寝ていたのが、昔のことみたいに思える。

『ところでなんだけど。今度の休み、いつ？』

ぴり、と毛が逆立つような感覚。

「明日と明後日」

『そっか。……………な、明後日なんだけどさ。久しぶりに、一緒に遊んだり』

「悠希さん」

僕は、彼女の言葉を遮った。

少しあわてた。自分の口から、どうしても言いたいことがあったからだ。

ずつと、後回しにしていたこと。

『な、なに？』

「明後日。その。一緒に、デート、しませんか。久しぶりに」
『……………へっ?』

▽

『考えておく』

という返事をもらった。

スマホを放り投げ、部屋の電気を点けた。

散らかっている机の上を見る。

その上には……………実家からわざわざ持ってきた、*“アルバム”*がいくつか、広げられていた。

さつきは久しぶりに、いや、はじめて、これを見ていた。自分や、周りの人たちの思い出を振り返るもの。

一種類では足りない。家の。小学校の。高校の。誰かさんからもらったの。さて。なんでそんなことをしていたのか、というと。

そりゃあ、これに、自分の好きなひとが、たくさん写っているからだ。

小学校のやつ。

まあ、*“自分”*に関しては、見てもあまり面白くない。自分の顔も好きじゃないし、小

学生時代のこともそんなに好きじゃない。嫌いでもないが、面白くはない。

ただ、今の同級生たちの、子どもの頃の姿が見られること。これは面白い。小学校のアルバムという物の、正しい楽しみ方じゃないかと思う。

ページをめくる。

——あつた。

××
悠希。

小学生の頃の写真。今見ると美少年つちや美少年で、ああなる下地は十分にあつたように思う。今の姿を知っていることが前提だが、クラスの女子たちよりも、かわいらしい顔立ちに見える。

すごい生意気なガキだったけども。

高校のアルバム。

体育祭。体操着姿がめっちゃいい。長らく見ていない、活発な運動時の様子。

そういえば、あのとき。借り物競争のとき、彼は、どんなお題をもらって僕を引っ張っていったのだろうか。オタク、とか言っていたが、今考えると、あれは嘘だったのかも。授業中。制服姿がめっちゃいい。他の生徒と同じ服を着ているとは思えないというか、オーラが違うというか。

夏服も似合っているし、冬服もまたいい。あー、そういえば、バレンタインデーとか

あつたな。男子にチョコ配りまくったあと、僕に、一番安い見た目のものをくれた。僕にだけ。

文化祭。うちのクラスは劇をした。ヒロインの、お姫様の姿。めっちゃいい。

後夜祭では、ふたりで抜け出して、屋上に行った。そこで彼は、終わったはずの劇の、練習をもちかけてきたんだ。台本にない台詞を、勝手に追加したシーンだった。あのと
きの台詞は、たしか……。

最後に、もらったやつ。どうやら登場人物が少ないらしく、薄い。

ページをめくる。

僕の実家の部屋。

ゲームに夢中な僕を背景に、長峰さんがいたずらっぽい表情でポーズをとっている。い、いつの間……。

次の写真は夜。これは、夏祭りの日だ。浴衣で写っているから、すぐわかった。

これも、出店通りを歩いている僕の背中を背景に、ヤツが自撮りをかましている。あの野郎。……それと、誰が撮ったのか。並んで座って、上のほうをボケつとした顔で眺めている僕と、それを横目で見ている彼女、という写真があった。花火のときか？
うーん……？ マジで誰が撮ったんだ。

次。

高校の卒業式。高校のアルバムのほうには載っていないかった、ツーショット写真。たしか、長峰さんの友達か誰かに取ってもらったやつだろうか。写真の中の彼女は、長峰悠希らしい、穏やかな表情をしていて、僕の中のいろんな情報を排して見れば、高校生カップルの記念写真に見えなくもない。容姿は釣り合っていないが。めくる。

大学生のときのもの。けっこう、たくさんあった。

……クリスマスはやつ。……。悠希さんは楽しそうだ。

……卒業式はやつ。あつ。妹さんが撮ったやつ、僕が見切れてる。

これでおわり。

就職したあとで送られてきたアルバム。今になつてようやくちゃんと目を通したそれを、ゆっくり、閉じた。

そして。とても大事なもので。ちゃんと、しかるべきところに、仕舞った。

「ふー」

まさか、こんなことをしていた日に限って、向こうから電話がくるとは。

なぜこんな、写真嫌いのくせにいまさら、想い出にひたるような真似をしていたのかというと。

いちいち自分の中で言語化したくはないのだが。

僕は、長峰悠希のことが……、正直、めっちゃくちゃ好きだ。

当然、ラブのほう。異性、恋愛対象として見ている。

そりゃ、最初の頃は、苦手なところもある友達、って感じだった。でも、でもだ。そもそも容姿が全部好きな女の子と、毎日一緒に友達として過ごして、好きにならないわけがない。あんな人間と何年も一緒にいて、頭がどうにかならないはずがない。

ユウキくんなのにな〜とか僕は異性愛者のはずだけどなくとかいう気持ちもさんざん頭を過ぎったが、好きになったものはしょうがない。昔は苦手だったところも、全部、好きなどころに変わってしまった。

けれど、一緒にいながら、ついぞ僕は、この隠し事を言わなかった。ごまかしまくった。

気持ちを伝えてしまうことだって、何度も考えた。

あと、もしかしてこいつ僕のこと好きなんじゃ？ と思ったことが、1000回ぐらいある。アルバムの高校生以降の写真を見るとそう思う。

けれど、

そんなはずはないから。

悠希さんは男性へのガードは本当にかたいし、よく愚痴を言っていた。男を恋愛対象として見ることはない、という話もしていた。

そして何より。

今の自分が一番心地いい時間は、彼女かれといるときだということに、なってしまった。そういうふうには、された。

……おつかしいな。きらいだったんだけどな。苦手だったんだけどな。

このまま、疎遠になって、学生時代の友人、なんていう普通の関係になっていくくらいなら、僕は。

これまで、たくさん長峰悠希ユウキに振り回されてきた。だったら、そろそろ。

もう、相手のことなんて考えずに。自分の思っていることを、気遣いなんかしないそのままを。ぶつけてしまっても、いいんじゃないだろうか。

そうとも。だいたい、長峰さんは、ユウキくんは、悠希さんは、やはり意地悪なのだ。すこぶる性格が悪く、人を苦しめることが大好きに違いない。

彼氏役？ ふたりだけでどこかへ遊びに行く？ 部屋が4年間となり同士？

そんなことをやっていたら、好きにならないはずがない。

『あと、もうひとつ。気付くのが遅かった罰としてえ……。おまえの人生めちやくちやにしてやる……。つてのも、面白いなって思ってたさア』

人生めちやくちやなのだった。有言実行。

「ん」

スマホから通知音。

シユバババと、ユーザーに有利なバグを見つけたときの運営ぐらいのスピードで、それを手に取った。

『行く』

と。二文字のメッセージが返ってきていた。

▽

一日かけて下調べを頑張つて。待ち合わせ場所として、市内の、おしゃれな洋食店に誘った。

服装もチェック柄シャツではない。以前彼女に選んでもらったものの中でいちばん良い服、そして妹のアドバイスなども組み合わせ。おデートにも、真面目な話をする場にも対応できる格好で出かけた。つもり。

待ち合わせ時刻の15分前。実は、店の予約時間には、ちょうど。

洋食店に入り、従業員の方に案内される。

「あつ」

「あれっ」

先に席について気分を落ち着かせておこう、という目論見が、その姿を見てバキバキ

に破壊される。

長峰悠希は、僕と似たような、フォーマルと私服の中間ぐらいの格好で、先に座っていたのだった。

「……早すぎ」

につ、と笑つて、そう言われた。いやこつちの台詞だが？

久しぶりに会つた僕たちは、主に仕事の話題で盛り上がった。たぶん、これくらいの歳になると、友達とする話もこういうものになつてくるのだと思う。

「仕事はうまくやつてるよ。でもさア、同期のエリートどもやら上司やらがもう、イナゴみてーに寄つてきて……飲み会とかほぼ強制参加かつてくらい誘われるし」

苦勞しているらしい。美人はたぶん、どの業界に入つても大変だ。

だからこそ、長峰悠希はずつと、僕を「彼氏役」にしていたのに。その盾が今はないわけだ。

「そういえば、高校のとき同級生の、金田くん。結婚したらしい」

「そうなんだ。わたしも……オレもこの頃よく呼ばれるよ、女子たちの結婚式。おかげでヘンな夢見たし……」

「どんなの？」

「ああ？ それは……教えない」

「えー」

会社の飲み会なんかと同じで、話題は、結婚うんぬんのことになってしまった。後天的に性別が変化した人の前では、ある程度気を遣うべき話ではある。

「あとさ、親も最近、そういう話ふつてくるんだよね。おまえんちもほら、そろそろ、うるさいんじゃない？ 孫の顔みたいとかなんとか」

「まさしく言われてる。長峰家でもそういう話あるの？」

「まあ、一応ね」

「そっか。……………」

あれ？

この話題の流れ。

チャンスな気がする。告白の。

いやチャンスか？ ロマン値が足りないんじゃないか？

「ん？ どうした」

小首をかしげる仕草で、こちらをうかがう悠希さん。この野郎……そういうところが好きなんだよ……！

……悩むのももういい！ こんなことだから僕はダメなんだ。告白が変なタイミン
グのぐだぐだで、何が悪いんだ。言えないよりマシだ。

……悠希さんは、電話で、好きなひとができたと言っていた。それは僕じゃないかも
しれない。というかそうじゃない可能性大。

それでもだ。今日は、このために、ここに来たんだ。

言うぞ……言うぞ。言うぞ。言う。言う、言う！

「悠希さん！ あの」

「それでさ……」

悠希さんがかばんから、何かを取り出そうとした。

出鼻をくじかれてしまった。いかんこのままでは……。気を取り直して、アタックを
だな。

「んっ」

ことん。

机の上に、手のひらに乗るくらいのも、小さな箱が置かれた。

「なんすかこれ」

「開けてみれば」

なんだ。びっくり箱じゃないだろうな。

「……!?」

びっくり箱と似たようなもの、ではあった。

中には、小さな金属製の輪っか……というか、指輪が2つ、収まっていた。つまりリングケース。

「ここ、これは？」

「んー？ おもちゃだよ。アルミだよアルミ」

「これが……？」

机から身を乗り出すくらい姿勢になって、まじまじとそれを検める。

え……？ なん……これ……え……？

「さて」

通りの良い声。思わず相手を見る。

「すげーいいこと考えたんだけどさ」

『いいこと考えたんだけど』。このセリフは、ユウキくんが悪いことを考えたときに発するものだ。

テーブルの向こう側。悠希さんは、いたずらっぽい顔で、僕の目を見た。

「さっきの話なんだけど。……オレとおまえ、お互いこれを指にはめて、名字一緒にして、同じ部屋で生活するようにしたらさ……」

素晴らしい思いつきであるかのように、それを話す。高校生の、あのとときみたい。

「いろいろ解決できて、良いと思わない？」

「そ、それって」

「さしあたっては……」

いつかのように、こっちの返事も聞かず、彼女は笑った。

「長峰と野原。どっちがいい？」

長峰さんは彼氏持ち……おわり



「あー……だめだ。これじゃだめ、だよな」

「いてえっ!!?」

リングケースをびしやりと閉じる。おそろおそろ手に取ろうとしていた心悟は、指を

挟まれ、悲鳴を上げていた。ごめんて。

自分とこいつの関係は、うその恋人同士というていだった。だから、それを続ける、というかたちにすれば。性別がどうか、友達でいられなくなるとか、そういうことは気にしないでもいい。

そう思つて、こんなものを用意した、ことがあつて。今日は、本当にそれを持つてきてしまった。

でも。

やっぱり、これじゃ、だめだよな。

「んんっ。一回しか言わないから良く聞いてくれ。そのあとはもう一生口にしない。……するかもしれないけど……あ、いや。その……」

ああ、ダメだ。顔が熱くなつてきて、手うちわであおぐ。水を飲む。あつこれ酒だった。

すーはーと深呼吸を繰り返すけれど、鼓動はどうしても減速してくれない。

だったら、このまま。このままいけばいい。

「心悟ー」

「は、はいっ」

目が合う。あつちも、顔が赤い。きつと、何を言われるか、わかっているはずだ。

その返事がどんなものにしろ。ここでユウキ勇気を出さなきゃ、オレたちはずっと、ただの友達のままだ。

……別に悪いことじゃない。オレは、いつか彼に、ずっと友達でいてほしい、と言った。その気持ちは変わってない。

でも。それは、ほんとうは。

『特別な友達』でいたい、って意味も、あつたんだ。

友達のまま——、友達じゃ、なくなりたいんだ。

「オレは……わたしは。キミのことが、ずっと」

月並みな言葉でいい。うそでも、取り繕ったものでも、冗談を装ったものでもなく、想っていることを、はじめて、伝えようとした。

「ずっと——、」

「まって！ 僕が先に言う！」

中斷させられた。

一世一代の告白が。

思わず変な顔になる。なんで……？ 今まで数え切れないほど男どもの告白をあざ笑ってきた報いか？

「は？ いやいやわたしが」

「いや僕が」

「今日は、このつもりでここにっ」

「こつちだつて、こうやってちゃんとい店探して」

「うるせーだまれ！　どんな決心で今ここにいて思つてんだボケ！」

「こういうのは男から先に言わないとつていう個人的な想いが」

「オレも男だし！」

「んんんん」

「むうううっ！」

「「好きです！」」

「僕の方が早かつた！」

「いやオレだね。お前は雑魚」

「なんだとお……！　そんなこと言つたらきみなんか、学祭の屋上のとときとか、エイプリルフールとか、大学のクリスマスをとときとか」

「そつ、それいじるのナシだろ！」

お互いちゃんとした服で、洒落たお店の中だけれど。

ひととおり騒ぎ終わつたら。オレ^{わたし}たちは、いつもみたいに、笑つていた。

(了)

後から思いついた話

席替え（高2）

「先生え。そろそろ席替えしたいです」

朝のシヨートホームルーム。クラスの女生徒が、担任の先生に要望を投げた。

「ん？ ー、そうだな。明日の帰りのシヨートでやる？」

「やるー。やるやる」

発言した子を中心に、賛成の声が割とたくさん上がる。

席替えか。2年生に上がってから、そういえばまだ1回もしていない。現在このクラスは、並びが出席番号順で、教室の右側が男子、左側が女子、という状態になっている。つまりはデフォルト状態だ。

席替えの話が出てから、教室の雰囲気がいっつもより少し、明るく浮ついているように感じる。

これはしごく当然なことだ。学生とは、席替えの好きな生き物だからである。仲のいい友達と近い席になりたい。教室の後ろのほうで授業をさぼりたい。前のほうで真面目に勉強したい。そして、好きな人と隣同士になりたい。そんな欲望をかかえる我々に

とって、席替えというものは、楽しい学校生活を送るための大事なスパイスだ。席替えを許さない担任にでもあたらうものなら、それは灰色の1年であると言つても過言ではないだろう。

……まあ、高校の2年生にもなれば、みんな多少は冷めてしまつて、以前のように一大イベントとまではいかないだろうけれど。

僕も、別にどこの席でもいいし。かわいい女の子が隣だったら嬉しいな、くらい。みんなもそんなもんだろう。

▽

「さて男子諸君。これより、長峰さんの隣を決めるジャンケン大会を行う」

『オオオオオオオオーツツ!!!』

はよ帰らせてくれや。

放課後、女子たちのいなくなった教室にて。高2にもなつて席替えで盛り上がりはすまい、と思つていた僕を、真つ向から裏切るイベントが開催されていた。

そうか、このクラスには長峰悠希がいたんだつた。あの人は外面だけは本当にいいので、彼氏いますアピールをしているにも関わらず、いまだ多くの生徒から想いを寄せられてるらしい。彼氏とされている僕のいるクラスでさえこの有様だ。

「まずは説明を聞いてくれ。今回の席替えは『くじ引き方式』だという情報を入手した。

これは、引き当てた席のトレーディングが可能であることを意味する」

教壇に立ちMCを務めるのは、クラスメイトの金田くん。隠れオタクらしくそれほどばい言葉遣いでまくしたてる。

「これにより、男子ネットワークによる席の操作を行い……この大会の優勝者には、長峰さんの隣の席が確約されるものとする！ 立てよ国民!!」

「ウオオオオオ長峰さん」

「消しゴム拾ってくれ！」

「教科書見せあいっこしたい！」

「胸！ ふとももー！」

この様子をユウキくんに見せたら、どんなリアクションをするだろうか。自分のモチテっぷりで悦に入るか、男子を愚か者どもと嘲笑うか、うげえと呻くか。いずれの姿も、彼らの想像する長峰さんとはかけ離れている。

そう。かけ離れている。

みんなはまだ知らないだろうが、ユウキくんの隣の席なんていいものじゃない。あいつは、隣の席の机にあるものは自分のものだと思っている。たしか小学校で2、3回ほど隣になったことがあるが、筆記用具を無言で取られるのは日常茶飯事で、たまたま教科書とかなくなる。そして、失くして落ち込んでいるところに、「あ、オレが持ってた」

とのたまう。そういうところがもうね、ほんとにダメだと思う。

あと、人の消しゴムの角を消費してくるし、というか力を入れ過ぎて消しゴムを折る。なんなら定規も折る。僕の定規がびよびよ曲がるのが面白くて遊んでいたら、見事に真ん中から折れた、ということがあった。珍しく謝ってきたのでよく覚えてる。

と。このように、ユウキくんの隣になると、直接的な被害が出る。

……………。

守護らねば。

みんなを、長峰悠希から、守護らねば——。

「一回戦！ みんな、近くのやつとジャンケンして。ほんで負けたやつ座ってー」

いつの間にか拳を握りしめていた僕に、近くにいたクラスメイトが声をかけてくる。

彼は、僕と同様に、利き手に硬い握りこぶしを作っていた。

「佐藤くん」

「よオ、野原……。俺たちは、そう、親友だな。そうだろ。だがな、それでも、それでも

俺は！ お前を長峰さんの彼氏と認めるわけにはいかねえ！」

「な、なんだと」

「受けるこの勝負っ!!」

「いいだろう」

相手のノリに合わせて勢いよく腕を振り、最初はグーをやる。適当にチヨキとか出す。勝った。佐藤くんは膝から崩れ落ちた。

そんなにあれの隣になりたかったのか。いや、僕もあの本性を知らなかったのなら、真剣に取り組んでいたとは思うけど。

敗者の屍を踏み台に、2回戦へ。次の相手は……、

目が合ったのは、MCをやっていた金田くん。普段はそんなに長峰信者をやっている印象はないが、彼もまた参加者であるようだ。

「野原くん。すまない、勝たせてあげたい気持ちはあるが、僕は運営側でね……。彼氏の君とて、今回は平等だ」

「ごうよ」

「さあ、行くぞ!!」

「おう」

クラスメイトで数少ない、僕がヤツの彼氏であるという嘘に異を唱えない男子。いいやつなので、勝ちを譲っても全然いいが……。

じゃんけんぽん。

勝った。金田くんは奇声を上げながら、ゆっくりと近くのイスに座った。

……ジャンケンって運勝負なので、別にあんまりやる気がなくても勝っちゃうことあ

るな。残り5人のうちに残ってしまった。

さて、次の相手は。

「ウオオオ!! 死ね野原!!!」

「いじめか?」

あつ、勝った。

「ウオオオ!! むしろお前の隣がいい」

「えっ?」

あつ……。勝った。

「優勝してしまった……」

なんと、最後に立っていたのは僕だけだった。教室中からブーイングと怒号が飛んでくる。

「ふざけんな野原! 参加するなそもそも!」

「不正に決まってる!」

「パン買ってこい!」 「漫画貸して!」

「宿題見せろ!」 「妹かわいいな!」

僕は教壇に立ち、厳粛な面持ちで皆の罵倒を甘んじて受け止めた。

熱狂が鎮まるのを待つ。そうして彼らが聞く姿勢になったのを見計らって、僕は声を

上げた。

「みんなの意見は最もだと思う。だから——」

諸君らの気持ちは受け取めた。学校のアイドルを独り占めにしてはいけない。そうだろう。

ならば、この大会そのものにこそ、間違いがあるのだ。

「優勝の権利は放棄します。つまり、席の操作はせず、くじ引きの自然な結果に身を任せたい。みんなも、それでどうかな」

クラスメイトたちは、一瞬、偏差値30くらいのポケっとした顔になり。

やがて、偏差値32くらいのキリリとした顔で、喝采を返してくれた。

「いぞ野原！」

「男だ！」

「お前はいいやつだとわかっていた」

「好き」

「——ありがとう！ みんな、ありがとう！」

こうしてジャンケン大会は、大団円という形で終わった。

僕たちはこの戦いを通じ、学んだ。人間が“運命”を操作しようだなんて、おこがましいことである。それをしようとするから、格差が生まれてしまう。僕は自然の形と

してみな平等であり、そこから抜き出ようと争うべきではないのだ。そうだろうみんな。

結果のわからない席替え。そこにのみあるドキドキ。それが僕らの求めるものはずだ。そうだろう、みんな。

僕は人々に手を振り、惜しまれながら教壇を降りた。

そして荷物をまとめて帰路についた。

「……フフ。フッフッフツ」

これでヤツの隣にならなくて済むな！

▽

一日経って、放課後のショートホームルーム。

クラスの女子が用意した人数分のくじ——番号札が、ひとりの手元にひとつ、行きわたった。黒板に描かれた座席図に、先生が適当に1番から番号を入れていく。

番号が進むたび、クラスメイトたちの声が増えていく。一喜一憂のリアクションをする級友たちは、様子を見ているだけで面白い。

けれど自分の番号が近づいてくると、彼らを観察する余裕はなくなっていく。

「……おおー！」

黒板と、手元の番号札を見比べる。

先生が書き込んだ25番の位置、すなわち僕の新しい席は——、一番左の列の一番後ろ。教室の端っこだ。

これは……大当たりだ。多くの生徒がこの席を欲しがる。後ろにも左にも誰もいないという快適さ。窓からそそぐ陽光のあたたかさ。視力に問題がなければ最良の席のひとつと言つていい。

どうでもいい話だが、この席はよく漫画やアニメの主人公が座る席だという話を聞いたことがある。理由は、作画の手間が減るから。

席替えの第2段階、仮移動。机イスを移動させる前に、新しい席となる予定のイスへ、身一つのみで移動する。先生が番号をすべて入れ終えたら、そのあとは生徒間の、そして先生も交えた“交渉”が始まる。

例えば、目が悪いので前に行きたい人。授業中うるさいので先生が前のほうに座らせたい人。そういう話の裏で、こっそりくじを交換する生徒たち。

みんなのそういう様子が、一番後ろの席からはよく見える。高みの見物は気分がいい。

「31、31……ん。野原かあ。はあ」

ざわめきの中、僕の隣の席に、女子がやってきた。心浮き立つシーンであるが、相手は僕の顔を見るなりため息をついた。

その女生徒——山根幸来さんには、隣が野原心悟であることは、残念な結果だったよ。うだ。これも席替えあるあるだが、どうにも申し訳ないね。

「なんか、すいませんッス」

「えー？ ああいや、ごめんごめん、嫌じゃねーよ別に？」

山根さんはくじを弄びながら、クラスメイトたちの様子をしばし眺めていた。

「……悪^わり、交換してくるかも。別に嫌じゃねーのよ？ 落ち込むなよ！」

「落ち込むかも」

「ごーめんって」

山根さんは明るく笑いながら、なにやら話し合いをしているらしい女子の集団に飛び込んでいった。

ふ。たまに女子としゃべると、自分がスクールカーストの底辺であることを思い出すぜ。

さて、あとはみんなが納得いく場所へおさまるのを待つだけ。僕はクラスメイトの席に座ったまま、たまに交渉にやってくる者たちにNOと答えつつ、空を眺めるなどして過ごした。

.....

「はい、じゃあみんな、机椅子移動してー」

「うわっ」

先生の号令と、直後の大騒音で目が覚める。うとうとしている間に、席替えの最終段階、本移動が始まったらしい。

慌てて自分の机に戻り、引越しに取り掛かった。

とはいえ、元の席から近かったので、いまだ渋滞の渦中にある級友たちより一足先に、僕は席替えを終えたのだった。

「ふう」

まだやかましい教室の中で、とりあえず新しい席に腰を落ち着ける。やっぱりいいなこの席。あと半年はこのままでいい。いや、今年度はこのままでいいな。

そういえばじゃんけん大会も優勝したし、妙に運がいい。僕の日ごろの行いがいいんだらうな。

「ンッフッフ」

「……何笑ってる？ キモいぞ」

「へっ」

隣から、女子の声が出た。

そういえば結局、隣は誰になったんだらう。そう思いながらそちらを見た。

「こんにちは、野原くん」

「ヒュッ」

ホラー映画のビビらせポイントを見た瞬間のように、全身がブルッと震えた。

あつてはいけない光景がそこにあつた。

……清楚な花のような外見で、うららかな表情を保ちながら、重い机を苦もなく持ち上げている女が、そこにいた。

「わたしたち、隣同士みたい。よろしくね」

「バカな……」

「よろしくね？」

「ありえない……」

吹き出す冷や汗の不快感を味わっていると。重い机を、音もたてずその場に置いて、彼女かれは、ずい、とこちらの顔を覗き込んできた。

「彼氏なら喜んで見せろ。みんなの目があるだろ。……すぞ」

「嬉しいー！」

笑顔のまま睨まれるという経験をし、僕は素っ頓狂な声を出して喜んだ。

「やだもう、心悟くんつたら」

「ぺし、と肩をはたかれる。」

周りからはどう見えたかわからないが、男子の肩パンくらいの威力があり、僕は悶絶

した。

「……ユウ……長峰さん、なんでこの席に……」

「ん？」

上機嫌そうな表情をつくっているユウキくんに話しかける。僕の知る限り、長峰悠希という女生徒は、ほかの生徒が座りたがらない黒板の真ん前などによく座っている。たしか本人も、そこが嫌な生徒と代わってあげたり、優等生をやるためにそうしている……と以前言っていたはずだ。それを思い出した。

それが、なんで今回に限って、一番後ろを。

「それは……」

かさ、という音。ユウキくんが指に挟んでいた紙切れに目が行ったけれど、彼女はそれを後ろ手に隠した。そのまま、女子がよくやるみたいに、ユウキくんは、お尻側からスカートを押さえながら椅子に座った。

「……ん、と。幸来きらいが、どうしても交換してって頼んできたから。……ふふん、嫌われてんなア、オタクくん？　かわいそ〜」

「ウウウ」

「女子の隣じゃなくて残念。わたしで我慢してくださいね、野原くん。というか光栄でしょ？　オタクにも優しい長峰悠希の隣ですよ？」

机に頬杖を突き、ちようどみんなに見えない絶妙な角度でこちらに顔を向け、にやにやと嘲笑してくるユウキくん。野郎、言つてはいけないことを……！

くそう、ちくしょう。

はやく席替えしてくれ。来週にはしてくれ。たのむ。

先生が号令をかけ、席替えの時間が終わる。同時に、今日の学校もまた終わり。

僕は鞆を持って、席を立った。すぐに教室を出ようとして、

「……………」

「？ あ、今日は用事があるので。さようなら、野原くん」

「へい」

ちらちらと、隣の席にいる人の様子をうかがっていると、そういうふうに言われた。

ああ、これがただの長峰さんだったら。僕が何も知らなかったなら。今のきれいな笑顔で一日の疲れも吹き飛ぶんだけども。

真実はそうではないので、これからの学校生活の苦労を想い、気が重くなった。

鞆を背負って、長峰さんの横を通り過ようとすする。

「ぐえ」

そうしたら、服を引っ張られて引き止められ。

なにかと思つたら、顔が近づいてきて。

それで、耳打ちをされた。

「またあした、心悟」

「……！ う、うん」

なんか耳がくすぐったくなつて、僕はすぐに退散した。

………。

まあ。

しばらくは。この一番後ろの窓際の席は、手放すには惜しいかもしれない。と、帰り道で、思った。

▽

「悠希く。約束通り、日直の仕事は代わつてくれますな？」

「うん。……ありがとう、さら」

「おー。そんじゃね、あとまかせた」

ひとつ言うことを聞くのと引き換えに、交換してもらった、31番のくじ。きれいに折りたたんで、そつと、筆箱にしまった。

熱を出した日（高校）

ううん。

普段は元気に起きている午後の時間。起きていてもつらいので、午前中に引き続きベッドに身を預けてみるものの、うまく眠りにつけない。

意図せずうめき声やうわごとのようなものが喉から漏れ出る。ついでに鼻水も出る。熱と鼻つまりで頭がぼうつとする。はやく楽になりたい。

さつき時計をみたときはお昼過ぎだったから、そろそろ学校も終わる時間帯だろうか。今日は、たしか本当なら、クラスの誰かと遊ぶ約束なんぞしていたような……。

ん？

身じろぎしてドアのほうを見る。なんだか空気が普段より悪い気がする、閉め切った自分の部屋。そこに、気のせいではなければ、こんこんこん、と軽い音が鳴った。

「はい」と声を出した気もするし、出せなかった気もする。ドアが開かれて、部屋の外の空気と一緒に、誰が入ってきた。時間帯的に妹か、もしかしたら母さん、大穴で父さんか。

「お。本当に風邪ひいてる。バカなのに」

しかし相手は、家族の誰かではなかった。……なんと美しい声だろう。風鈴の音のような清澄な響きが、いまいち聞こえにくい耳にすつと入ってきた。ちゃんと見ようと
思つて、重たい腕を持ち上げて目をこする。するとそこには、髪の毛の長い、美しい少女が
立っていた。

はえ、て、天使。

もしかして、お迎えが来てしまったのか。そこまでの熱だったというのか。そんな、
まだ高校生のみそらで……。

「? 誰と間違えてんの」

少女がこちらにやってくる、しやがみこむ。枕元に顔が近づいてきて、人相がわかっ
た。

うくくわ。ユウキくんだった。これが美しい美少女の少女だと思ふとか、どうかし
ていた、僕の脳は。発熱でだいぶ参っているらしい。

なぜここに。

「あ、起き上がらなくていいって、キツそうだし。どれどれ」

白い手が伸びてきて、横になったままの自分の額に届く。ぺた、と手の甲か、手のひ
らか、どちらかが触れた。

ひんやりしている。

「アチー！ なかなかの重症だな……ま、どうせ夜更かししてゲームでもしてたんだろ。自業自得」

額を優しくぺちぺちとやられる。

えっ……。病人をいたわる言葉がない。何しに来たんだ。

「病人をいたぶりにきた」

そんな……。そんな嬉しそうに。人の苦しむ顔を見るのが本当に好きだな。

……。

まあでも、うれしいかも。ユウキくんの声を聴くと、最悪の気分だった一日の中に変化がやってくる。本人はこう言っているが、病欠なのを知ってわざわざ来てくれたのなら、実質お見舞いみたいなものだろう。

しかも、よく考えたらこれ……長峰さんが、お見舞いに来てくれているという状況なわけで……それって、すごい。

「何がすごい？」

だって……学校のアイドルだし……いちばんかわいい人だし……熱出したくらいで、お見舞いしてもらえるなんて……。

「おやア、今日はいつもより素直っていうか、よくしゃべるじゃないの。よし、褒美をあげよう」

中身ユウキくんとはいえ……。

「……………。腹立つな、この病人」

がさがさという音がして、ベッドのふもとでユウキくんが何やらやっているのがわかったが、手元は角度的に見えない。

ややあつて、それは下のほうから、ぬつと現れた。

「じゃーん、りんごちゃん。さつき切つてき……、家にあつたから持つてきた。あとスポーツドリンクとか、ゼリーとかあるけど」

ユウキくんはこれ見よがしに取り出したタッパーのふたを、ぱか、と開ける。リンゴの切り身が入っていた。

………………。もしかして、くれるのか……………？

ユウキくんが、僕に…………？ 施しを…………？

「はい、野原くん。あーん」

恥辱を味わわせるのが目的だったか。

楊枝で持ち上げたフルーツを、ユウキくんは、長峰さんモードで口に近づけてきた。心洗われるようなその綺麗な笑顔を見ると、逆に、腹の中で嫌々ことを考えているのがすぐにわかる。毒入りリンゴか？

口を閉じていると、笑顔のままぐいぐいと口元に切り身を押し付けてきた。それでも

抵抗してみると、だんだんその圧力が強くなっていく。顔とリンゴ、ひしゃげるのはどちらが先か――。

観念して口を開けると、冷えたリンゴが入ってきた。……おいしい。心なしか、今朝母さんに切ってもらったものよりおいしい気がする。

少し痛む喉で飲み込む。おいしかった。

横を見ると、長峰さんは慈愛のほほえみでこちらを見ていた。どきりとする。もしかすると、ユウキくんにも他人をいつくしむ気持ちか……!?

「フフ……。まるで餌を与えてもらう家畜のよう」

ろくなこと考えてなかった。

……。

でもいま、長峰さんにあーんされたよな、僕……。それって、それってけっこう、あの学校に通う男子として、すごいことなのでは。

「……ふう。『長峰さん』がそんなにいいか？　じゃ、ご希望なら、好きなように演じてあげてもよくてよ」

少女は呆れ顔でベッドに頬杖をついたと思ったら、こつちを見て、くす、と妖しげに目を細めた。

どく、と、少し胸が苦しくなる。顔の熱もなかなかひかない。風邪のせいかな、なん

だかいつものユウキくと違って見える。なんか、悪い魔女みたいだと思った。

「……………。それで、どんなところが……………どんなところが、好きなん？」

長峰さん……………長峰さんという人のいいところ、好きなどころといえは……………、
胸……………。

「は？」

二の腕……………。ふともも……………。

「ハア……………軽蔑う。俗物。クソボケナス。オタク。……………もつとこう、ほら。内面の話と
かないわけ？」

あれなんかいま、ものすごく罵倒されたような……………内面の話？ 内面……………長峰悠希
の。

横暴で傍若無人、脳筋、ナチュラルボーンいじめっ子、破壊神、さみしがり、めんど
くさい人……………、

「このまま殺すか」

あとは、一緒にいるといつも楽しい……………とかだろうか。

「……………」

それからしばらくの間、自分の本調子でない呼吸の音だけが、耳に聞こえていた。い
つの間にか天井のほうを見ていた僕は、なんだか眠たくなってきた。

あれ……。おかしいな。ユウキくんは、さつきまでしゃべっていた彼は、どうしたんだろう。もしかして、お見舞いに来たところから夢か？

首を動かして横を見る。

「ふん」

「!? カツ……コツ……」

ぐじゅぐじゅの鼻を、つままれた。今日一日しにくかった鼻呼吸がここで完全に停止させられ、僕はずつと半開きだった口を全開にした。

「はい、さらさら〜」

「!? ゴエツ！ ヴォ!! にが……」

「はいお水」

「ゴボボボア!!!」

「りんごちゃん、あーん」

「ムゴゴ!!」

突如、口に何かの粉を流し込まれ、水を流し込まれ、リンゴを流し込まれる拷問を受け、僕はそのまま気を失った。

朝、すっかり本調子になって、朝食をよく食べていたときだった。

僕より先に家を出る妹が、出しなに話しかけてきた。

「あつそうだ。お前、ちゃんと彼女さんに後で、お礼っていうかお詫びっていうか、ちゃんとやれよ?」

彼女さん。……ああ、ユウキくんのことか。彼女なんかないので誰かのことかと思つた。

なるほど、昨日お見舞いに来てくれていたのは、夢じゃなかったのか。気が付いたら影も形もなかったから、熱出たときに見る悪夢だったかと思つていた。

貸しひとつだ。これは確かに、お礼を言わないと。

「んっ、お詫び? ……なんの?」

お礼をする義理はあるが、お詫びするようなことはなかったと思うのだが。妹の言い間違いだろうか。

妹は、自分の両の頬を指さして見せた。ちようどぶりっ子のポーズのようだったが、表情は真面目。

「熱、うつしちやつたと思うよ。あの人、帰るときはなんか顔赤かつたもん」

「マジっ?」

そりやまずい。恩を受けつばなしの上にウイルスか何かうつしちやつたんだとしたら、ユウキくんにあまりに悪い。模範のような『恩を仇で返す』だ。

なんとかしてこの負債は返していかないと。もし学校休んだりしていたら、お見舞いしかえすとかして。

僕とユウキくんは。まあその。友達なんだから。

そう考えながら登校したものの、その後も長峰悠希はアホみたいに元気だった。

熱を出した日（大学）

悠希さんが大学の講義を丸一日休んだ。

それに気が付いたのは、構内で悠希さんの学科の友人に、そのことについて尋ねられたからだ。こんな出来事は初めてなので、一応気になってメッセージアプリで連絡をしてみると、「風邪を引いただけ」と短く返信があった。

身体の女性化に関する通院以外で学校というものを休んだことのない、全身が健康でできている万年皆勤賞人間が、風邪を引いた。僕にとってそれは、天変地異の前触れではないかというほどの事態だった。

やつがいつも通り健康にならないと、地球が危ない。たぶん。

講義の帰りに、スーパーに寄った。

それで自宅に戻ったら、すぐに台所でいろいろと準備。

できたものや、ほかに必要そうなものを詰め込んだビニール袋を腕に提げたら、すぐにまた部屋を出る。幸い、今日はアルバイトのない日。

玄関を出て、すぐ、隣の部屋の呼び鈴を押した。

「……すみませーん。隣の者ですけど」

住人が出てこないの、声をかけてみる。まあ、寝てるのかな。

出直すかどうか悩んでいると。やがて、かちや、と鍵の回る音がした。

しかし誰かが出てくるわけでもなく、しばらく間があく。僕は、こちら側からドアを開けた。

電気が点いていない暗い室内で、人影がのっそりと動くのが見えた。

靴を脱ぎながら目で追うと、そいつはそのまま自分の部屋の、ベッドがある位置で、ぼすんと消えた。

起こしちやったみたいだ。

「ごめん、電気つけていい？」

起こしちやったなら、起きてもらおう。

部屋に踏み入り、間取りが同じなので位置が分かっている灯りのスイッチに、指をかけながら聞く。

「……あー、いいよー」

もともとと布団の動く音がしてから、少し覇気のない感じで、返事があった。ぱちり。電灯が光りだす。

部屋の主は、呻きながら布団で自分の顔を隠した。

「電子レンジ借りるよー」

雑炊を入れてきたタツパーを温め、その間に勝手に食器とか出してきて、食事の用意をしていく。

僕からこの人にできることといったら、これくらいだ。ちゃんと食べれば元気になるだろうという単純な考えの看病。

やがて、みそ雑炊のいい匂いが部屋に漂い始めると、布団にくるまっていた虫がようやく動き出す。

「……………おなか……………すいた」

ゆっくりと上半身が持ち上がる。長袖からちよんと出ている指が、掛け布団をつまんでいる。色気のないスウェットから覗く白い首に、長い髪が張り付いていた。

ふう、ふう、と深い呼吸音。おぼつかない目線が、時間をかけてこちらを向く。

僕は息をのんだ。弱っている、長峰悠希。

……………いい。

「……………心悟。なに……………」

意味が分からないことを聞かれる。このタイミングで出るセリフではない。よほど調子が悪いらしい。

なにを作ってる？ という意味か。いやそれとも、なにをしにきた？ のニュアンスだろうか。

「雑炊」

「……………」

「ん、あー、病人をいたぶりに？」

「ああ…………お見舞い？　ありがと…………」

悠希さんは弱弱しいさまで、しかしうれしそうに笑みを浮かべた。

どうやら人の声を耳に入れる余裕もないようだ。会話が成立していない。

体温をわざわざ測るまでもなく高熱だろう。伝染病の類かもしれないから、僕もうつらないように気を付けないと。なるべく、接触を避けて…………。

「ふう、ふう」

上半身を起こしたものの、まだぼうつとしてゐる悠希さんを見て。気が付くと僕は、彼女の額に手を伸ばしていた。

ベッドのふちに腰掛けて。手のひらで、前髪の下をくぐつて、汗をかいたそこに触れる。

「熱っ」

目玉焼き作れるんじゃない？

すぐに手を引こうとすると、悠希さんはぼうつとした表情のまま、その腕だけが素早く動き、僕の手首をつかんだ。は？　こわい。熱出てる時も野生の本能が生きてる感

じ？

悠希さんの緩慢な視線の動きが、僕の手に止まる。

「うわっ」

「つめたい……きもちい」

そして猫みたいにも、そこに自分の顔をすりつけてきた。

うお……なん……これ……肌すべすべしてるな。でもやっぱり熱い。自分が何やってるか自覚あるのかな。ないんだろうな……。

病人を無下にあしらうこともできず、なるべく別のことを考えるようにしながら身を任せていると。

「……いー あ、あんま寄るなっ」

「ヴ!!」

突如、病人のものとは思えないパワーで僕はベッドから弾き飛ばされた。

床に転がりながら、「風呂入ってないし……」という続きのセリフを聞く。悠希さんは清潔なお方。

しかし今ので、やはり本調子ではないのがなんとなくわかった。今日の悠希さんは、例えるなら、心臓病でハアハアしながら人造人間19号と戦ったときの悟空くらいのパワーしかない。本来の超サイヤ人はこんなものではない。



「ごちそうさまでした」

「うん」

自分では食事を用意できなかったんだろう。腹を空かせていたらしく、悠希さんは雑炊もおかずもフルーツも全部平らげた。

食べている間は元気があって、会話も通じた。これで治ってくれたらいいけど。

「心悟。あのさ、風邪ひいたとは連絡したけど、その」

悠希さんは、少しうつむきながらそんなことを聞いてきた。地肌が白いからか、熱で頬が赤くなっているのがわかりやすい。

「どうしてわざわざ……ここまで、してくれる？」

「どうしてって」

普段から人にご飯をたかったり、召使いみたいな扱いしてる人が、今日は殊勝な態度だ。別にこれくらいはするでしょ。

しかし具体的な理由が必要だというなら、ないこともない。

「高校のときかな、悠希さんが僕を看病しに来てくれたことがあつただろ。ずっと恩返しのお機をうかがっていたんだ」

「ん……。そうなんだ……」

そうなんです。いつも元気なので、機会はないだろうと思っていたが。悠希さんはチーンと鼻をかんだ。会話に間ができる。

いいタイミングなので、食器を片付けてしまうことにする。台所はドアの向こう、廊下にある。

片付けて、戻る。悠希さんは、ベッドのふちに腰掛けて、またぼうつとした表情に戻っていた。

僕はここで帰るかどうか迷ったが、もう少しの間は目が離せないような気がして、ふたつある座椅子の片方に腰掛けた。

無言の時間がしばらく続いて、相手の呼吸がよく聞こえる。

そこに、

「じゃあ、なんでもいうこと、きいてくれる？」

「……うん？」

なんの脈絡もなく、そんな言葉がふつてきた。

えつと？ もしかしてさっきの話の続きだろうか。本人の中で、どういうふう僕との会話が進行しているんだ……？

「なんでもとは言わないが、ある程度なら」

「汗かいた。着替えたい。着替えさせて」

「……………」

何かすごいことを言われた。言葉の意味をかみ砕いていくうち、襟からのぞく首や布地を盛り上げる胸元に目が行き、だんだんと想像が膨らむ。

僕がひと昔前の漫画の登場人物であったなら、つー、と鼻血が出ていたかもしれないが、大丈夫だった。

こいつ自分が何を口走っているかわかっているのかな。さすがに男友達の範疇からはみ出しかけている気が……。

「着替え……その引き出しにあるから、とって」

「へいへい、お姫……王様」

まあ、着替えをとってあげるくらいなら、いいか……。

僕の部屋の、重ねていくとタンスの代わりになる四角い衣装ケースと違い、悠希さんの部屋にはちゃんとしたタンスが……おしやれに言うところ、キャビネットがある。その割によく部屋のすみに服を積み上げたりとズボラだが、今日はきちんと仕舞ってあるタイミングらしかった。

さて。タンスの引き出しのうち、どれに手をかけるかで悩む。女性の衣装入れについての知識は僕にはなく、適当に開けると、悠希さんのままなんていうかその服の下から身に着ける例の布を見てしまうかもしれない。

……わかった。おそらくこの、二つ横並びになっている、他より幅の小さい引き出しこそが、手を出してはいけない段！ とみた！ つまり幅の広い引き出しを開けば、セクハラにはならない。完璧な解答。パーフェクトアンサー

僕は小さい引き出しを避け、幅広の引き出しを開けた。シュツ。

シュツ。そして閉めた。カラフルなフリフリが並んでいたため。

着心地のよさそうな生地の上下パジャマがあったので、それを選んで渡す。己に対して弁明するが、別にこれを着ているところが見たかったわけではない。決してない。悠希さん寝るときこういうの着るんだ、とは思った。

「自分で着替えておくれ」

先の着替えさせてという発言はさすがにジョークとして受け取ったが、念のため言うておいた。

まぶたが半分閉じた目つきで着替えを受け取った悠希さんは、それから、のそのそとベッドに上がり、あぐらをかいて座った。

そして、上着のすそに両手をかけた。

白いお腹が、外気にさらされていく。

「ちよつ……マアアアアイ」

とつさに距離を取り、手で目を覆った。指の隙間ごしに目があうと、「ああ、そっか」

とか言いながら向こうを向いた。

そしてそのまま脱いだ。

なんで!? ふつう脱衣所とかで着替えるだろ!?

なんかサポーターみたいみな下着を着けてるけど、それでも煽情的な背中と、その向こうにあるお山の輪郭を見てしまい。ここで、あ、自分が出ていくべきだったのだとようやく気が付く。己のスケベ心に囚われ行動が遅れた。

いろいろと惜しいがここは出ていくべき！ 相手は高熱で夢見心地なんだろうし、後で嫌われるような真似はしたくない。

「タオルとって」

「あっはい」

引き出しにあったそれを手に、よそを向きながら腕を伸ばし、渡そうと試みる。

「背中、ふいて」

「は?」

思わずそちらを見ると、彼女はもう、僕に白い背中を向けていた。寝るとき用の下着?も脱いでしまっていて、腕で前は隠しているようだったが、背中は何も隠れていない。心臓が悲鳴をあげる。

嘘だろ。友達に背中拭かせることある……!? 何考えてんだ。何も考えてないのか。

どうするどうするどうする。無視して逃げたほうが悠希さんのためじゃないか？
うううう。なんでユウキくんなんかに、こんなに惑わされねばならんのだ。実は意識
もしつかりしていて、僕をからかっていたりはしないか？ わからない。

上半身裸の長峰悠希（すごい）が目の前にいると思うと、頭がくらくらする。それこ
そ熱にあてられたようだ。

いつもよりすこしだけ強い、髪のおい。

ごくり。

唾をのみこむ。目はそこに吸い込まれてしまつて、もう逸らしてられない。彼女の
しみひとつない、陶器みたいな背中。僕は、僕は、そこに手を伸ばしていき――、

妹のアホ面を思い浮かべながら、無心で汗を拭きとつた。

「終わり」

「……………」

肩越しに首だけでこちらを振り返るしぐさをする悠希さん。けつこうしつかりして
る肩の骨格が逆にエロスだと思ひ、僕は妹のアホ面とガハハという笑い声を脳裏に浮か
べた。

そして上半身裸の人は、ぼそぼそと何かしゃべつた。耳を傾ける。

「……………前は……………」

僕はタオルを病人の顔に投げつけた。

しばらく退室して、それから、再度様子をうかがう。ちゃんと着替えて、布団を被っていたので、安心した。

あとはゆっくり休んでいてもらおう。そろそろ帰ることにする。

最後にひとつ声かけでもと思って、枕元に寄った。

「悠希さん、体調は良くなりそう?」

彼女は布団から腕と顔を出し、こちらを見た。

そして、なんか笑い出した。こわい。

「にひひ……熱出してよかった」

「はあー? なんで」

「なんか、かまってくれるから」

「……………」

………なんか。いつもより……いつもより、かわ………かわい………

渴いた叫び。(FIELD OF VIEWの曲)

「そつ、そろそろ帰るね。お大事に」

「え……………」

立ち上がろうとして、脚に力を入れると。

大蛇のように素早く伸びてきた腕が、僕の服を掴んだ。

「待って」

くいくい、と引つ張られる。普段のパワーなら服が引きちぎれていたことだろうが、そうはならなかったたので、なんだか、甘えん坊か寂しがりの子供みたいな印象を受けた。

「いかにですよ。まだいて」

「そんなこと言われてもね」

「ここにいて」

わがまま出たな……。

枕に近い位置で、そのまま床に腰を下ろす。僕はやつぱり、こいつには逆らえないのだ。ずっとそうだ。たぶん、これからも。

「手えかして」

一瞬なんのことかと思つたが、すぐに意味を理解する。言われた通り、腕を伸ばし、お求めのものを差し出した。熱い手のひらがそれを捕まえると、そのまま赤らんだ顔のほうに運ばれる。そうして、すり、と心地よい感覚が手に返ってきた。

「へへへ……あれ。つめたくない。きもちくない……」

不満のようだった。寒い外からやってきてすぐなら、手も冷たいけど……、

今はほら。いろいろあつて血液の巡りが良くなつちやつたからな。僕の全身はつま

先にいたるまでもうアツアツだよ。

「まあいつか……」

「! ちよつ、もう、悠希さん。……離してつて」

愛想笑いのようなものを浮かべながら、相手をたしなめる。悠希さんが、僕の腕を引つ張つて、しがみついて、抱き枕か何かにしようとしていたからだ。それは体勢的に無理がある。あとやわらかい物体があたっている。

悠希さんは不満そうにむくれた。

「じゃあ、こつ」

悠希さんは、僕の手を握つた。片手同士を繋ぐかたちになる。

どうあつても家に帰す気はないらしい。困つたな……。

「これで、いなくならない」

「はいはい」

そうして、手をかつちり繋いだまま、彼女は目を閉じた。

その後は、たぶん、たくさん話したいことでもあつたのかもしれない。しばらくぼそぼそと、他愛もない話題や、うわごとを口走っていたが、それもやがて寢息に変わつていった。

それが、あんまりきれいな寝顔だったものだから。僕は、ふ、と穏やかに笑つて、こ

うつぶやいた。

「——おやすみ」

ほんで必死の形相で脂汗を流しながらこの指を解こうと小一時間格闘したが、ゴールが見えてくるとなぜか復活する万力のような握力に締め上げられ、あきらめてベッドにもたれかかりながら寝た。

▽

朝。長峰悠希は、野郎とつながれた自分の左手を見て暴れだした。

「ん？ なにこれ……、はっ？ え、心悟……これ……はあ!? なんっ」

「ギヤアアアアア!?」

腕が!! 曲がるはずのない方向に!!

「な、な、なんでいる!?!」

「一応、看病しに……覚えてない?」

悠希さんはしばし黙りこくって。

昨日のことを思い出せたのか、そうでないのかはわからないが。やがて、唇をかんで、悔しそうな顔……恥ずかしそうな顔? をした。(長峰悠希に恥の感情があるかどうかは怪しいので、実際にはどういう感情なのか判断できなかった。)

「……出てけ!」

追い出される。やっと解放された……。

ただ、まだ顔が赤かったので、結局熱が下がったかどうかはわからない。昨日よりは元気そうだったので、じき治ると思うけど。

とりあえず、今回学んだことは。

弱っているヤツがいつもよりかわいいからといって、あまり構わないほうがいいという事。

そして、背中とうなじと肩もいいな……ということだ。

▽

後日。熱も下がって冷静になったのか、ちつつちやい声で「ありがとう」と言われた。あんだって？ と大声で聞き返したら殴られた。なんだその態度は。

相合傘と彼シャツ（高校）

ある晴れた朝の教室。

……と思いきや、窓から外を眺めていると、唐突に雨が降ってきた。今朝の曖昧な天気予報の秤は、雨のほうに傾いたらしい。

念のため傘を持ってきたことに加え、降り出すより早く教室に着いていた僕は、もちろん無事だ。でも、その後からやってきたクラスメイトの何人かは、もうびしょ濡れ。濡れてしまったもの同士で、不満を分かち合っていた。

教室がにぎわってきたら、近くの席の男子たちで、いつものようにしようもない会話が始まる。参加しているだけで彼らと顔を突き合わせ、耳だけ傾けていると、今朝の話題は、やはり雨についてだった。

「あつ。俺、ひらめいてしまったんだけど」

「つまらないひらめきだったら謝れよ」

「今日つてき。長……女子の制服、透けたりするんじゃないか？」

「長……女子の服が!？」

「天才かな？」

我々らしいゲスな話題であった。この小声の会話を女子が、というかまともな人間が聞いていたら、じんわりと顔をしかめることだろう。

うーん。女子とはまた違った理由で、ユウキくんも嫌がるだろうな。自分がびしょ濡れになったくらいで、男子にじろじろ見られるという状況は。

「おはようございます」

「おはよー長峰さん」

「お、そのカツコ。さては傘忘れたなー？ 長峰家のご令嬢ともあろうお方が」

「あはは。今日は油断しちゃった」

それはそれとして、僕は他の男子とともに、ドライガーV2ぐらいの勢いで声のする方へ首を回転させた。

『……………』

男たちと気持ちが一いつになった気がした。

長峰悠希は、体育着とジャージを着用していた。おそらく制服が濡れてしまったので、教室に来る前に更衣室で着替えたものと思われる。

やっぱりこの人はガードが堅い。僕がもし女の子になったら、濡れた制服のまま登校してしまいそうなものだが、ユウキくんはそういう隙がありそうでない。しつかり周り

の視線というか、自分のキャラクターを意識しながら生活しているのだろう。

そのあと、男たちの小声会議は『体操着で座学を受ける長……女子もいいよね』という話題に移ったのだった。

わかる。品行方正キャラで売ってるのにジャージの前は開けてるところとか、いいと思う。多分閉めたら服がキツくてああせざるを得ないんだと思う。

じめじめとした空気と空模様のまま、一日の授業が終わった。

放課後、友達関係や学校に関する用事もないので、さっさと教室を出る。ちよつとトイレに寄ったあと、傘を手に、学校の玄関へと向かった。

昇降口。外靴に履き替える。ガラスのドアを抜ければ、そこは屋外だ。空からしとんと落ちてくる線の群れを見ながら、靴下が濡れる不快感を想像しつつ、まあ帰りだしいいやと傘を開く。

そこで一步目を踏み出すのをためらっているうちに、人の気配を感じた。右のほうを見る。

「……………」

通学用の鞆だけを持った長峰悠希が、ガラスに寄りかかり、そこでただ雨模様を眺めていた。退屈そうにくちびるをとがらせている。

……ええと。

そうか、傘忘れたのか。ってことは……車のお迎えさんを待っているのかな。

なら、今日は一緒に帰る約束とかしてないけど、声をかけた方がいいだろうか。暇そうだし。

一歩近づく。ユウキくんが、姿勢はそのまま、こちらを流し目で見たのがわかった。

「ユウキく……」

「長峰さん!! 傘ないの!? じゃあ俺のに入る!？」

「俺のに入ってくれ!!」

「いや俺の!!」

「俺!!」

睡蓮花のイントロみたい、傘を持った男子生徒たちが俺俺俺俺と集まってきた。長峰さんともあろう女子が、ひとりで目立つところはずっと立ってるからだ。

突然の雪崩に、長峰さんはかろうじて苦笑いをつくり、傘の群れに飲み込まれていった。

ふむ。彼女を中心に男たちの傘が集まった様子は、まるで色とりどりの花を束ねたブーケのよう……

というより、スーパーに置いてある袋売りのきのこ類みたいだった。さして。

知らんふりして帰るか。

「あ!!、そこにいるのは、私の彼氏の野原くん!!」

いよいよ雨の中に出ようと歩き出したところ、そんなおそろしい声がして、本能的に足を止めてしまい、振り向く。長峰さんの周りを囲んでいた男子たちは、言葉のパワーで三国無双の雑兵みたいに吹っ飛んでいた。

や、やばい! 逃げよう。彼らに顔を覚えられる前に。ヤツに捕まる前に。ぴちやぴちやと水音を鳴らし、僕は駆けだす。

「あ、待って野原くん!」

「ヒイツ」

がっ。と、腕を掴まれる。バカな。この距離を一瞬で!?

そのまま、まるで仲睦まじい恋人のように、腕に抱き着かれた。お、折られる――。

「一緒に帰ろっ。傘に入れてくれるよね♡」

「はっ、はい……」

ということ。いわゆる相合傘を、あのユウキくとやるはめになった。

▽

相合傘。といえば、男女の甘酸っぱいイベントという認識はたしかにあるが。

普通に、傘を忘れた男友達を入れてやる、ということもあるわけで。なんなら小学生

のとき、ユウキさんとひとつの傘で帰ったことはある。

だから、これはあの頃の延長であって、いちいちドキドキしてやる筋合いはない。はずなのだが。

傘を叩く雨の音、遠くで車のタイヤが水を跳ね飛ばす音。そういうのがよく聞こえることは、いま、会話がないってことだ。

歩いていると、ときおり長峰さんの肩が軽くぶつかってきて、そのたびになんか心臓が小ジャンプをする。

この心臓病の原因を考える。

……この人に無言でいられると、『クラスのあこがれの女子』になってしまうからだろう。

そういうのズルいとおもう。ちゃんと、小学生のときみたいに、傘を奪い取って走って行ったりしてほしい。

とりあえず、とりあえずなにか、話題。

「……あの」

「なあ。そっちの肩濡れてるけど」

愛用の傘の半径は、高校生二人の肩幅を収めるには少し足りなかったらしい。

しかし特に問題はないはず。持ち手を握っているのが僕である以上、そりゃあ気を

遣って、相手側にスペースをやや多めに配分したりもする。大抵の人はそうするんじゃないかな。肩なんて、人体のうちで一番、濡れていてもなんとも思わない部位だ。

「まあ、傘つてもものは一人用だし」

「ふーん。女扱い？」

「ボス扱いですね」

「そうか。くるしゆうない」

校門から何故かずっと無表情だったユウキくんが、小さく笑ったので。ようやく少し緊張感がほぐれた。

「そんじゃ、もつと近う寄れ。詰めれば入るって」

「! いや、それは……」

「いいから」

腕を組まれ、引っ張られる。ぶつかりがちだった肩は、いよいよ本格的にくつついてしまった。

腕を組んだりなんかしている以上、歩いていると、たまに手のひらと手のひらがぶつかったり、それどころか肘に何か異様に存在感のあるブツがあたる。

近くないっすかね。ユウキくんは気にならないのかな……。

「……何？」

顔面も近かった。安易に横を向いてはいけないようだな。

「あ。……ふーん。まさか野原くん。わたしと相合傘で、ドキドキしてるんですか？」
「はあああ?！」

バカ野郎が。そんなわけないが？

横を向いたらどんな表情をしているか想像がつくので、歯ぎしりしながら前を向く。
すると、

「心悟くんの童貞」

雨音でも消せないささやき声と、熱くてくすぐったい吐息が、耳を襲った。

「ンヒイ！」

「あ、ちよつ！ おまえつ、ふざけんな、濡れただろー！」

思わず飛びのいてしまい、怒られた。いやそっちが悪いだろー！

そのあとは、同じ事態が起きないようにするためか、レスリング選手ぐらいの力で腕を組まれた。助けて……。

しばらく歩いた後、ふとわいた疑問を投げかけてみる。

「そういえばユウキくん、学校の玄関にいたけど。迎えの人待ってたんじゃないの」

生徒が雨の日にあの辺で突っ立っているなら、保護者の送迎車待ちというケースも考えられる。長峰さんは、あまり女子の友達と一緒に下校することはないらしい（男子は

言わずもがな)ので、誰かを待っていたとしたら、やはりお迎えさんかなと思ったのだが。

話題をふりつつ、横目でユウキくんの雰囲気確かめる。顔が近すぎるのでちよつと直視はできぬ。

彼は、少し返答を考えるような間を置いて、

「ううん。心悟のこと待ってた」

などと言ったので、こちらの心臓が跳ねた。

「ほら、この前新しいゲーム買ったって言ってたじゃん。一人用の。今日ヒマだし、邪魔したろーと思ってよっ」

イヒヒと添えられる笑い声。……そ、そういうことね。

いい性格してますよあなた。今日も一人でじっくり進めようと思ってたのに。相変わらず嫌なところ突いてくるのがうまいな。

「……………」

下校中の道に、なにか変化があった。音だ。雨音が少し、大きく。そして降る勢いが、強く。

やがてそれは、傘の防御範囲をも抜いてくる、角度のついた土砂降りに変わった。

「うわ！ やばい」

「走ろー！」

不幸中の幸いとして、今いるのは僕の家まであと少しのところ。ユウキくんは、急いでそこへ駆け込むことを選んだようだ。

僕たちは、やがて傘すら畳んで、駆け足で雨粒にぶつかっていった。

▽

「ひい〜」

自分の家の玄関へ駆け込んだときには、もうだいぶ濡れてしまっていた。すぐに着替えてしまいたい。傘を閉じて家まで走るだなんてのは、アホな選択だったのかもしれない。

「お邪魔します。……あー、どうしよ……」

「どうぞ上がって。タオル持つてくる……よ……」

靴を脱いで、ユウキくんに声をかけようと振り向いて。そこで言葉が途切れる。

そしてすぐに、今朝の下世話男子会議の内容を思い出した。

……目の前にいる、学校でいちばん可愛い女子は、それはもう見事にびしょびしょになっていた。

羽織っている学校指定のジャージは、すっかり雨を吸って色濃くなっている。そして、その下の、白い体操着は――、

まずいと思って、一番目立つ部分を見ないようにしようとした。目線を下げる。シヨートパンツから伸びる白い脚を、しずくが這っている。玄関にぼたぼたと水滴が垂れていく。目線を上げる。長い髪が首や顔に張り付いていて、長峰さんはうつとうしそくにそれを掻き分けた。

濡れ髪の間からのぞく目と、こっちの視線がぶつかる。

あつ。やべえつ、ぶつ飛ばされる！

「……………ごめん、できたらでいいんだけど、着替え貸してくれない？」

平静な声色で話しながら、ユウキくんは、わざとらしくない自然さで、腕で胸元を隠した。

少し、困ったような顔をしていた。

それを見て、僕はどうしてか、まあまあ強い衝撃を受けた。自分のスケベさを見抜かれた気がしたからかもしれないし、ユウキくんが、目の前で、ちゃんとした女子みみたいな仕草をしたからかもしれない。

「……………聞いてる？」

ほんの一瞬、ユウキくんが体を固くしたように見えた。

「……………ごめん。なんて？」

僕はつとめて、相手のひたいの辺りを見るようにした。多分、じろじろと見られて嫌

だったんだ。すごく申し訳ない気持ちになった。

言葉の内容が頭に入っていないなかったので、聞き返す。

「服貸してくんないかなー、つて。あとタオル」

「あ、ああ。おっけー」

濡れた靴下を手に、自分の家に踏み入っていく。ユウキくんも、ローファーと靴下を脱いでいるところだった。

「妹の服でいい？」

「あー……いや、たぶんその……サイズ合わないと思うな、妹ちゃんとは」

足を止める。たしかに、妹は小柄な女の子だ。ユウキくんとは体型がずいぶん違う。

えーどうしたらいいんだろ。母さんのやつ……なんてさすがに、友達に貸したりできないしな。

「お前の貸して」

「え？ ……あ、うん。いいよ」

ちょうど身長も同じくらいだし、そうすればよかったのか。

了解し、ユウキくんより先に先にならずんと自分の部屋へ戻る。引き出しから着替えを見繕ったところ、ちょうど廊下からユウキくんが覗いてきた。折りたたんであったそれを、そのまま手渡す。

「はい。男物だけど。脱衣所はわかる？」

「男物……」

ユウキくんは着替えを受け取ると、それをしばし見つめた。

あれ。あつ、もしかして失言だったかな。

「へへ。ありがと」

大丈夫だったみたい。

タオルも一緒に渡すと、ユウキくんは脱衣所のほうへ行つた。ドライヤーある？ と

も聞かれたので、洗面台を探せばあると教えた。

いなくなつたところで、僕も着替えることにした。

▽

実に30分もの時間が経つたあと、彼は戻ってきた。おそつ。

モニターに向かってゲームをしていたところに、「入っていい？」と声がかかった。別に聞かなくてもいいものを。適当に返事をする。別

視界の端で部屋のドアが開き、人が入ってくるのがわかった。

「どうぞで適当に座ってー」

「……あのさ、心悟……」

「はこよ」

「ごめん、ちよつとこれ……少し……狭いん、だけど」

「えっ？」

視線をそちらにやる。

……僕が部屋着にしているTシャツ。そこにプリントされたメーカー名の文字が、飛び出す3D文字になり果てていた。思わず目を限界まで見開く。

貸した服はいま、長峰さんの抱える例の荷物によって、生地の耐久限界を試されてしまっていた。あと、短パン。貸したやつってあんなんだっけ？ 普通サイズのものだったと思うのだが、窮屈そうで、長峰さんの下半身のラインが出ていた。パン生地のように白いふとももがまぶしくて、僕はウツと目をしばたいた。

なんて感じに、じろじろと無言で見ていると。

ユウキくんはまた、何かしゃべりながら、腕で体をそれとなく庇う仕草をした。

例によって、僕はがーんとシヨツクを受けた。

「ご、ごめん……なんて？」

「だから、なんか、上着貸してつてば。……何回も言わすな」

目をそらしながら言われる。うっ。

無我を心掛けながら、クロゼットからなるべくサイズの大きいパーカーを出してきて、それをユウキくんに投げつけた。

「サンキュ」

モニターの前に座りなおす。なるべく意識しないように、別のことに集中してしまおう。

……画面の中では、生徒会長で美人で巨乳の完璧なお嬢様に見えるが実は主人公にはかわいいところも見せるヒロイン候補が映っている。そろそろ個別ルートに入れたかな。

「あ、あれ？ 閉まらな……」

え？ うそだろ？ パーカーを着ようとしているであろうユウキくんのほうから、不穏な声が聞こえた。閉まらない。というのはフアスナーが？ そんなこと……ある？

「フンッ！ よし」

ギョヴォヴォ！ という音がした。おそらく怪力でチャックを上げたのだと思われる。そんな音初めて聞いたよ。

無視無視。なんにも気にならない。俺は今、ゲームの主人公と一体化している。「な。これが新しいゲーム？」

横にやってきた人は、膝立ちになってモニターのほうを見た。視界の端に、健康的なふとももが映る。

……………

僕はよこしまさゼロの綺麗な心で、ユウキくんの恰好をチラ見した。

……あのサイズの上着でも収めきれないものがギチギチに詰まった感じになってい
るのではないか、などと心配したが。長峰悠希は普通に着こなして、ポツケに両手を
突っ込んでいた。あく安心した。（衛宮切嗣）

ショールパンが短くてパーカーが大きいせいで、下に何もはいてない人みたいに一瞬見
えないこともないが……いやいや。ちがうちがう。ユウキくんが短パンとパーカーで
家にいるだけだろ？ 昔と同じじゃん？ フツの光景ですわ。

「……なにこれ？ さつきからセリフと選択肢ばかりで……女の子とイチャイチャす
るだけ？ つまんね」

「はあああつ、ちがつ、それは違うユウキくん」

今やっているのは、いわゆるギャルゲーに分別されるものであるけどもストーリーが
かなり凝っているアドベンチャーゲームで近年はスマホで遊べるソーシャルゲームと
しても大ヒットを記録しておりアニメ映画化などメディアミックスも充実そして原
作の5人いるヒロインはどれも魅力的だという話でしかし恋愛だけがメインではなく
緻密な世界観と熱い物語で多くのファンを獲得した燃えゲーであって世間様が二次元
キャラを見たときに思うようなキャラキャラした作品じゃないんだ！

「ふーん」

ああああ！ 出た、オタクじゃない人がオタクを見るときの冷ややかな視線。高校ではなるべく隠しているので、久しぶりに至近距離で浴びた。

邪魔してやる、なんて言っていたユウキくんだったが、ほんとにこの手のジャンルに興味がなかったらしく、のっそりとモニターの前から動き、本棚のマンガを物色しだした。

邪魔されなくてよかったという気持ちと、一抹の悲しみ。

マンガを見繕った彼女は、そのままぼすん、と僕のベッドに飛び込んで、寝そべってページを開いた。もはや自分の家か。

ゲームを進め、疲れた目のあたりを指で揉む。気が付くと、だいぶ時間が経っていた。いま、美人で巨乳な生徒会長——『水野渚』^{なぎさ}が、戦いで傷ついてしまい、主人公の家にかくまわれて休んでいるところ。

破れてしまった衣服の代わりに、主人公の服を着て、ほのかにイチャイチャしている。まあギャルゲー的パートだな。CGが埋まる。

そろそろセーブして終わろうかなと思っていたところに、もぞもぞと布団の動く音がした。

後ろから声。

「お、これあれだ、『彼シャツ』じゃん」

嘲笑を含む声色。むっ。いちやもんつけてくる気だな。

「あつはは、オタクの妄想気持ち悪う。付き合ってもいないのにこんな媚びてくる女、いるわけない……じゃん……」

「……………」

「……………」

そのあと、ユウキくんが「迎え呼んだー」と発言するまで、無言が続いた。

▽

翌日の学校。昼休みをうとうとしながら過ごしていると、女子の集団がこつちを見て笑っていることに気が付いた。自意識過剰でなければ。

やがて彼女たちの視線は、教室の後ろの黒板へと移った。つられてそちらを見る。

♡

野一悠

原一希

いつの時代の学生だよ、と目を疑う落書きが、味気ない黒板の端に施してあつた。これもいわゆる“相合傘”である。

クラスの誰かに昨日の帰りを見られたのだろうか、なんというか、いろんな意味で恥

ずかしい。いじりとしてもなんにも面白くないし……。

消しちまおう。ということ、席を立った。

黒板消しを拾い、落書きに手を伸ばす。

「ん？」

同じく、黒板消しを手にした誰かが、隣に立っていた。

その人物と顔を合わせる。

互いに不意を突かれた表情になっていたと思う。彼はこちらを認めたあと、無表情に戻り。それから、女子のみんなに見えない角度で渋面をつくり、僕に向かって手でしつとやってきた。

これは……『去ね』のハンドサイン！

とぼとぼと自分の席に戻り、後ろを見る。長峰さんは、黒板消しをちよいちよいと動かしたあと、チョークで何やら書き込んでから、女子の集まりに戻っていった。会話の内容はあまり聞かないようにしたが、表情からして、みんなにからかわれる長峰さん、という様子だった。

再度黒板を見る。

♡

野一渚

原一

テメー何してんだユウキ!!

黒板の相合傘は、昨日遊んでいたゲームのヒロインの名前に訂正されていた。教室の対岸にいる犯人をじろりにらむと、ヤツは女子との会話の合間を縫って、こつちに向かつて赤い舌を小さくべ、と出した。に、憎たらしい。

鼻息荒く席を立つ。僕は落書きを修正すべく、黒板消しとチョークを手にした。

佐一渚

藤一

「ん? えつ、えくく?? ちよつとなんだよこれ。渚ちゃん? って誰? ねえ。他のクラスの子かな? うわくなんだよこれ、恥ずかしいなあ。ちよつと探しに行つてこよっかなっ」

これでいい……。

教室へ戻ってきた佐藤くんは、何を思ったのか非常にうれしそうに、架空の女の子を探しに教室を出ていった。

渚ちゃんはいいい子だぜ。きつと佐藤くんも気に入るさ。

△

心悟の家で待たせてもらっているところに、迎えに夕崎さんが来てくれた。

今日は少し変な空気になったけど、とりあえず、服は洗濯して帰すからと約束して、バイバイとあいさつをした。

路肩に停めてあつた車の後部座席に乗る。発車して、窓から外を見ると、近くにまだあいつが立っていた。ので、小さく手を振った。

クーラーの効いた車内で、外の景色を眺める。

窓際のでっぱりに頬杖を突こうとすると、自分の着ている上着の、少しあまった袖が目に入った。

かまわず顔を乗つけようとすると、気づくことがあつた。

……違う、においがする。

すん、と息を吸ってみる。

よその洗濯ものの匂い。他人の匂い。……男子の匂い。自分からはしない、匂い。心悟のにおい。

「……!？」

バックミラー越しにこつちを見ていた夕崎さんと、ぼつちり目が合った。

「あつ、やつ、あー、鼻が、寒くて鼻がムズムズしちゃうな。すすんツ」

「……悠希さん……」

「は、はい……」

「……」

「……」

「家政婦は……見た」

「!？」

肝試し（高3ぐらい）

▽肝試し

6時間目のロングホームルームは、先生が『学級レクについての話し合い』の時間にしてくれた。

学級レクというのは、クラスみんなで参加するレクリエーション活動のこと。その内容は、たとえば、体育館を借りてバレーボールをすることだったり、あるいは、宿泊施設をクラスで一晩貸し切りにして遊ぶなんてことも。クラスの誰かが、または全員がしっかり計画を練って、保護者や先生の協力まで取り付けられたなら、後者の話も実現できるだろう。

学期末、終業式を控えたこのタイミングなら、先生も可能な限り協力してくれるという。というわけで、クラスメイトのみんなは今、この機会を盛り上げようと話し合いに励んでいるのだった。

「……ということ、晩御飯はバーベキューを楽しんで。そのあと、夜の7時からについては……皆さん、何か意見はありますか？」

今学期の学級長を務める長峰さんが、司会となって呼びかける。

ふつうに談笑して解散でいいんじゃないの。未成年の僕たちには、夜にできる遊びなんてそうないだろうし。

「はいはいはい！ 『肝試し』！」

「お、いいねー」

!?

「そうだ！ 肝試しの前に、みんなでホラー映画観賞会をして……！ なんてどうよ？」

!!??

「こわ〜！」

「賛成！」

「先生、視聴覚室は使えますか？」

「いいよー」

「男女ペアがいい」

「えー、それはヤダ」

「では、7時から映画鑑賞、9時頃から肝試し……ということでもよろしいでしょうか。

……肝試しの詳しい内容については……」

「では皆さん、まずはちゃんと保護者の方に許可をもらってきてくださいね。これで全体での話し合いを終わります」

「……いやー、意外と楽しみなもんだね学級レク。野原くんはもちろん参加するだろ。長峰さんも来るんだし……野原くん？」

「野原？」

「……せ、先生!! 野原くんが、白目剥いて痙攣してます!!」

周りから騒がしい声が聞こえる。

な、なんだ、いったいどうなったんだ、話し合いは……、

「野原ー! 死ぬなー!! 長峰さんとペアで肝試しができるかもしれないんだぞ!! 羨ましい!! 死ぬー!」

あああ!! 『肝試し』……本当に決まってしまったのか。あまりのことに現実逃避していたが、やはりこれは夢ではなかった。

その単語を聞くだけで、身体ががくがくと震え、冷や汗が出る。そうだ、僕は……僕は……、

こわいのは、めちやくちや苦手なのだ。

▽

ついにやってきたその日。

夕方6時からのホラー映画観賞会には、コンタクトレンズを外して、モニターから一番遠いところに座ることで対処した。おかげで作中で何が起きているのかは、大体わか

らなかつた。

音声も怖かつたので、イヤホンで音楽を聴いたり、近くにいた金田くんや山根さんにひたすら話しかけたりした。どちらからもすごく鬱陶しそうにあしらわれた。

夜の8時半ごろ。学校の視聴覚室を使った映画観賞会を終え、最高にあつたまつた（最高に冷えた?）我々は、校舎から少し離れたところにある旧校舎棟へと向かう。

旧校舎といつても、フィクションのそのように立ち入り禁止の廃屋状態、というわけではなく。普通に移動教室のひとつとして使っている部屋もあるし、物置部屋や、小規模部活動の部室がある。取り壊し工事は僕らの卒業よりもっと先のことだという。

けれど、新しい校舎よりもずっと不気味な雰囲気があるのは確かだ。古い学校にありがちな七不思議もある。たとえば、旧音楽室には霊がいて、そこを使用している郷土芸能部では時折体調を崩す生徒が出る、とか。同部の靈感の強い生徒曰く、「あそこは本当にいる」とかなんとか……。

ふつ。なんとも非科学的じゃないかね、この21世紀に。

さわやかで余裕のある笑顔を保ちながら、クラスメイトたちの後ろをついていく。そして旧校舎が近づいてくるにつれ、僕はすべての穴から脂汗を分泌させ、全身の1秒間の振動回数を増やしていった。

「ん、野原、なんか顔色悪くね? ……なんか震えてない?」

「大丈夫だよ、ありがとう山根さん」

「震えすぎて声が二重になってない？」

たしかに僕の全身はいま、エヴァンゲリオンのナイフぐらい振動しているが、これはほら、夏の夜が意外と肌寒かったりするせいではないだろうか。

山根さんはちよつと引いたような顔をして、僕から離れていった。よし、ごまかせたな。楽しいレクリエーションの日にクラスメイトに心配させて、彼らの気分を下げるようなことはしたくない。

「ゆきー。ちよつと。相方が調子悪そうだよ」

「え？ なになに、もう……」

と思つたら、誰かの腕をひっぱつてきた。『ゆき』……女子か……。そんな優しそうな名前のクラスメイトいたかな。

などと一瞬考えたが、彼女が僕の前に引つ立ててきたのは『長峰悠希』であつた。貴様か……。『ゆき』……。

「うわ!!」

僕の顔を見て、ユウキくんは目と口を大きく開いた。賢く理知的なクラス委員長の長峰さん、という印象とはギャップがあり、くりくりとした目とアホっぽく開けられた口がかわいらしくはあつた。

……そんなに顔色悪いのかな。まさかもう既に霊が僕に憑りついて……？

「なっ……おま……だ、大丈夫ですか？ 野原くん……」

あぶなかつたねえ長峰さん。いま本性のほうの喋り方と表情が出そうになってたよ。みんなのいるところで。

ユウキくんの顔を見たら多少震えがおさまった。（ユウキくんのほうが恐怖の対象として上位のため）

旧校舎への行軍を再開する。途中、長峰さんが横から声をかけてきた。

「あれ……野原くん。メガネしてる」

珍しいものを見た、というニユアンスのようだった。そういえば、外出するときや友達と遊ぶときはコンタクトレンズを着用しているので、ユウキくんに眼鏡を見られるのは、もしかしたら高校入学からは初めてかもしれない。

「朝から晩までコンタクトしてると、目が変な感じになるんだ。さっき外して、これにかえてきた」

「そうですか。……なんかなつかしい」

ホラー映画を回避するために外したというのが厳密な理由なのだが、それは言わなかった。

ユウキくんは、僕の眼鏡の何がおかしいのか、機嫌よさそうに目を細めていた。

「なになに。ゆきは野原の眼鏡見たことあつたの？　いつ？　夜？　夜中？　いかがわしい関係？」

横並びに歩いていた山根さんが、ニヤニヤしながら長峰さんの顔を覗き込む。

「教えな―い」

「出た〜秘密主義。怪しいわあ」

「怪しい女がモテるのです」

「お前がモテるワケは顔と胸だろーが」

「いやあ、性格とかも……」

「あーね。あーねじゃないわ、自分で言うなっ」

……あんまり、女子とどんな会話してるのかとか、聞いたことなかったけど。けっこう仲いいんだな。軽口を言い合っている様子は本当に楽しそうだ。

でも、僕といるときとはまた別人みたいで……陳腐な表現だけど、なんだか〴〵女子〴〵って感じで。そのせいか、隣にいと、ほんの少しドキドキする。それとほんの少しだけ、僕の知らない彼女を知っている女子たちが、羨ましくなった。

どっちが、本当の悠希ユウキなんだろう。それとも、どっちも本当？

「よし、このへんで一旦集合しよー！　指示を聞け男子イ！　『ペア決めくじ引き』を……やる！」

『ウオオオオ』

耳に副級長の号令と一部男子の咆哮、視界に薄気味悪い夜の旧校舎が入ってきて、さつきまで何を考えていたか忘れた。代わりに恐怖がよみがえってくる。

肝試し。ここまでついてきておいて今更だが、心底参加したくない。いやまだ間に合う、情けないが、ペアのくじは引かずに見学にさせてもらえば……。

「さ、くじを引きに行きましょう、野原くん」

「ひっ……」

僕が逃げ出そうとしているのを察知したとでもいうのだろうか。動こうとしたタイミングで、腕を掴まれた。この状態に持ち込まれてしまったらもう終わりだ。これまでの人生で一度も、僕はこのグリップから抜け出せたことはない。

一応は抵抗しようと思ってみるが、長峰悠希の握力には少しの緩みもなかった。女性化症にかかった人は男性のときより筋力が落ちる、ってインターネットに書いてあったのに……！ 大嘘！

「あいつ、長峰さんと腕組んでやがる……」

「野原……許せねえ……」

「この節穴どもが！ 誰か助ける！」

「ねえゆき。もしかして彼氏、怖いのだメなんじゃ……」

や、山根さん！ オタクに厳しいダウンナー系ギャルっぽい外見の印象とは違って、思えばクラスメイトへの態度は分け隔てなく優しい。もしかしたら僕、山根さんのことが好きかもしれ

「関係ないです。ね。参加しますよね。ね？」

「はい……」

「君らそういうヒエラルキーなのね」

とつ捕まったまま、くじ引きのルール説明を聞く。

ふたつの箱があり、出席番号で偶奇に分かれてどちらかを引く。そして番号が一致したふたりがペアとなる。

どうやら簡単に異性のペアが出来上がるわけではない。ルール説明後、一部男子のセッションが見るからに下がっていた。

クラスメイトたちがくじを引いていく中で、自分の番がやってきた。震えすぎて3本くらいに像が増えた右腕で引こうとして苦戦し、副級長に怒られた。

「何番だった？」

すぐに、近くにいたユウキくんに聞かれた。まだ確認してないよ。せつかちな人だな。

バイブレーション中の手でくじを開こうとして手間取っていると、イラついたユウキ

くんにごんごられた。

「おっ。1番かア」

「長峰さんどうぞー」

「はーい」

ぱつとアイドルの顔をつくり、長峰悠希はくじ引きに臨んでいった。彼女の出席番号は僕のひとつ前、奇数番だ。

様子を観察してみる。みんなの注目を感じているのか、いつもの人当たりのいい笑顔で、長峰さんは紙片を1枚選び取った。その場をやや離れると、そこで彼女はくじを開いて番号を確かめた。

びく。一瞬、眉間にしわが寄ったのがわかった。

「……さらー。何番?」

「ん? 4番だけど」

「……あつ、みひろ。八代さん。何番だった?」

「え? 9だよー」

「12」

長峰さんはそこから、手あたり次第に周囲の女子に声をかけていた。やっぱ友達多いな。

そうしているうちにいつの間にか、小さな女子の群れができていた。彼女らは円を作りつつ密着していき、どうやら会議を開いているようだった。

「……ない？　いないか。……1番の人」

「あ、はい」

「カモン」

そして誰かが時折輪の外に顔を向けて、特定の番号の人に呼びかけ、群れに引き入れていた。

察するに、談合である。

「はい、それじゃあいよいよ始めます！　トップバッターは『1番』を引いたふたり！　重い足取りで前に出ていく。1番ってそういうことか……嘘みたい……たすけて……霊にとり殺される……漏らしそう……」

「よろしく、野原くん」

くじで決まった僕のペアは、長峰さんのようだ。女子は他にもたくさんいるのに、不思議な縁だなあ。よりによってなんでこの人なんだ。

「……私、怖いの手で。恥ずかしいところ見せちゃったらごめんなさい。……あの、こうしてもいいですか？」

「ハハハ。ドウゾ」

みんなの前で、ユウキくんはわざと女の子ぶり、僕に身体を寄せてきた。男子の怨嗟の声が聞こえたしやわらかい胸があたっているが、今はそんなことはどうでもいい。はやく終わらせたい。終われ。

▽

野原・長峰ペアが旧校舎のほうへ行って、すぐ。

ヒヤアアア……

「!? な、なんだ今の声。悲鳴？」

「長峰さんの……にしては、品がないような」

「……じゃあ、まさか……」

ペア決めの熱すら冷め、一挙に青ざめた顔になる生徒たち。彼らにとっては、それほどの出来事が起きていた。

そう、はつきりと音としてこだましている、これは――、

旧校舎に憑りついている、怨霊の声ではないか。

集まったクラスメイトのうち、だれが最初にそう言ったのかはわからない。けれど誰もがそう信じてしまった。何故ならば、その声はあまりにも、あまりにも悲哀と怨恨に満ちていたからだ。若い彼らは、それを強く感じ取った。

自分たちはマズい場所を選んでしまったのではないか。ある生徒は、じり、と無意識

に後ずさりをした。ある生徒は、友人の腕にしがみついて震えた。

「次に入るペアは？」 そんな声は誰も口にできなかつた。この底冷えする声に、かき消されてしまうから。

ヒヤアアアア……

イヤアアアア……

▽

「ヒ、イヒイイイ……、アヒイイイイ……！」

「うるつつさいなあおまえはさつきから!! 捨てていくぞその辺に!!」

「ヒイツ!! やつ、やめてくれえ」

弱弱しいヒロインを装っていたユウキくんは、いま、僕をこの暗黒回廊に打ち捨てていこうとしていた。思わず必死ですがりつく。さつきとは構図が逆だった。

「ここまで肝試しダメだったのか……。意外」

意外? 意外だと? ユウキくんがそれを言うのか。まさか、あの出来事を忘れたのか。こいつつ! 僕は片時も忘れたことはないぞつ。

ユウキくんの持つ懐中電灯の光量は、言うまでもないが、暗闇を晴らすには全く足りず心もとない。むしろ半端な灯りが暗がりをより濃く演出していて、逆効果にも感じてる。僕は、彼が気まぐれに動かすその光を反射的に目で追いながら、それが余計なもの

を照らさないことを祈り、震えるしかなかった。

「わっかんないなあ。暗い夜道とか、歩くの怖いか？」

「いや、全然」

「じゃあ今も別に怖くないだろ？ ただの暗い旧校舎。同じじゃん」

「怖いよツツ」

「その感覚がよくわかんねーな……」

こういう場所と夜の帰り道とかでは全然違うのだ。さつきみんなで見たらホラー映画の舞台のひとつに、学校が出てきたのもでかい。見ないよう聞こえないようにはしていたのだが。

目的の場所にむかって歩を進めながら、ユウキくんは声をかけてくる。しゃべってくると気がまぎれる。

だが。

「なんでそんな苦手なんだっけ？」

なんとなしに、という調子で投げられたこの質問には、とても冷静には返せなかった。

「おまえのせいだああああ!!」

「へっ?」

△

そう、あれは小学生のとき。怖いものが苦手だとは、まだ自覚していなかったあのとき……。

「なー、シンゴ。『きもだめし』やろーぜ」

ある日のこと。クソガキのユウキくんは、お利口さんの僕にそう提案してきた。いつもの衝動的な思いつきだ。

当時から彼の部下であった僕に逆らうという選択肢はなく、言われるがまま、幽霊が出る噂になっていた、人の住んでいないマンションまで一緒にやってきた。

ユウキくんはほかの子も誘っていたが、そのときは都合が合わなかったのか、当日の僕らはふたりだけだった。

「なんだよ。ビビってんのかア、メガネくん」

「だって、けっこう本物っぽいよ……」

「まあ確かに、ふいんきあるよなー」

たしかそんな会話をしながら、僕たちはマンションをうろうろしたと思う。そして思い返せばこの時点で、隣を歩く僕を、ユウキくんは時折ニヤニヤしながら見ていた。あれはきつと、僕の怖がる様子を楽しんでいたのだ。

開けっ放しのドアから汚れた室内が見えたり、お札の貼ってあるドアを見つけてしまった。現実の景色が、夜中に親が見ていたホラードラマの雰囲気と重なり、僕はこ

のときにはもう本格的に怖くなっていたと思う。

そしてついに、クソガキは大胆な行動に出た。

「あ！ オレ、わすれもの思い出しちゃった。じゃー！」

「えっ？」

風のような速さで、ユウキくんは僕を置いて走り出した。唐突のことで反応できず、まさか本当に？ と思いつつ、ユウキくんが消えていった廊下の曲がり角へ自分も走った。

「わっ!!!」

「ヒュッ……」

曲がり角で待ち伏せ。悪質な嫌がらせであった。

「アツハハハ!! こっちこっち！ 先に行っちゃうぜ」

「まってっ!! ねえ!! まってよっ!!!」

このとき、ユウキくんは学年で一番脚が速かった。僕はそれを重々承知していたので、本当に置いていかれる恐怖をおぼえ、必死に追いかけた。

「この部屋こわそー。はいろうぜ」

「……ここ、なんか寒くない？ ねえ、ユウキくん……ユウキくん？」

他には……、この部屋入ろうぜ、と誘われ、中を探索している間に、音もなくなりなく

なられたりもした。

この置き去り・かくれんぼ・おどかしの組み合わせで、僕はどんどんおかしくなっていく。性根とか歪んだと思う。

最もひどかったのは、最長30分くらいどこかに隠れられ、独りきりにされたことだ。何度もあいつは帰ったんじゃないか・自分も帰ってしまおうかと考えたが、一緒に来たときの自転車がユウキくんの存在を示していたため、僕は次第に暗くなっていく幽霊マンションをさまよい続けた。あれから人相が復讐者の顔つきになったと思う。

……そして、そのとき。ユウキ君を探してマンションのある一室を覗いたとき……、僕はたしかに……、

これはダメだ。思い出したくない。

とにかくこれが、ユウキくんに負わされたトラウマのひとつである。これで現在の本人は僕をいじめたことはないと思っっているらしいのが、まったく度し難い。

「お、おまえな。男どうして手なんかつかないでくるなよ。キモいなー」

「ご、ごめん。……つく、……でもつ、ユウキくんが勝手にどっかいつて、おどかすから……っ」

「わかった、わかったよ、もうしないって。だから放せよ」

最後のほうには、どこかに逃げられるのを阻止すべく、ユウキくんをずっと捕まえて

いた。服をつかんだり、腕をつかんだり、手をつかんだり。

「そんなビビんなよー。ユーレイなんかいないっての」

「……………！ ユーレイは……………！ さ、さつき、」

おっと。

とにかく僕は、怖いのは……………特に、肝試しは何よりもダメだ。ホラー映画やお化け屋敷もダメだが、あれらは人の創作物であることが明白で、その点が肝試しとは違う。

こんなことは遊びでやるべきじゃない。もしも万が一、仕掛けのない肝試しで“何か”に遭ってしまったのなら、それは“本物”であるかもしれないのだから。

以上。僕がこんな性分になってしまったのは、9割ぐらいこいつのせいである。

ユウキくん・ふたりきり・肝試しという要素が再集結してしまった今、こうして前後不覚になるのは我ながら当然のことだったわけだ。

「……………そっか。じゃあ次は、もしオバケが出てオレが守ってやる。いたずらのおわびなー」

「う、うん」

「この約束はぜったい守るからさ」

「ほんと？」

「うん。こういうときは助けるよ。友達だろっ」



「ごめんで。悪かったよ、あのときは面白がって」

「これに関しては一生涯ゆるさん」

「はいはい……深く反省します」

おぎなりの謝意を口にし、つかつか進んでいくユウキくん。こっちは前へ行く足を踏み出すのにも躊躇しているけれど、ついていかないと一人にされる。だから進む。

そんな様子を見て、ユウキくんは呆れたような、でも、そうでもないような、そんな反応をした。

「あーもー。大丈夫だよ。オバケが出て、オレが守ってやるから」

「！」

……昔と同じこと言ってる。もしかして、ちゃんと覚えてるのか？

だとしたら「なんで苦手なんだっけ？」とか真顔で言ってくるのは性格が悪いとしか言いようがないが。そうではなく、覚えてはいないけど、素が子どものときと変わっていないってことかな。

「まっままつまつ、マジで頼みますよ」

「おー。約束ね。アイプロミス」

そう言ってくれるなら存分に守ってもらうつもりだ。そうさ、ユウキくんなら悪霊た

ちも退散するはず。腕力で蹴散らせるはずだ。今回ばかりはぜひそのフィジカルを存分に発揮してもらいたい。なんならこの旧校舎を破壊してくれて構わない。破壊し尽くすがいい。

「ま、去年のクラス文集の『守ってあげたい女子ランキング1位』長峰さんに守ってもらおうおまえは、人としてだいぶランク低いけどな」

「うるさいよ。ちゃんちゃらおかしいランキングだったよ、あんなの」

けっこう体格良いし運動とかできるのに、そのキャラクターや態度だけで『守ってあげたい女子』だと思わせた技はすごい。しかも女子にもそう思わせてるのがすごい。

ともかく、もうなんでもいえ。僕をこんな怖がりにした責任はとってもらおうぞ！

「はあ。ほんとに苦手なんだな。ちよっと思つてたのと……そうだ。そんなに怖い怖くないなら、こうしてあげようか？」

人をからかうときの例の顔つきになったユウキくんは、片手で僕の手をとって、握つた。つまり、手を繋いできた。

「ほら、これで怖くないでしょ。怖くないでちゅねえ僕ちゃん。ヒヒヒ」

茶化しながら、ユウキくんは手をぱつと放そうとした。これは冗談だ、ということだろう。

でも、僕は彼の手をきつちり握って、離さなかった。ユウキくんの左手は、細くてす

べすべして良い具合に温かく、そして置いていかれる不安がなく、何も頼りがない状態と比べて格段に安心感があった。

「あれ。あの、心悟？ ……ほんとにこのまま行く気？」

「だだだだだ、めめめめすすすす（だめツスカね）」

あああ。そそそういえば、男同士なのに手なんか繋ぐなよ、キモイ、と昔も言われたような。

その感覚は理解できるんだけど、僕も男友達ときつちり手をつなぐとか普段は避けたいけど、それを上回るくらい恐怖がやばい。ユウキくんは僕を置いて走っていった前科があるし、今はこうして何かにすがりつきたい。猫の手も借りたい状態。もしここに猫がいたら僕は猫の手を握るだろう。何の話？

「……………。別に、いいけど」

きゅ、と。

ユウキくんは握る手に力を入れてくれた。た、頼りになる…………！　　こういうときは…………！

こういう日のために暗記していた念仏を唱えながら歩いていると、「頭おかしくなるからやめて」と言われたあたりで、ようやく目的地についた。

2階の旧音楽室。 “出る” ともつばらの噂だ。ここでスマホで写真を撮って帰って

くる、というのが肝試しをクリアした証明になる。

「はい、にっこりー」

「い、イヒヒ……イヒッ！」

「もう幽霊とかよりお前のほうが怖いよね」

暗闇と月くらいしか見えない窓を背景に、ユウキくんの自撮りに巻き込まれる。首に腕を回され、笑顔を強要された。長峰さんからはいい匂いがしたが、それよりも、この音楽室のことが怖かった。

「……!! マジか」

「撮れてるよね？ はやく帰ろうよ」

スマホの画面に照らされたユウキくんの表情が、少し曇った気がした。横に並んで、画面を覗く。

——僕とユウキくんの後ろには、白い何かが映りこんでいた。

ユウキくんは、すぐにスマホを僕から隠した。

「……っ!!」

「こんなんだだの、カメラの誤動作的な……あつわかった。後ろの窓にフラッシュが反射したんだろ。気にするな」

その理屈が正しいという常識はわかっていても、なにか、なにかがここにいるような

気がしてしまふ。数秒前に見た写真を詳しく思い出そうとする。後ろに何かが映っていただけじゃなくて、僕たちにも何かが覆いかぶさっていたような。身体が欠けていたような。表情が歪んでいたような。気のせいだろうか。

いけないと思いつつ、僕はどうしてか、教室中のあちこちに目を向けた。必死で、何かを探そうとしているみたいに。

暑いのか寒いのかよくわからないが、汗が出ている。窓枠の下、差し込む月明りが角度的に照らさない部分。そこに目が行く。そこはあまりに暗くて、目を凝らしてもよく見えない。

がた。

そんな音がした。僕は悲鳴をあげたけど、それは声にならなくて、尻餅をついた木製床の音がその代わりになった。

「おい、大丈夫か」

「……！ 連れていかれる……足動かない！ 金縛り!!」

「ええ？」

今自分が何を口走ったかはもう忘れたが、とにかく足腰に力が入らない。

「ビビりすぎて腰抜かすって本当にあるんだ……」

「はっ、はっ、はっ……」

耳がキンとして、周りの音が聞こえない。湿気が強いときのにおいがする。教室の、何もありません。暗がり、目が吸い寄せられる。

——僕は、幽霊は、本当にいると思っている。何故ならば、見たことがある……気がする、からだ。それがどういふものなのかは他人には説明しがたいけれど、きつといる。たとえば、もしかすると、今日の前に。

息がうまくできない。

そんな存在を認知したとして、それは『怖いという気持ちを作り出したありもしない気配』である、という常識は正しいと思う。そうだ、子どもと見えたものなんて、追いつめられすぎて何かを見間違えたただけだ。……でも……、

ああ。非常識を振り払おうとして頭を回転させているのに、余計に変なことを考えてしまう。とにかくいま、僕の身体は、自分の意志ではうごかせなかった。幽霊のいるいは置いておいて、これだけは本当の話だ。

「心悟？　ねえ、心悟……はあ。……約束しちゃったしなア」

体が、水の中に沈められたみたいに重くて、暑くて、四肢の先が冷たい。もう脚は何かにつ張られている気がする。逃げ込める家の布団もここにはない。

そうしたら……、

「おーい。ほら、大丈夫大丈夫、へいき。アイガツチューー」

誰かが、僕を捕まえた。

ユウキくんは、後ろから僕に抱き着いて、胴に腕を回していた。背中にやわいのがたつていたのでわかる。

そのまま、肩になんか乗せられる。横目で見ると、ユウキくんの顔だった。

目が合う。この近さだと、彼女の迫力や魅力は普段の倍増しで、吸い込まれそうな瞳だ、などとつまらない恋愛小説の文句が浮かんだ。

「心悟。何もないとこころをいちいち見ようとするな。オレだけ見てればいい」
い。

イケメン……。

「おいー… 幽霊ー！」

ユウキくんは静かな音楽室で、よく通るでかい声を出した。長峰悠希は音楽の時間でも模範生徒である。耳のそばでそれをやられたので、けっこううるさかった。

「こいつはわたしのだ。他の誰にも持っていかせない。わかったらどっかいけ」
何も返事はない。

それはそうだ……。そこには、誰も、何もいないのだから。

周りを見る。旧音楽室は、風があれば窓枠が動いて鳴るけど、基本的に静かだ。闇に慣れた目で見ると、月明りはいろんなところに届いていた。郷土芸能部が使っているた

め掃除も整理整頓もされていて、至極ふつうの、人間の活気がある部屋であった。

「どう、ユーレイの気配消えた？」

「なんか、大丈夫になったかも……」

「それはよかった。……あー、熱」

ユウキくんは、僕から離れて立ち上がった。顔を手うちわで扇いでいる。

………いま………なんか………長峰さんにハグされてなかった？ 高い体温と、二重になった心臓の鼓動がまだ残っている。あと胸。

ユウキくんとはいつでも長峰さんなわけで、あんなことされると怖いことがあつても別のドキドキでかき消されるといふかなんというか、いや僕がユウキくんなどにドキドキする筋合いはないのだが、まあこれはたぶん吊り橋効果というやつでとくに何も無いのだが、

「おい。いつまでもへばってないで帰ろうや」

「あ、うん。……ごめん、変なことさせて」

「あー。いいよ。おまえのビビり方、これから一生いじるから」

ひどくない？

元凶は自分だということをもう忘れてない？

「ほら」

手を差し伸べられる。がっちりつかむと、ユウキくんは持ち前のパワーで軽々引っぱり上げてくれた。

それで、その手はそのまま。旧校舎棟を出るまで、キモいとか言つて放り出したりはされなかった。

▽

「あ！ ふたりとも、大丈夫だった？」

「……はやべえよ。無事でよかった」

戻ってきたスタート地点には、クラスの全員が集まっていた。僕らの後には誰も出発していなかったようだが、みんなの様子はどうもおかしい。誰もが緊張した表情をしていて、僕たちの姿を見て心配そうに駆け寄ってきた。ようやく安心した、という様子の生徒もいた。

「何かトラブルがあつたんですか？」

「“声”が聞こえてきたんだよ。クラスの誰のものでもない、恐ろしい声が……」

「この世をうらみきつた、悲しい声だった」

「……………。あの、その声って多分……」

ひいひい!! やっぱり幽霊はいるんだあ!!!

「いえ、なんでもありません。……アホらし」

真・卒業式（高校の）

卒業式の日。

後輩の深山さんからの告白は、思わぬ闖入者によってなかつたことになった。女の子から告白されそうになったの、人生で初めてだったのに……。

走って行ってしまった深山さんの後ろ姿を放心状態で見送り、あれから何分経つただろうか。1分かもしれないし10分くらいかもしれない。まだ校舎のあちこちでは生徒たちが最後の思い出作りに励んでおり、ここからは見えないが、おそらく正門付近はまだ混雑しているだろう。

あそこに戻って同級生たちと談笑、という気分にもなれず。かといってここにボケつと立っているのもあまりに空しい行為であるので、僕はひとりで校内をブラブラするのことにした。

知り合いと会えたら楽しく最後の挨拶でもする気だけど、しかしながらなんとなく、なるべく人気のなさそうなコースを選んで歩いていく。美術室の前とか。二階の渡り廊下とか。

教室とか。

校舎裏の、倉庫のあたりとか。

「……いないか」

校舎裏。このハレの日に、こんな暗がりには誰かがいるわけもない。いや、いちやつく卒業生カップルとかならいるかもしれないが、まあ今はいない。

よく腰を下ろした日陰に座って、ぼうつと上を見る。あー。

しばらくそうしていた。しかし、どうやら僕は別に、ひとりでいることが好きというわけでもないようで、割とすぐに立ち上がったと思う。

もう一回、周りに誰かがいないか見回して。そして、その場を後にした。

次はどこに行こうか、と考えながら歩く。

「あ。おーい野原」

声に振り返ると、クラスメイトの佐藤くんが駆け寄ってきていた。彼は3年間のうち2年は同じクラスで、向こうがどう思っているかは知らないが、友人のひとりだと思ってもいいだろう。

「長峰さん知らないか？ 記念に写真お願いしたいんだけど」

感動の別れの挨拶でもしてくれるのかと、実は期待したのだが。まあ長峰のコバンザメみたいな野原への用事といったら、こういう話しかないらしい。

「さあ。この辺では見てないよ」

「あつ、別に狙つてるとかじゃねーよ今更。あれだけの美少女だしさー、写真一枚くらいいいだろ？ 許可くれ、彼氏」

「ゆるします」

「よっしや。で、どこにいるかな」

「さあ……」

「なんだよ、ほんとに知らなかったのかよ」

「もう帰っちゃったんじゃないの」

自分の口から出た言葉に対して、えっ、そうなのかな？ などと思つた。もう帰っちゃったんだろうか。

「もし見つけたら、みんなが探してたつて言つといて。じゃー！」

「みんなつて？」

「人気者なんだから、みんなはみんなだよ。とにかく色んなやつが探してる」

佐藤くんの回答は個人的にしっくりくるものだった。卒業式を終えてから、延々と誰かに囲まれていたのを遠くから見たいけど、そのピークタイムはまだ過ぎていなかったらしい。さすがの人気だ、あの性根でこの人望を3年間保ち続けたのには心底尊敬する。

さて、用事は終わった。忙しそうな佐藤くんは、僕に背を向けてこの場を去る。

かと思つたら、少しの間振り向いて、言った。

「あつと。進学先別だけど、時間できたらまた遊ぼうな！」

「うん。じゃあね」

挨拶として手のひらを見せて、佐藤くんの背中を見送った。

散歩の続きを始める。何も考えないつもりで歩いていると、次に、僕は校舎の階段を上っていた。

2階を過ぎ、3階まできた。そこをぶらぶらしようと思つたけど、ひとつ気になるとに思い当たり、さらに階段を上った。

屋上へ続く扉がある。鍵がかかっていることは誰もが知っていて、ゆえに触ろうともしないそのドアノブに、手をかけた。

……やっぱり。

鍵が、開いている。

僕は、この学校生活で何度も訪れた、立ち入り禁止の屋上広場へ入っていった。屋上では、ひとりの女生徒がたそがれていた。

柵にもたれかかつて空を見る、なんていう危険な禁止行為をやっている。長い髪が風に流れている様子は、やっぱり絵になっていた。

「みんなが探している」。

そんな、さつき聞いた言葉を思い出した。だから……、

僕は、ここからの時間を独り占めしたくて、後ろ手にドアの鍵を閉めた。

「そこ、寄りかかったら危ないよ」

近づきながら声をかける。

ゆっくり振り向いた彼女の表情は、なんだろう。なんだか眠たそうに、目を細めていた。

「よう」

「ボタン返してよ、ユウキくん」

ユウキくんは、きつちり着こなしたブレザーの袖で目のあたりを擦って、それから顔を上げた。

真顔であつた。なんかこわい。

「なんで？」

「なんでって……」

自分のものの返却を要請するのに、理由は必要なのでは。そう思ったけれど、ユウキくんは無表情ながらも圧迫感を発していて、僕は何も言えなくなつた。

どうしたものか考えつつ、顔をうかがっていると。彼女はやがてその表情を崩し、困り眉の、いわゆる苦笑いをした。

「そんなにあの子に渡したいか？　まーそうだよな」

ポケットから何か取り出し、弄んでいる。陽光に鈍くきらめいているそれは、僕から蛮族のようにむしりとっていった学ランのボタンだろう。

ユウキくんは遊ぶのをやめ、それを右手に握りしめた。ゆつくりと歩いてきて、顔がはつきり見える距離になる。僕たちの、友達の距離だ。

今日の彼女には、なんだかほんの少し違和感がある。目の辺りだろうか。いつもより伏し目がちで、目線も泳いでいる。

「さすがに悪かったかなあつて、さつきまで思ってた。……ごめん」
「ユウキくんは……」

あの口からは滅多に聞くことができない謝罪の言葉を、僕は、無視して遮さえぎった。

返してよとは言ったものの、よく考えてみれば、別にもう着ない制服のボタンなんか全然いらぬ。かといって、高校も卒業する歳になって、なんでもかんでも取られつばなしなのは、なんだかしやくだった。

「ユウキくんはいつも僕から、ものを取ってばっかりだ。マンガとか、ゲームとか、筆記用具とか教科書とか。あとケーキ代とかラーメン代とか出店代とかアレとかアレとか」

「イヤお金はお前……おごってくれたはずじゃん。細かいなア」

「だから」

言葉を考え、視線を右往左往させたあと、目が合った。性格の悪さと反比例して瞳はキレイなので、少し気圧される。

「だからたまには……その。よこせよ、そっちも何か。交換だ」
言えた。

ユウキくんは目を丸くして、きよとん、と間拔けな表情をした。

うーん。目じりが少し赤くなってる？ ブレザーで擦りすぎたんだろうか。……あ！ わかつてしまった。女友達との感動的な別れに感化されて、泣いちゃったのでは。それでこんなところでおセンチに浸っていたんだろう。

ユウキくんの泣き顔、見たかった。惜しい。こいつも人の子であったか。

「——お、おう。まさかそんなこと言われるとは。それはいいけど……でも、何を？」
「え？ えつと……」

言いたいことだけ言って、何も考えてなかった。

思わず、相手のあちこちに視線をさまよわせる。卒業式の日なんて、そもそも何も持っていないよな。ていうか胸でつかいなあ。校則違反だろ。

ユウキくんが僕の目線を確認している。やばい。いまどこを見たかバレた。次の瞬間に来るだろう怒り顔を想像し、身体が固まる。

「……ボ、ボタン……とか？」

「えっ」

泣いた後だからか、赤らんで見える顔で。彼女は僕の目を、おそろおそろといったよ
うすで見上げてきた。

——誰？ このかわいい女子は。幻覚？

「……っ」

「ちよっ！ 何もそこまで……」

思わず口に手を当て、はわわと言いつうになる。長峰さんは僕の目の前で、ヌギヌギ
とブレザーを脱ぎだした。

その光景だけで心臓が伸び縮み運動を始めたのだが、それがもつとすごいことにな
る。あろうことか、ユウキくんは自分の、大きく盛り上がったシャツの胸元に手をかけ
たのだ。

ボタンって、シャツの!?

「こ、交換って言ったのはそっちだろ。胸のボタンじゃないと意味ない」

「いやでも女子にこんなことさせるなんて」

「あつやばつ」

「!? ほげえっ!?!」

突然、顔面に、何か小さいものが弾丸のように飛んできた。そのことがわかったのは、

そいつが僕の額を撃ち抜いたあとだ。たぶん脳を貫通したと思う。

ともかく、僕はひっくり返った。い、今のは……。

「まさか……ぼ、ボタン？」

「悪い、最近制服のサイズ危なくなってきた……まあ今日卒業だから、セーフか」
アウトでは？

空を仰いで立ち上がれずにいると、ユウキくんは僕の顔のすぐそこにしゃがみこんだ。白い足首が視界の端に見えると、眼球が勝手にスカートの下の空間を求めて動いたが、見てはいかんと思っただけ首を逆方向に向けた。

「ほら、これ」

長峰悠希は、僕の顔の上に手をかざした。ぼとりと何か落ちてきて、反射的に目をつぶる。顔にくっついた小さなそれを、指で拾い上げた。

「美少女のはじけた胸のボタン。キミの夜のお伴にどーぞ」

「そういうこと言わないでほしい、本当に」

美少女の制服のシャツの胸元のはじけ飛んだボタンを手に入れた。

ふん……こんなものはただのゴミだ。家に帰ったら捨てよう。

僕はポケットにそれを丁寧にした。

一連の無様な僕の様子を見て、ユウキくんは、僕の前では、今日初めて、笑った。

彼女が入り口にできた日陰に座ったので、その近くに座る。少しの肌寒さと、すぐ目の前に落ちてきている日差しにあたたかさを感じつつ、青い空を見上げる。卒業の日にふさわしい天気だった。

「心悟さー。おまえさー。ほんとにああいう女子がタイプなん?」

「ああいう女子とは?」

「さっきの後輩ちゃんだよ」

「めっちゃタイプ」

「そっかー。悪いことしたなあ」

「ほんとだよ」

「オーケーしようとしてたもんなー。もしかして、好きだった?」

「んー。いや、そういうわけじゃ……」

「は?」

「おまえさあ」

「だつ、だつて、女子から告白されたの人生で初めてだし。嬉しかったし。一応いい子なのは知ってるし。あとタイプではあるし。そしたらもう、弾みで了承しちゃうと思いませんか」

「わあ最低。その気もないのに、相手の子かわいそうだろ」

「ウツ。……でもほら、先に恋人関係になってから芽生える恋愛感情とか、あるじゃんか」

「……………」

「それ、恋愛ゲームの受け売りだろ」

「はい」

「ぼーか」

「なんだよ。あつ、ユウキくんは告白されたことないでしょ。男子からじゃないぞ、女子から」

「あるよーいっぱい」

「はあああ？ い、いつ」

「小学生のとき何回もあったし、女になってからも何回かあった」

「バカな……」

「なあ。女の子から告白されるの、そんなに良かった？」

「そりやもう。よほどのことがないと忘れられないねっ」

「ふうん」

隣から、立ち上がる気配。そちらを見ると、ユウキくんは僕をクールな表情で見下ろしていた。なんだね。

手を差し出される。応じてこちらも手を出すと、いつもの筋力でそのまま引つ張り上げられる。

誘導に従って立ち上がる。そうしたら、思つたより、ユウキくんの顔が近くにあつた。また無表情になつていて、思わずぎよつとする。

「!! な、なに」

「じゃあ今から、女の子が告白するから」

とん。僕の胸に、ユウキくんの手のひらが当てられていた。

「はっ?」

「心悟。……………わたしは——、」

深い一呼吸の後に彼女が吐き出した息は、ものすごく熱いものだった。長い睫毛が飾る目はまつすぐにこつちを見ていて、白いはずの頬は化粧をしたみたいに紅い。

周りには当然誰もいなくて、目の前の女の子は、何かを決意したような表情をつくつていた。

「わたしは、キミのことが……」

わたし。ユウキくんはそう言つて、小さな唇をふるえさせる。

気が付くと僕の心臓は、好きな女の子が現れたときみたい、普段の10倍の速さで動いている。でも、ここにいるのはユウキくん。そのはずなのに、僕は、こんなふう

にドキドキしているのか。女の子として見てしまつて、友達を傷つけたりはしないのか。でも、そうさせているのは、当の友達で。

彼女の唇が次に何を言おうとしているのか、そこに全部の感覚を集中してしまう。やがて自分の心臓の音すらわからないくらいになつて、相手のことしかわからなくなつて。

そして。

「ぶふっ。……アツハハ!! ごめーん、学校一かわいい女子に告られると思つちやつた？」

どこかで聞いたことのあるセリフを吐かれた。

「また騙された。オレ相手にドキドキしすぎだろ、マジかおまえ」

「クソがー!!!」

「おっと」

僕はユウキくんの腕を振り払つた。恥かかせやがつて!!

いい性格してるし、いい演技力もしてる。わかつてた、わかつてたとも、頭では。しかしこいつの技にかかれば、僕の理性による防御などペラペラの紙みたいなものなのだ。

最後の最後に、実にこの人らしい嫌がらせだった。思い出には残つた。残らされた。

「そろそろ降りようかな。おまえは……もう少ししてから降りてこいよ」

「なんでさ。別にいいけどさ」

「理由とかないよ。……じゃあ」

じゃあ、また。

高校生最後の日。

僕の友達の彼／彼女は、「また明日」のテンションで、あつさりと、さよならの挨拶をした。

階段を下りていく気配がなくなったら、思わず壁に背を預けて、そのまま座り込む。この3年間は色んな事があったから、なんだか体のどこかに大きな穴が開いたような気持ちで。僕はそのあと、屋上でぼうっとしていた。

どうやらポケットの中にあるボタンだけが、僕たちの、友達の証だった。

「ユウキくん。……また」

なお、後に知ったことだが、同じ大学に合格していた。

彼シャツ（最終回後）

くたくたで本日の労働を終え。

狭いワンルームの我が家に帰り、お風呂を出て、座椅子に腰を落ち着け、眼鏡をかけたまま、はやくもウトウトし始めた頃。

「たっだいま〜！」

バーン！ とドアを開け放ち、大声を出しながら誰かが乗り込んできた。僕は眠くなるまで手に持っていたらしいスマホを取り落とした。

仕事帰りらしい悠希さんがそこにいた。元気なことだ。お互い20代も後半という歳だけど、まだまだ学生のような体力を保持しているらしい。

いそいそと靴を脱いでいるその表情を見ると、今日はなんだか機嫌がよさそうだった。

……ところで。

聞き違いでなければ、ただいま！ などと言いながら入ってきたようだが。別にここは彼女の家ではない。こんな狭い部屋で同棲しているなんてこともない。その辺は今年中にいろいろと計画しているが、まあとにかくここは正確には悠希さんのおうちでは

ない。

頭の中で、くどくどと厳密なただいまの定義が回転し、僕の居眠りを邪魔した悠希さんに向かって、喉元までそれがやってくる。そして、僕は、

「おかえり」

とだけ言った。結局。

悠希さんは、たかだかそれくらいの挨拶で、嬉しそうにした。

あーーーーーー。

僕の彼女が今日もかわいい。美人は三日で飽きるなどという言葉もあるが、とりあえず今のところ、高校入学から数えて10年余りは飽きていない。

内心そう思ったが、そういう気持ちが大バレるとすぐ調子に乗られるため、無表情にとめた。

「お、眼鏡してるー。似合ってるぞメガネくん」

「そりやどうも。……連絡もなしにどうしたの今日は。明日も平日だけど」

ちよつと批判的なトーンで言葉を投げしてみる。彼女はもう完全に自分ちみたいに、買ってきたものを冷蔵庫に入れたり、上着をハンガーにかけたりとやっているが、とにかくここは僕んちである。

「なんだよ。オレがお前のところに帰ってきて、そのの何がおかしい?」

などと、彼女は返してきた。ひと昔前の少女漫画の主人公のように、僕はキュンとしてしまった。いま口説かれてる？ こいつイケメンだから人を口説きなれてる？

「……すごいのろけたこと言ってる自覚ある？」

「あるよ。いつひひ」

悠希さんは照れたような顔で笑いつつ、僕のすぐそばにやってきた。

そのまま座る、のかと思ったら。膝と手を床について、顔をずい、と近づけてくる。僕は思わずドキツとして体を引いた。

「な、なんじゃあワレ」

「なんかいつもクール気取ってるけどさあ。お前ももう少し素直になれよ。じゃないと……よそにいつちやうかもよ？」

上目遣いでこつちを見て、挑発的な表情をつくる悠希さん。なに、なにになにに今日は。

他所、つてつまり。長峰悠希をほかの男に……!? 冗談じゃないよ。ていうか今になってこんな揶揄からかい方……僕の気持ちがあつたとたん調子に乗りやがって……。

「なつ、なんでそんなこというの」

「だって、ほら。恋人らしいことなくんにもしないじゃないですか？ 自分が世界一幸運な男だって自覚ある？」

「恋人らしいことって……」

「こういうことだよ」

ガードのために前に出していた左手をそつと取られ、そのまま床に押さえつけられる。これでは逃げられない。

そのまま、悠希さんは、さらにぐつと身を乗り出してきた。ただでさえ近かった顔が、息を感じ取れるほどの距離にやってくる。正面から、顔と顔を合わせて、ここまで近づかれたことなんて、今までにない。まさか……。

これ以上近づかれたらゼロになる。それって、あれじゃん。愛し合う男女がすなるといふアレじゃん。たしかに、付き合い始めてからもまだ友達の延長という感じでこういうことはしてなかったけど、それは悠希さんの内心を考えてそれがベストだと判断したわけで、僕たちの付き合い方には必要なかったはずじゃ……、わからないわからない。

まつげ長つ。目力すごい。肌白つ。人間これだけ拡大したら変なところのひとつも見えるはずなのに、この人にはそれが無い。全部が好きなところだ。いきなり心拍数を上昇させるような真似をされ、立ち眩みじみた酩酊感すらおぼえる。健康に悪い。

そうだ、いままで考えたこともなかった。ユウキくん……悠希さんと……接吻、せつぶんなど

！

「目……閉じてくれる？ さすがに、恥ずかしい」

心の準備がまだだ。言われた通りにバチツと目を閉じたのは、ある意味逃避のようなものかもしれない。

でも、視覚を断つと他が鋭敏になる。鼻の先にいる彼女の気配が、吐息や体温、香りとして伝わってくる。

「心悟……」

彼女の両手が頬まで上がってきて、そつと眼鏡をはずされる。

僕はいよいよ覚悟して、おそらく気持ち悪い顔で息をのんだ。気配が、すぐそこまできて――、

「ふっ」

「ひゃうんっ」

耳に息を吹きかけられ、悲鳴を上げた。

ふっ、が悠希さんで、ひゃうんが僕の声である。

耳を押さえて相手を見ると、やつは眼鏡を弄びながら、にやにやと意地の悪い顔をしていた。

「うっそ〜。童貞とはキスなんてしませーん。残念でした」

「ギイイイイッ」

人の心と眼鏡を弄びやがって……！ 今に見てるよボケが。

「童貞いじりやめてくれマジで」

「おおつ？　くらくらする……」

僕の眼鏡をかけて目を回している悠希さんは大変かわいいが、人の話を一切聞いていないのでイラつとした。

「さて。じゃ風呂入るから、着替え借りるよ」

ひととおり僕で遊んで満足したのか、彼女は立ち上がってそう言った。

「……えつ。着替え……何？　もしかして泊まっていくの？」

「うん」

「な、なんで？　明日仕事だけど」

「いーっしょ別に」

悠希さんは、人の衣装ケースを遠慮なく開け、中を検めはじめた。

そう押されたら断れないというかまあ断る気もないが、どちらかの部屋に泊まるというのは、実はあまりなかったケースだ。どうしたんだらうか。

……それとも。別にこれくらい、自然なことなんだらうか。ちゃんと付き合っている恋人、っていうのは。

「いいけど、自分の服持ってきてないの」

「外行きはあるけど、部屋着はないな」

「泊まるんならちゃんど持ってきなよ。……ていうか、もし頻繁に来るんだったら……」
この部屋に、いろいろ持ち込んで、置いてつてくれないのに。そうだよ、いつまでも赤の他人つてわけじゃないんだし……。

盗人のように服を漁っていた彼女が、こちらを振り向いた。

「んー？ 何が言いたいのかな？」

「……こうやって泊まりにくるつもりなら、もう部屋着くらい置いてけば、って」

「ほほーう？」

僕にこんなことを言わせたのが嬉しいのかなんなのか、茶化すような反応だ。こっちは大人な話をしているつもりなのに、相手は子供のようないたずらっぽい顔。

「それもいいけどさ……おまえ、これが好きだろ」

にやっ。

擬音付きの笑顔で引つ張り出してきたのは、白いワイシャツだった。それを首から下にあてて見せてくる。

「彼シャツ。ふふ、なるほどいかにも童貞ウケしそうな……」

「カレシャツ？ は？ 何それ？ 初めて知った概念」

「嘘つけ」

やかましい、それを好きでない男がいるか。童貞かどうかは関係ないだろ。

「思い出すなー。ほらあ、高校生のとき……やむを得ない事情で服を貸してもらったあの日。興奮しきった心悟くんは、いやらしい目でわたしの全身を……」

「知らん知らん覚えてない」

もちろん鮮明に覚えている。あの日は雨だった。たしかにいやらしい目で見たし、それから悠希さんのけつこうガードが堅い態度にシヨックを受けたことも、昨日の出来事のように印象深い。

まさかあのときは、こうして悠希さんにおちよくられる日が来るとは思わなかった。それこそ、いやらしい目で見られるのは基本的に嫌っていたはず、と思うのだけど。

「じゃ、お風呂借りますよ。湯上り美人を楽しみにしておけ」

「ふん」

「おや、冷たいなあ」

何が湯上り美人だ。そんなもん。

妄想が止まらない。ドキドキしてきた。風呂上りの長峰悠希か……。

風呂場に入っていく姿を思わず目で追うと、手に持っているのが着替えやタオルだけでないことに気が付く。なんか液体が入ったおしゃれなボトルだった。お高いシャンプーとかボディソープとかだと思う。あと、僕の持っているやつとはサイズが違う上等そうなドライヤーも。大荷物である。

そんなに準備万端なら着替えも持ってこいよ。

▽

風呂よりドライヤーで髪乾かしてる時間のほうが長かったように感じてしまう。悠希さんは、薄い扉の向こうでブオオオとやかましく、10分以上はやってた。髪が長い人は気を遣うんだろうな。

しばらくして、彼女は脱衣所から出てきた。

「よう、お待たせ彼氏くん」

事前告知のとおり、悠希さんは、僕のシャツを着ていた。

サイズ自体は身長に対してやや大きめで、下は何も穿いてないみたいに見える。でも胸のところだけは余裕がなく、あろうことかボタンを2つは開けている。まさしく二次元でしか見たことのない、模範のような彼シャツであった。

なんてことを……なんてことをしてくれたんじや……。

「どう？ 興奮した？ してるな。ふふん」

「あまり近くに寄らないでほしい」

「そいつは聞けない相談だぜっ」

悠希さんはあられもない恰好のまま、肩をぶつけてくる勢いで僕のそばに座った。ていうかぶつけられた。痛い。風呂あがりなせいとか、いい匂いと体温をいつそう感じる。

髪はいつもに増してつやつやで、白い肌はほんのり桜色に見えるような気もする。

オレのそばに近寄るな!!! 今は!!!

「さて、お互いお風呂に入ったことだし」

悠希さんが膝を抱える。長い脚がきれいで、一瞬そちらに目が行った。

彼女はそのまま顔をひぎに預け、流し目でこちらの目を覗き込んできた。脚を見たのはバレたと思う。

「ね、心悟。今日は夜通しふたりきりだよ。だから……ほら。わかるでしょ。わたしのしたいこと……」

「はっ? い、いや……なん……あつ、オツ……」

お互い風呂に入って……そんな恰好でそんなこと言つて……。

うそだろ。悠希さん、こんな……ちよつと積極的すぎない? つまり、つまりは。

そういうつもりがあるつてことなの?

い、いきなり? こんなことになるものなの? 童貞だから何もわからん。本気か?

それつて友達の一線を越えてないか。僕は悠希さんが好きで、悠希さんも僕を好きつて言つてくれたけど、でも。

「しっ、したいこと、というと……?」

戸惑いと、それ以上の心臓の異常を抱えたまま口を開くと、気持ち悪い言葉が出てき

た。あからさまに、そういうことを期待しつつ、相手に言わせようとしている。我ながら卑しい。

胸のどくどくが耳にきてしまうくらいの、たつぷりの間を置いて。妖しく笑う悠希さんの唇が、ついに動いた。

「ゲーム遊ばせて！ ほら、あれ、最近流行ってるあの面白そうなやつ」

「どれだよ……」

「おいおい、露骨にがっかりしたなア。あ、もしかしてムラムラさせちゃった？ ん？」
またこちらの顔を覗き込むように背中を曲げる。シャツからこぼれそうになるそれ。こいつ、胸元をわざと強調していやがる……。

腹立たしい。ガン見したら1万円ね、とか言われるに違いない。

僕は首をよその方向に向けたが、意思に反して目がそこから離れなかったため、眼球が可動域を越えてひっくり返りそうになった。

「今おっぱい見たから5万円ね」

5倍……！ 想定の……！

「で、そのゲームって、どんなの」

「あのかなんか、ペンキで色塗って戦う……？ ファミリー向けの……」

「あれか」

「お、わかった？」

タイトルは確かにひとつ思い浮かんでいるが、あれがファミリア向けかどうかは怪しい。キャラクターやゲーム画面の雰囲気はそう見えるかもしれないが、ごりごりのオンライン対戦ゲームだし。2作目は遊んだことがあるが、対戦では何度ブチ切れたかわからないほどだ。

ついこの前発売された3作目は、これがまた売れているらしい。それこそ悠希さんが存在を知っているくらい。いわゆる覇権コンテンツ。

「あれね、まだ買ってないね」

「えー。じゃあ遊べないんか」

「ダウンロード版ついているのがあるから、今買おうか？ 少し時間かかるけど」

「おっ。お願い！ お金出すから」

「じゃあ割り勘ね」

というこで、少し落胆している自分を恥ずかしく思いながら、僕はゲームを購入したのだった。

適当な話をしているうちに、ゲームが遊べるようになる。

やはりファミリア向けに見えたのは幻でしかなく、前作に続き一人用のゲームだっ

た。悠希さんに遊ばせつつ、ときどき操作を変わったり、あとは横から口を出したり。で、時計の針が日付の線をまたぐ頃には、ついに肝心のオンライン対戦モードへの挑戦が始まった。

「すべてを理解した。」そう言って自信満々に戦場へ乗り込んでいった悠希さん。

「あつちよつ、まつ……なんつ……クソガキがあーっ!! こんな時間にゲームするな! 死ね!!」

最初の戦いでブチ切れていた。堪忍袋の緒が細くて短い。

しかしなんと低レベルな暴言だろう。小中学生並みだ。ちよつと大人の女性になつたと思っていたらこれである。悠希さんをキルした▽ゆうと君も、たった今爆散させた▽ゆうきが実は、いい歳したお清楚美人のお姉さんだとは思うまい。そしてそのお姉さんに口汚く罵られているなどは……。

「あれっ? なんか動かな……あ!! ……ご、ごめん心悟、これ……」

キレ散らかした弾みに、常識外の指の力により、けっこう値段がするコントローラーが破壊されていた。

僕は静かに泣いた。

「ふわーあ」

かわいらしい声が入ってくる。

他人があくびをしているのを見ると、自分も眠くなるもので。座椅子を譲り、ベッドに寝そべりながらゲーム画面と悠希さんを見ていた僕は、いよいよまぶたが重くなってきた。

椅子に居座った彼女を後ろのほうから見ていると、いちいちリアクションが大きくて飽きない。眼鏡をとって目をこすっていると、ぼやけた視界の中では、悠希さんが昔の姿と重なって見えた。

ああ。こういうところ、全然変わってないんだ。

そういえば。一緒に家でテレビゲームなんて、よく考えたら久しぶりかもしれない。はじめは小学生のとき。なんか無理やり友達にされて、家に上がられて、遊びまくられた。外にも連れていかれたし。

次は高校生だけど、悠希さんはものすごく綺麗で可愛い女の子（外見のみ）になっていて、戸惑ったりした。でも、ゲームやらせろって家に上がられて、それで……。

いろいろあったけど、そう。全部、楽しかった。

今みたいな、ただの友達のような時間。僕たちにとつては、けっこう大事なもののようない気がする。壊してはいけないもの。

……だから……、あんまり、今日みたいに、変な挑発とかされると……、

眠気が最強の状態になると、なんだか変なことを考えてしまうな。いや、一瞬寝ていたのか、さつきまで何を考えていたのか忘れたのだが。

変な寝言を口にして、後でからかわれないといいんだけど。

▽

目が覚める。枕元からスマホを探し、いつものように時間を確認してみると、毎日設定してあるアラームが鳴るのはまだ先だ。

「……………ウオツツツ?!」

上半身を起こしてぼうっとしていると、自分のすぐそば、ベッドの上で何かがうごめいた。

それは女体であった。僕の布団のすべてを奪い取り、すうすうと安らかな寝息を立てている女性。悠希さんが、人の隣に潜り込んで寝ていた。なんかめちやくちや寒いと思っただら。

眼鏡をかけてよく観察する。目の覚めるような美人という言葉い回しが今こそ使えるな、と思っただ。服装は、そもそもが破廉恥ではあるが、お互い昨日の状態から大きく乱れてはいない。

……ふう。どうやら記憶のないうちに一線を越えたわけではないらしい。

ていうかこの人、恋人になったら、シラフでこういうことしてくるんだ。油断ならん

な。

「……………」

寝ているのをいいことに、髪をさわってみる。おつ、すごい、なんだこれは。サラサラ……サラサラだ。とても。なんだこれは。すごい。

指で頬をつついてみる。おつ、すごい、なんだこの肌は。もちもち……もちもちじゃないか。すべすべでもある。美容の化身か何か？

「んん……………」

「あつ痛つ。いたあ……ああああアアアアアアイ!!」

つついていた指をつかまれ、握力で粉々に折られた。無意識下ですらこれほどの横暴を!?

「んん……………心悟?」

「おはようございませす」

顔を洗って、仕事に着ていく服を見繕っていると、悠希さんが起きてきた。

彼女がいるとしても、今日は平日なわけで。いま差し迫っているタスクはないものの、出勤する必要がある。

「何してんのお…………?」

「労働に行く準備」

「ん〜……仕事お？ 休めば、たまには」

「休みたいねえほんと……」

「本気で言ってるんだけど」

「え？」

着替えを抱えて立っていたところに、とん、と後ろからぶつかられる。僕は持っていたものを取り落とした。

そのまま、腕が胴に回ってきて、ぎゅうと締め付けてくる。背中にあたっているものからは、どく、どく、どく、と他人の鼓動が伝わってきていた。

「べつにちよつとくらい、いいだろ。ズル休み」

「で、も。ぜつ、全休なんか、とったことないし……」

「……？ 別に全休にしろとまでは……ふん？」

僕を締め付ける力が強くなって、背中にあれが押し付けられる。

「そんなにオレと一緒にいたいんだ？ 今日一日」

「っ……」

揚げ足とりやがって。そんなの、いたいに決まってる。

どうしよう。悠希さんの顔は見えないけど、ずっとくっついたまま離れてくれない。からかい交じりだけど、これは愛情表現だと受け取った。

鼓動が速くなってきた。だんだん、それが後ろから伝わってくるものなのか、自分のものなのか、よくわからなくなってくる。もしかして悠希さんもドキドキしてくれているのだろうか。

えっと。しかし、どう対応すれば。とりあえず仕事は休もうかな、職場に連絡を……、

「うおおおお!!!」

「オアアアア!!?」

ぐん、と僕の足が床から浮いたと思ったら、それどころか全身が浮いた。

全身への衝撃とともに、気が付くと僕は、ベッドに倒されていた。さっきの胴体を異次元に持っていられる感覚からすると、こう、抱え込んで投げ飛ばされたらしい。何しやがる!!

「いでえよお……うわっ!」

「ふふーん。マウントとった」

ぎし、と一人用のベッドが軋む。あろうことか、悠希さんは僕の上に跨ってきた。今はまだ腰のほうにいてお腹に手を乗せてきてるけど、もう少し位置が上がったら……、身動きできないまま好き放題タコ殴りにされる。怖い!

「な、何する気……?」

「なにつて。……」

びくびくしながら聞く。すると彼女は無言で、僕の上を這いあがってきた。そしてそのまま、顔を覗き込まれる。見上げた先から、カーテンのように、滝のように、長い髪が落ちてくる。

お互い、見つめ合ったまま、無言が続いた。

「……………えつ……………」

「……………心悟。……………本当にわかんない？ オレが、何考えてるか」

そんなことを言いながら、彼女は僕の鎖骨を指でなぞった。いつの間にか、友達としてふざけ合うときの雰囲気、今の彼女からは消えていた。悠希さんは、何かを待っている気がする。期待されている気がする。仕事を休んで、ベッドにふたりで入って。それは、つまり……………。

今までこういう状況になってもスルーしてきたけど、僕たちはもう恋人だ。……………だったら。

「悠希さん。ちょっと、起きてもいい？」

ひとつ決心して。相手をまっすぐ見て声をかけると、彼女は、こくん、と頷いた。

向かい合って座る形になる。僕は、ほんとにそうしていいのか迷って、でも勇気をだして、彼女の両肩をつかんだ。

びく、と震えが伝わってくる。悠希さんはしっかりした体型の人だと思っていたけ

ど、こうしてみると、肩は細く思えて。

彼女のが、初めて自分より繊細で弱弱しく見えて。ものすごく、いとおしかった。……それで。ここからどうしよう。

そうだ。さつき、童貞とキスなんてしません、とからかわれた。なんとも腹が立った。だから、その仕返しをしたい。悠希さんの、もつと弱った顔が見たい。

自分から行くのは、顔から火が出るくらい恥ずかしかつたけど。相手もそういう顔をしているのがわかったので、頑張つて、こつちから顔を近づけていく。

このほんの一瞬でお互い、ありえないくらい顔が赤くなつていて、体温が熱くなつていて。それは距離に反比例してどんどん高まつていって。この距離がゼロになったら、僕たちはどうなるんだろう。

悠希さんはこんなふうになつても、きれいだしかわいい。潤んできたその目をぎゅつと閉じたのを見て、こつちもそれに倣つた。鼻先が触れ合つて、相手の息が唇にかかつて。

それで、僕たちは――。

「わあああつ!! やっぱちよつと待つてつ!!」

ゴン、と殺人級の頭突きをされ、死んだ。いまあの世から悠希さんを見てるとこ。

介抱してもらったあとは、とりあえず会社を休んで作った時間で、僕はふてくされてゲームをしていた。

「なー、ごめんって」「へたれだと笑ってくれ」「女の側はしんどいって言うじゃん」「おい童貞」などと後ろから声を投げられるが、別に怒ったりはしていない。僕も奥手さでいったら似たようなものだ。ただ、ならば人の純潔をバカにするのをやめろと言いたい。自分だって童貞だろ絶対。

……………。なんて。

実のところ、こうしてふてくされているのも演技だ。結構いいところまでいきそうになつたせいで、少し血圧が上がっている。僕はいま、自分を落ち着ける時間を作っているだけだ。

次に同じことがあつたらいいよ理性をかなぐり捨てるだろう。さっきの悠希さん、かわいかったな。過去10年で最高と言われた高校2年生を上回るかわいさ（ボジョレーヌーボー）

ともかく、そのときのために、気持ちを大人の自分へと確実に切り替えようと、いまは準備をしているのだ。

逃げているとも言う。

しばらく没頭していると、隣に誰かが座った。それが誰かというのは自明のことで、

彼女は僕に寄りかかって、その重さを預けてきた。

すり、と体を擦りつけてくるのが猫みたい。しつぽの付け根でもとんとんしたら喜ぶだろうか。

「な、童貞。……童貞であつてるよな？ 変なところいつて捨てたりした？」

「セクハラ」

「……いいじゃん。オレも……オレも、そうだよ。同じ」

「そうでしょうね、女の子になったの小学生のときだし」

「違う、そつちの意味じゃなくてさ」

ひとつ間があく。わざとよそ見をしても、ほとんど距離のないところにいる彼女がすうはあと深呼吸をしているのは、簡単に伝わってしまう。

「あ、あのさ。心悟だったら、オレ……わたしは……」

大人になってからわかってきた、長峰悠希の一人称の使い方。『ユウキくんじゃないほう』のそれを使うときは……。

「普段はまあ氣イ遣つてくれてるの嬉しいんだけど……たまにだったら……ホント、たまにだったらな？ ……その」

言いにくいセリフを言おうとしているようだった。ゲームを遊ぶ手はとづくに止まっていて、耳に全神経を集中してしまっている自分がいた。

悠希さんの、熱い吐息が耳にかかる。それから、

本当の本当に初めて聞く、脳みそが溶けるくらいに、甘ったるい声でした。

「女扱いされても、いいよ」

フアーストキスはいつだったのか

その事件が起きたのは、休日の夜だ。

正確に言うなら、休日が始まる前の夜。いわゆる華の金曜日か。互いに二日以上の休みが取れるとき、悠希さんは僕の住んでいる部屋へとやってくる。一人部屋なので狭いのだが。

何をするのかというと、お酒を飲んだり、仕事の愚痴を叫んだり、ゲームしたり。時には今後のことを話し合うこともある。

その日は、彼女は、動画配信サービ스로見られる洋画をぼうつと眺めていた。ちなみにこいつ、僕が契約しているものをタダ見している。

僕には興味のない内容だったので、座椅子の背後に位置するベッドへ寝そべりながらウトウトしていた。たまに悠希さんの顔をちらりと見るくらい。

なお、座椅子はわざと、僕がベッドに横になったときに、座っている人間の顔が見える位置に置いている。

「ん」

悠希さんの小さい声がしたので、スマホから目を離しテレビのほうを見てみる。

顔のいい外国人の俳優たちが、やたらと濃厚なキスをしているところだった。

気まずいな。洋画のラブシーンによるお茶の間冷え冷え現象は、日本のどの家庭でも起こり得る。が、今の自分は子どもでもないし、ここには親も、すっかりリアクションしてしまいうアホの妹もない。いちいち気にすることではない……。

ないよな？

ちら。

気配を殺して悠希さんの様子を見る。

……特にどうといった様子もない。彼女は無表情で、つまんだスナック菓子をぼりぼり食べて、指を行儀悪く舐めた。

唇と、そこから小さく覗く赤い舌に、思わず目がいく。

「……………」

悠希さんは顔の向きを変えず、流し目で僕を見た。つまり、目が合った。なんにも悪いことはしていないのに、どき、と心臓がホップする。

こいつ、視線を察知する能力を身に着けているのか？ 身に着けてそう。

「何？」

「い、いや。別に」

「……………ああ、はいはい。オレらも接吻する？」

「うん……えっなんて? せつぷ?」

「びっびっと」

悠希さんは洋画を一時停止し、座椅子から立ち上がった。

咄嗟に危機感を覚える。こちらも体を起こし、立ち上がるうとすると、たくましい握力でしっかりと両肩を掴まれ、阻止された。

「んー」

そして悠希さんは目を閉じ、顔面を近づけてきた。

「ナツハツ、ハアン!?!」

美女の顔が近づいてくる。なんだこれは。

いいにおいがする。睫毛が長い。少しすぼめた唇は、触れ合うとどんな感触がするのか気になる。あと数秒でそれがわかってしまう。

そう、僕は悠希さんとキスなどしたことがない。正式に恋人になつてからまだ。いくら彼女が女性としての人生を受け入れていても、元は男友達だった僕と唇を合わせるなんてのは嫌なはず。そう考えて避けていたのだが。

なぜ向こうから!?! 酔っているようでもないし、きつかけもないし。

戸惑っているうちに、ついに、互いの鼻先が触れた。

「ま………待って」

「待たないよ」

「ぼ、僕初めて……初めてなのに！ もっとロマンチックなのがいい!!」

などと、突然のことに慌てた僕は、わけのわからないことを口走った。

途端、悠希さんは目を開け、眉根を寄せたイヤそうな顔になった。

至近距離の体温が離れていく。

「何キモいこと言ってるんだよ……相変わらず人を萎えさせる天才だな」

「す、すいやせん」

「ていうか別に初めてじゃないだろ」

「え？」

「え？」

……………。

沈黙ができる。

初めてじゃない？ キスが？ どういうことだ。僕にはそんなことをした記憶は

……………。

悠希さんはわかりやすい疑問顔で、僕をじつと見ている。

「………あるだろ？ 我々、チューしたこと」

「ないが……？」

「……あつ、あ！ あくくく、ハハ。なかつたつけね。アハハ」

そして不意に笑顔に変わった。あからさまに、何か不都合な事実をごまかすような笑い方だ。目つきがニチャつとしている。

それに悠希さんのあの、チューに持つていく流れの手慣れた感じ。ファーストキスの人間ができることではない。まるで既に経験しているかのようなチャラさ、あざとさ。

そんな、まさか。嘘だろ？

あつという間にある推測にたどり着き、僕はわなわなと震えた。

「まさか、他の男と……あるいは女と……？」

「はああああくく？ んなわけっ」

「イテッ」

べん、と体を押され、ごとと部屋の壁に頭をぶつける。死。僕はそのままベッドに横たわり、放心状態になった。

天井を見つめる。たまに視界に悠希さんの髪とかが入ってくる。

「ならば、どういうことなのだ一体……？」

「もういいじゃんその話は。覚えてないんだろ」

「覚え……何？ なんて？」

ちよつと待って、その言い方はつまり……。

「あく、うるさいうるさい。この話終わり。オワオワオワオワオワオワオワ終わり」

悠希さんは拳のラッシュで、ベッドに横たわる僕の全身を破壊した。雑なごまかしだった。

だがこんなことには屈さない。彼女は何かを隠している。必ず真相を暴いてやる。

「いま『真相を暴いてやる』とか考えただろ。無駄だぞ。暴かれるような真実などないのだから……」

ツンとした目つきで僕を見下ろした悠希さんは、いちいちさらりと髪をなびかせて映画っぽい言い回しをした。そして座椅子に戻り、映画を再生し始める。

「あれ？ どこからだっけ」などと言いながら巻き戻している。

そしてそのせいで、また例の濃厚なキスシーンが始まった。

気まずい！

▽ここから回想▽

「うへえ」

画面にキスシーンが流れて、つい声が出る。

あまり映画やドラマというものを見ないからか、こういうのはどうにも慣れない。

それとこの前、大学の女友達がしていた話も頭をよぎる。

わたしは、胸の中にある何かが浮いているような気分になって、それを解消したくて、後ろにいるはずの誰かに話しかけてみる。

「……あー、アメリカ？ の、こういうの？ 苦手なんだよなア」

話しかけてみる、といっても、出たのは独り言のようなもの。それでも何か返してくれるだろう。あわよくば、何か失言をしてくれれば、揚げ足を取っていじってやるつもりだ。

けれど、何も返ってこなかった。

ベッドを見る。狭い学生賃貸の部屋では、オレが座椅子を陣取ったときは、そこがあいつの席だからだ。

心悟は、寝ていた。

「……寝るなよ。つまんな」

同じ部屋にいるときにあっさり眠られるのは、それくらいには『友達』なんだろう、という嬉しさはある。

けれどやつぱり、起きて、話して、こつちを見てくれなきや。オレは別に、この映画をひとりで見えたかったわけじゃない。

腹が立ってきた。

何かいたずらでもしてやるべきだろう。二度と居眠りできなくなるようなキツイも

のも候補にいれる。

立ち上がり、ベッドに手をつけて、顔を覗き込んでやる。長い髪でくすぐらないように、それを耳にかける。

うん。見事に目を閉じ、ぐーすか寝ている。

鼻でもつまむか。顔に落書きでもするか。いやもつと斬新なものを。部屋の模様替えでもするか？ それか、寝ている間にこいつをベッドごと外に出してしまう。

想像し、思わず笑う。でもちよつと難しいかな。あと風邪ひいたら可哀想だし。

……こんなのはどうだろう。ズボンを脱がせて、こつちも薄着になって、横で寝る。そして朝になったら、「ワタシにあんなことをするなんて……」と泣いてみせる。

さすがにやめとくか、それは。男と同じベッドに一晚寝るなんて、嫌だしな、そんなの。ああ嫌だ。

ともかく。

この間抜け面を見ていると、あまりに隙だらけで、なんでもできそうだな。

「……………」

モニターに目をやると、適当に一時停止していた映画は、まだキスシーン。

大学の女友達がしていた話を、少し思い出す。彼氏とキスしたとか、ナニするところまでいったとか。明け透けなタイプの子が話していて、箱入りっぽい子が興味深げに聞

いていた。どうにも苦手な、くだらない話で、適当に聞き流したけど。
……ただ。気になりはする。

「それ」は、どんな感触なんだろう。たかだか唇同士触れ合わせるのが、そんなにいいものなのか。そんなに何回も、長いこと繰り返すくらいに？

女の子の柔らかかそうなやつが相手なら、したくなる気持ちもなんとなくわかるけど。あんな風に、男なんかと……。

あ。

微妙な気分になった。女性のほうに感情移入している自分に気付いたからだ。……
なにも別に、悪いことじゃないはずだけど。

「……はあ」

こうやっていくら考えたって、つまらない想像にふけることしかできない。
だったら、いつそのこと……。

「おーい。起きないと、さき……」

最後通牒、といった気分で話しかける。でもどうしてだろう、相手を起こそうとしていない、ひどく小さな声が出た。

いや。人間、これくらいでも起きるさ。だから、悪いのはこいつなんだ。起きないおまえが悪いんだ。

爆発しそうになって、胸の音が、相手を起こさないように。

わたしは、慎重に、慎重に。

いたずらをした。

「……………」

立ち上がる。

眠っている間、抜け面を見下ろしながら、うるさい胸を押さえる。胸を押さえた手は勝手に上がってきて、自分の唇を触る。

そこに残っている感触は――。

「忘れよう。帰ろ。……………ふんっ!」

帰り際、部屋の壁に頭突きをしたので、わたしはすべてを忘れることに成功した。

▽

「ウワアッ!? 何これ!?!」

悠希さんが遊びに来ていた翌朝。起床して外出の準備をしていたら、部屋の壁にひび割れができて、発見した。いったいなにが。

敷金が……………。

▽

「あ!! 悠希さん、見つけたぞこら、この野郎」

「へ？」

大学の帰り、ちやうど自分の部屋の前で鍵を開けようとしているとき、心悟に呼び止められた。

らしくない勢いでズンズン歩いてくる。近づいてくる。身長も体格ももうオレより大きい。走ってきたのだろうか、荒い息をしている。

「っ……………」

ずい、と顔を覗き込まれる。男友達にしては、距離が近い。

目を見返すと、少し怒っているように見えた。どうして。

…………どうしてもなにも。

バレたんだ。＼いたずら＼が。

「悠希さん」

「は、はい」

わたしは、何かが怖くて、あるいは何かを期待して、目をぎゅつと閉じる。相手の息遣いを感じて、その姿を想像する。心悟は、口を開いて――。

「壁にひび入れたでしょ。まったくもう！」

と言った。

「あ……………」

………。

なんだ。

そっちなか。

「前から破壊神だとは思ってたけど、まさかここまでやるとは。酔っぱらってたんじゃないの」

「ご、ごめん。てえ、誰が破壊神だつて？」

「そつ、そういうところが……」

少し落ち着いてきたら、今度はヘンなことを考えさせられてしまったことへの怒りがわいてきた。

拳をつくつてシュツシュとやると、心悟はおびえる。他愛のないやつめが。二度とオレに逆らうなよ。

おしおきに、このままデコピンの一発でも。そう思つて、手を伸ばした。すると、そのまま。

「手とか怪我してない？ 悠希さんとはいえ、あんなに強くぶつけたらさ」

心悟は、まるで少女漫画か古いラブロマンス映画みたいに、そつとこの手を取つてきた。

「えつ……と。いや、だ、だいじょぶ」

オレは手を引いて、後ろに隠した。今度は簡単にとられないように。熱を悟られないように。

今日はなんだ。ちよつと、おかしい。こいつ、こんなキザというか、チャライやつだつて。人の心臓を攻撃してくるようなやつだつて。

……もしかして。

おかしいのは、わたしのほうか。

▽

また、夜がきた。

「……………」

講義のせいとか、アルバイトのせいとか知らないが、今日も心悟は、一緒にいる途中で寝てしまった。

その、あまりに隙だらけな寝顔を見ていると。

心悟が起きて、こつちを見て、くだらない話をしてくれないと。

オレは、わたしになつてしまう。なつてもいいってことに、なつてしまう。

……………確めたい。もう一回。もう一回だけ。

男相手に——なんて、絶対にごめんだというオレが。こいつが相手なら、なんだつてできてしまうのか、どうか。

そのときの感触が、いいものなのか。いやなものなのか。

「ごめん、心悟……。その。あと、一回だけだから」

わたしはまた、落下していく。

▽

「あと一回だけ……」

▽

「あと、一回……」

▽

「心悟……あつ」

どき、と。悪事がばれたみたいに、心臓が飛び跳ねた。いや、まさしく悪事がばれたんだ。

心悟は目を開けていた。触れ合って、顔を離してすぐに、目を開けたのだ。

——起きた。あるいは、起きていた。何をしていたか、知られた。

ああ、駄目だ、駄目だ。

もしかしたらバレてもいいかな、なんて思ってたから、このいたずらを何回もした。

でも、やつぱり、バレちゃだめだったんだ。だっていま、こんなに怖くて、こんなに胸が締め付けられているんだから。

薄く開けられた目は、何を考えているかわからない。胸が、つめたいものに貫かれて
いるかのようで、このあとの言葉によっては、泣いてしまいそうだ。

「悠希……さん……」

「……あ、の。心悟。ごめん、オレ……わたし……」

「………の、胸。ふともも……」

「はっ」

たわごとを口にしながら、心悟は目を閉じていった。

………。

寝ている。

「そんなに触りたきや触れよ、もう……」

寝ているやつ腕を取り、ふにふにと脂肪の塊にあててやる。

「おお……おおう……おほおう……」

眠りながら気持ち悪い声をあげる心悟。

かなりむなしくなった。

そして、さすがに懲りた。もう、寝ている心悟をどうこうするのはやめよう。

暴走しすぎた。本当に起きてたら、きつともう、「オレ」と心悟は……終わってし

まった、かもしれない。

それは、やっぱり、怖い。

だから、もう、しばらくは……。

この、心地いい関係のままで、いたい。

▽～回想ここまで▽

「なんだその顔は？ さつきからしついこいなあ、もう。言っておくが、オレには不都合な隠し事などない」

怪しい……。

怪しすぎる……。

僕の勘は言っている。「こいつはやっている」と。何を？ 知らん。

ちよつとカマかけてみるか。

「いや、待てよ。そういえば高校生のとき……」

「……」

「じゃなくて、就職したあと……」

「……」

「ではなく、大学生のとき……」

「過ぎ去った日々なことなど振り返るんじゃない、小僧」

大学生のとき、彼女にキスに関する何かがあったようだ。

この調子で突き詰めていけば、何かボロを出すかも。

「大学生のときの話なんだけど」

「うるさい、だまれ。だまれだまれ」

「ガアアアアツ」

あごのあたりを掴まれ、ギリギリと万力のごとく締め付けられた。これ真剣にドメスティックバイオレンスでしょ。

と思ったら、そのまま指であごをつままれ、くい、と上げさせられる。視線の先には悠希さんの美しいお顔が。

「よし、わかった。……するぞ」

「あん？」

「k i s s を……する」

「……………k i s s ……を……!?!」

えっ、唇で黙らせる的な……?!

突然のことに頭が整理できないでいると、悠希さんは本当にベッドに上がり込んで、身体に触れてくる。

このように触れ合うこと自体は初めてではないが、正面から目と目を合わせ、顔を近

づけてくるとなると、これはもうたまらない。

「……心悟。目、閉じて……ううん。あけてて」

甘いささやき声が脳に染みる。

というか、何もかもを振り出しに戻された。悠希さんは、顔がいいことを自覚しているので、結局はこの一撃で、すべてをうやむやにできることをわかっているのだ。

くつ。だめだ、やはり顔が良すぎる。色気と可愛げがありすぎる。これではもう、僕は彼女を問い詰めることはできない。

悠希さんとキス……したい!! そうだ、実はしたかったのだ。だって悠希さんのことが好きなんだもの。

だが……ちよつと……ちよつと……!!

「待ってっ、だめっ……! は、歯磨きしてから……!」

そして、僕が乙女のような声を上げると、悠希さんは一瞬ですべての性欲を失った顔になった。

▽

お互い、狭い洗面所の中を行き交う。

僕は歯を磨くとき、洗面台の鏡に向かうが、悠希さんは磨きながらあちこちウロウロする場合がある。今みたいに同時に歯を磨き始めると、まあ確実にそうなる。

「あいあいあい、うしろ通るよ」

尻でつつか。

すれ違う際、互いの尻が部屋着ごしに擦れ合った。

剣士同士の戦いでは、一度斬り結んだのみで相手の実力を察することがあるという。いま、長峰の尻と一瞬対峙した僕の尻は、ただただで敗北を認めていた。存在感が、厚みが、重みが違う。尻相撲でもしようものなら、ただの一撃で別の惑星まで吹き飛ばされてしまうだろう。

と、どうでもいいことを考えながら歯ブラシを動かしていた。

「やがやが、はーか」

やがて、歯磨き粉まみれの口で後ろから話しかけられる。「邪魔邪魔、はやく」とでも言ったのかなと思う。

急かされながら、口をゆすいだ。

▽

ついに、準備が整った。

僕たちは、なぜか正座の姿勢で対面している。

出会いは男同士、友達同士だった僕と悠希さんは、いま、ついに何かの一線を越えるのではないか。そんなふうにも思ったりもする。

そして何より、悠希さんの唇はどんな感触がするのか。いわゆるキスの味というのはどういふものなのか。気になる。いい歳してこんなふうに興奮できるもんなんだ、というちよつとした気恥ずかしさもある。でも、対面の悠希さんも意外とこう、その、かわいい表情をしていて、そんな顔をしてくれるんだ、つて思うとにやけてしまいそうだ。

「じゃ、じゃあ……」

「……おう」

僕たちは、互いに触れ、優しく、しかし離さないようにつかんで。

まだ学生であるみたい、たぶん子どもっぽく、短いのか長いのかわからないくらいの時間、

唇同士をくつつけてみた。

……!!!

こ、これは!!!

顔を離す。ちゅ、と少しいやらしい音がした気がする。確かな感覚と温度が、そこには残っている。

一番好きなひととの甘いひととき、通過儀礼のひとつを終え。

きつとより深い絆で結ばれた僕と悠希さんは、同時につぶやいた。

『歯磨き粉の味しかしい……』

夏休み水着回と夏休み水着回

▽高校一年生の夏

「熱っ」

小学生以来、久々にやってきた砂浜は、まず砂がやたら熱くてひっくり返りそうになった。サンダルは脱がないのが正解だった。

ここはとある小さな海水浴場。

世間はまだぎりぎり夏休み期間であり、やはり人がそれなりにいた。とはいえ地方の穴場ビーチであるので、夏の全国ニュースで見えるような人混みではない。

日差しと灼熱の砂にやられ、キレそうになりながら、みんなの荷物を運ぶ。全然話したことのない何かの部活の先生に教わって、ビーチパラソルなんかを立てる。

今日はなんと、全然知らん先生の引率で、あまり話したことのないクラスメイトの女子たちと、ビーチパーティー（多分、ビーチでやるパーティーのこと）に来ているのだ。男子は僕一人。こんなことは初めてで、まったく夢のような話だと思う。まるでハーレムものの主人公みたいだ。

アツハツハツハ。

長峰悠希に無理やり連れて来られただけなのだった。女子たちとうまく話せるわけでもなく、海もあまり好きではなく、普通に帰りたい。

しかしここまで来たらそうもいかない。せいぜい荷物持ちや雑用係でもして、女子からの点数稼ぎでもするしかないだろう。

一時、先生にその場を任せられ、パラソルの陰で涼みながら人々の姿を見てみると、視界の端に華やかなグループが入ってきた。ああ、水着に着替えてきた女子たちだ。

普段は教室で制服姿しか見たことのない女の子たちの、肩とかお腹とか脚とか見える大胆な姿……。どうにも刺激的だ。じろじろ見てしまうのを我慢したいのだが、むむむ。

「八代さん、いいな」

特に、クラスで二番目に可愛い八代さんの水着が良かった。口に出るほど。

「ほほう。ああいうのが好きか」

「うん……アツ」

すぐ後ろから、きれいで涼やかな音色の声。

心地よい美声を耳にし、しかし僕は背筋をぞくりと冷やした。返事をしてはいけないタイプの怪異に返事をしてしまったような感じ。

そういうえば、グループの中にいるはずの、一番目立つ女がいない。そしてそいつは今、

僕の背後にいる……!

「いや、わかる、わかるよお。確かに八代さんはかわいい。水着も似合う。オレから見てもそう思う。一緒に水泳の授業とか受けるしね? 羨ましいだろ」

「痛^{いた}——」

肩をぽんと優しく叩かれ、骨が砕け散りそうになった。きつと人間社会に出てきたばかりで、力加減というものを知らないのだろう。

高校生になってから初めての夏。つまりは長峰さんの中身がユウキくんだと知ってから、三か月くらい。

憧れの学園のアイドルが、まるで旧来の男友達のように肩を叩いてくる姿や態度、そして見た目から想像できない怪力には、慣れるまであともう少しかかりそうだった。

「でもその憧れの気持ちは、高校生活中は諦めてもらうしかありませんね。ごめんなさい、野原くん」

「いえ……」

「かわいそうにねえ」

ふう、というため息と声色から、僕の背後でお嬢様のように頬に手を当てる仕草をしている姿が想像できる。いやお前のせいだろ。

そう、なんと僕は、高校在学中という大事な青春の時期に、女の子を好きになったり、

彼女をつくつたりということができない。許されていないのだ。

それもこれも、この女……いや男。長峰悠希が、僕を彼氏という体の男除けに任命したからだ。

かように、ユウキくんはひどいヤツである。このような状況にある僕を、女子だけの海水浴に連れてくる……なんてのは、実に残酷ないじめではなからうか。

嫌味の一つでもぶつけてやろうかと思ひ、僕は振り向いた。

「そう言う君は、かつ……アツ、アツ……」

するとそこには、八代さんの比ではない美少女がいたので、息が詰まった。

長峰悠希は、おしやれな水着を着ているわけではなく、Tシャツにシヨートパンツというシンブルな恰好をしていた。が、あまりに健康的な体つきであるため、どうしてもいろんなところに目がいく。

そして何より、か、かわいい。顔が。分かりきっていることだが、この人見た目だけは本当に100点満点だ。

「ん？」

ユウキくと目が合う。なるべく直視しないように目を逸らす、ちらちらと見てしまう。相手の表情が訝しげなものから、徐々にやんちゃなイジメっ子のそれに変わっていくのが、わかってしまった。

「……あく、そっかあ。ふーん。なんだおまえ、そんな顔しているの？ 幼馴染の男に向かつてさ」

にやつきながら、蔑むような、見透かすような目を投げかけてくる。

「そうだ。一応シャツの下、水着なんだけど。……ひひ、見たい？」

ユウキくんはシャツの襟に指をかけ、やや前かがみになって僕を見上げる。煽りすぎだろ。

ていうか、み、水着？ クラスで一番でかい長峰悠希の？ この布一枚の下に？

想像するだけで顔の奥がツンとしてくる。思わず、頷きそうに……、

「ばあくか。一生見せないね、おまえには」

けらけらと笑い、ユウキくんは胸元を隠した。

クソ……!!! こいつ……!!!

「ふん。鼻の下伸ばした罰に、ジュースでも買ってこいや」

「……了解ッス」

そしてノリノリで煽っておきながら、つんとした態度に早変わりし、僕に無慈悲な命令を下す。

多分、僕が長峰さんの女性的な見た目にまんまと釣られてしまうことは、ユウキくん的にマイナスポイントなんだろう。めんどくさい人だ。

そりゃあ普段は僕も、『長峰悠希』への憧れは態度に出ないよう努めているのだが。

…………… こういうのはさすがに、向こうも卑怯というか。見た目の良さを自覚してるくせにな。

なんてことを考えつつ、ユウキくとまた目が合う。たつぷり2秒くらい。それで、もしかしたら自分が、恨みがましい目つきで相手を睨んでいるかもしれないことに気が付いた。

ごまかすべく口を開く。

「……………ごめんうそ、やっぱりオレも」

「じゃあちよつと自販機行つて——ごめんなさい、どうぞ」

発言の瞬間が被つてしまった。『ごめん』と聞こえた気がするが……………ユウキくんの口から？ いやまさかな。

「いや、別に。さっさと行けば」

ちよつと冷たい、さらつとした態度と言葉を受け、舍弟センサーをピンピンに立ててユウキくんの機嫌をうかがう。

……………特にプラスでもマイナスでもないような雰囲気だ、と思う。

それで言う通りにして、近くにある自動販売機へと出発することにした。荷物番はユウキくんを引き継ぐ。

いやパラソルから出たら暑っつ。

砂浜から出てしばし歩くと、飲み物の自販機があった。

ラインナップは大体ぜんぶ130円だ。これを高いと捉えるか安いと捉えるかは、その人の思う自販機価格設定のイメージによると思うが、僕は……高いと思いますね。

しぶしぶ財布から130円を出し、入れる。

腕を組み、頭に長峰悠希の顔を思い浮かべる。

うーん。

……。

……。

やっぱりあのシャツの下、水着なんだろうか……。

「えっ」

び、がたん。

という、目の前の箱から飲み物が出てくる一連の音。こっちはまだ何も押していないのに。

すぐ横から白い手が伸びてきて、たくさんあるボタンのひとつを押していた。長くてきれいな指だ。

「あれっ、なんで」

「はい」

「あ、ど、どうも」

なぜかいる長峰悠希は、剛力でそつとこちらの手を取り、そこに小銭をたくさん乗せてきた。130円はどう見ても超えている。これはもう大銭おおぜにと言つていいだろう。

「えつ荷物番は？」

「お願いしたら先生が代わつてくれた、よつ、と」

彼は隣にやつてきて、身をかがめて、取り出し口に手を突つ込んでいる。彼女の髪と汗のにおいがした。

手渡されたお金と、目の前の美少女顔を見比べる。長峰悠希はさつそくジュース缶を開け、ぐいつとあおっている。ごく、ごく、と音が割としつかり聞こえ、出っ張りのないう白いのが、動いているのが見えた。

あと、お金はジュース5本分ぐらいあつた。

「ふは。……何？ ああ、適当にスポーツドリンクとかでいいんじゃない。5本」

「そんなに飲むの？」

「はっ？」

わかりやすい疑問顔。何か話が食い違っているらしい。そしてそこからユウキくんは、こちらを軽蔑するような、じとりとした目つきに変わつていった。

「いや、みんなの分も買うんだよ。気が利かないんだなお前……」

この言葉は野原にとつてはショックだった。

「え、ユウキくんに言われた……」

「はあ〜?」

「なんでもありません」

べきや、とジューズの缶が握りつぶされる。あれは僕の数秒後の姿だ。

けっこう痛い指摘を受け、反省する。たしかにわざわざここまで来たなら、他の女子たちと先生の分も買っていくのが良い。

ユウキくんこんなことを教わるなんて。あんなに傍若無人だったのに。いや現在進行形でそうなのに。くっ、屈辱だ。

お金を勘定しながら、自動販売機に向き直る。

「えっと、130円かけるの5人分……あれ。あの、ユウキくんの分もらつてないけど」

「ん?」

「ん?」

再度ユウキくと顔を合わせる。

彼は少しの間をあげたあと、なんだか神妙な顔つきを作った。

「なーあ? オレとお前の関係はなんだった? 言ってみなさいよ」

「ええと。と、友達」

「うん。あついやそうでなく」

えっ違うの。

「カノジヨだ、カノジヨ。お忘れですか？　そして彼氏と彼女が一緒にいるとき、金は常に彼氏が出すもの。心悟の金は悠希のもの……。世界的な常識では？」

「そんなことはないが……？」

そういう流れで、ユウキくんの分は僕が、他のみんなの分は長峰さんが出したのだつた。

なんかおかしいような……。余分な工程があるような……。

▽

午後は、恐れ多くも女子たちの慈悲により、浜辺や海の浅いところでのボール遊びやらなにやらの、定番の遊びに混ぜてもらったりしていた。

のだが、普通に熱中症っぽくなって一抜けした。なんとなくだが頭がくらくらする。皆なぜあんなに元気なんだ……。

先生に様子を見てもらってから、デカイパラソルの下で寝転がって休むことに。例によつて荷物番係も兼ねる。やつぱ外で遊ぶのはあれだ、パワーがいるな。

そうして横になってから、パラソルの裏を見るのにも飽きて、しばらく目を瞑ってみ

る。

かすかだが、波の音が聴こえたりした。風情があるね。それに、近くから海水のにおいもしてきた。

頬に、すべつと、つやつとした感触。

「!?」

「あ、悪い。顔とか熱くなってるのかわかって、思つて」

すぐそばに、長峰さんが座っていた。

身体を起こす。

「寝てていいって」

「でも」

「むしろ寝ろよ。あと、介抱してるフリでもしないと、ほら」

真顔から、急ににこやかな笑顔をつくり、長峰さんはどこかへふりふりと手を振つた。

すぐそこで遊んでいるみんなに向かつてだった。彼氏彼女の関係であることをアピール、ということか。

はあ。いいな。僕も長峰さんににこやかな笑顔で手を振られたりしてみたい。たまには。

しかし作り笑いがうまいな。役者だ。

「みんなが見てるし、膝枕でもしてやろうか」

「えっ」

「ジョーダンだよ。……何その顔。本当にやってほしい感じ？ キモ」

「口が悪すぎる」

それは、やってほしいに決まってるだろ。ユウキくんにはやらないぞ、長峰さんにだ。

「……………」

しばし間があく。わざわざ隣に来てくれたものの、ユウキくんとの会話は、今日はあまり続かない。学校と同じで、みんなの目があるからだろうか。

「あー。その。しかし、症状と言えるほどのものもないし、ユウキくん……長峰さんも、みんなと遊んでくれれば？ 退屈でしょ」

せっかくの夏休み、海。わんぱくクソガキのユウキくんなら72時間ほどは遊び続けられるはずだ。元気に飛び出していけばいい。

「いや、ここにいとく」

「お気遣いなく」

「別にそんなんじゃない。ずっとあっちのメンバーというよりは、オレは心悟と……、

……………」

「心悟と？」

「……………」

「……心悟と？ 3DSで？ ゲームを？」

「なんでだよ。ほんとインドアだなおまえ。まあその、日陰で涼みたいんだよ」

「そうなんだ」

「そうなの」

やはり会話は長く続かない。

目を瞑ると、静かな波の音と、すぐそばから海の匂いがする。

▽

夕ご飯は、近くのスペースを借りてのバーベキューだった。ユウキくんはきつと牛肉を踊り食いしながら焼きそばを浴び食べるのだろうな、と思われたが、女子たちと談笑しながら、小さな口でもそもそと食べているだけだった。

だが僕は様子をずっと観察し、ヤツが一度に皿に取る量、口に運ぶ量は少ないものの、それを間断なく続けることで実は他の女子よりたくさん食べていることを看破したのだった。

やはりな。お上品ぶつた小食であんなに育つはずがない。

「野原くん。ずっと長峰さんのこと見てるね」

「はっ？ 詳しいや、そんなはずは……」

隣のイスに、八代さんが自然に腰掛けてきた。あまりに自然過ぎて近づかれたことに気が付かなかつた。意識の隙を突く攻撃。

うおつ、水着からは着替えているとはいえ、まだまだ薄着だ。しかもなんか良い匂いする。女子の匂いが……！

しばらく、八代さんが振ってくれる話題に、はははと笑って返す。よし、クラスのカースト上位女子と淀みない会話ができている。僕はすごい。夏が男を強くする。

「あつ、長峰さんこっち見てる。これは警戒、いや嫉妬されていると見た。なんと可愛い子なのか……」

「ははは」

「ちよつと退散するかな。あ、ごめんね、ジュース持ってきたのに、ぬるくなっちゃってるかも……。一応、はい」

「ありがとう」

「じゃね」

そう言つて立ち上がり、八代さんは僕に向かって微笑み、向こうへ行つた。

八代さんって僕のこと好きなんじゃないか？

しかし感動しちゃう。会話の内容といい、何気ない仕草といい、あれこそが真のクラスのマドンナムーブなのだ。八代さん、きつと中学までは学校で一番モテていたに違い

ない。

ユウキくんのキャラづくりはやっぱりやり過ぎだね。あんなすべてが完璧な女子、現実にはいないからね。リアリティがない。皆はいると信じているのだが。

などと考えていると。

どかつ、と隣に乱暴に座る影。

胸の下で腕組みして、じろつ、と僕を見ている。

ハア、やれやれ、これだからユウキくんはね。見た目は一等賞でも内面の粗暴さが、女性慣れしている僕にはお見通しなんだよね。

「おまえ、八代さんいい匂いするくみたいなこと考えてただろ」

「はんつ、は、はあああ？ そんな、そんなわけないが」

ありもしないイチヤモンをつけられ、僕は毅然とした態度で反論した。

「制汗剤の香りだからな、それ」

「あつ……そうなんだ……」

「……………」

「いや知らんけど、そんな、においとか」

「やっぱりな」みたいな侮蔑の目で見られる。

というか匂いどうのこの話をするなら、長峰悠希だって、普段からその、女子っ

ぼい香りが……。

口が裂けても言えない。

「これだから童貞は」

「童貞じゃない」

「反射で嘘をつくな。……お！」

バーベキューの片付けもまだなのに、女子たちがあるものを引つ張り出してきて、先生に軽く怒られている。

それを見て僕も、ああ、と思った。そうか、夏の一日の締めと言えば、手持ち花火だ。

▽

ちようど日が暮れて、暗くなった時間。

色とりどりの火花を吹かすそれを振り回して、ハリーポッターとかなんとか言いながら、女子たちがききやつきやしている。

いい絵だ。僕さえこの場から消えれば、彼女たちの夏の一場面は完全な絵だったものを。まったく長峰ときたらよ。何を考えているんだか。

女子たちと素直に楽しめばいいのに。美しく、短く、熱い夏をよ。熱つ。

「アツツツツチ!!!」

「あ、ごめんなさーい野原くん」

肌への刺激に飛びのく。

見れば、魔法の火を放ち続ける杖を、ユウキの野郎が僕に向けていた。人に向けてはいけませんって習わなかったか？（※人に向けてはいけません）

離れようとする僕を、ニヤニヤしながらそのまま追いかけてくる。徐々に小走りになると、向こうも走って追いかけてくる。花火が切れたら、補充してまたやってくる。

来るなクソボケが！ 何笑ってんだ!! みんなの前でのキヤラはどうしたんだ!!

「最近わかってきたけど、悠希ちゃんってやつばああいうキヤラだよな」

「彼氏と仲いいよな」

挙句の果てには、ロケット花火を僕のほう向かって飛ばしてきた。けらけら笑っている顔が憎たらしい。知らんのかお前、これマジで危ないんだが。先生は何してんの？

小学生のときからなんにも成長してないなこいつ！

ひゅううう、とすぐ耳のそばを通り抜けていったときにはユウキくんにキレそうになった。でも、サツと表情を変えて「ごめん、大丈夫だった？」と本気の声色で心配してきただので、キレられなかった。二重人格なの？

それとも、高校生になって少しは人間の心を得たのか……？

花火をあらかた使い終わると、線香花火が最後に残った。なんでいつも、最後のあた

りにこれが残るんだろう。

女子たちがしやがんで、ぱちぱちと瞬くそれを見つめている……のを、輪の外から眺めていると。となりにユウキくんがやってくる。

僕から声をかけた。

「きみはやらないの」

「あー。……線香花火って、面白くないし」

「えー」

顔をこつちに寄せてきて、可愛くて綺麗な声を小さく抑えて、クソガキのようなことを言う。

この風情がわからないとは、やはりユウキくんは小学生メンタルのままに違いない。

まあ僕もあんまり、線香花火の魅力はわからないのだが。

「なあ。今日さ、楽しかった？」

今度は、ユウキくんから話題を振られる。

「んー」

どうかな。楽しくなくなはなかった……けど。

正直、また同じ機会があつても、気心知れた男友達とならともかく、女子グループのお邪魔虫にはもうなりたくない。つまりはあまり来たくない。女子見知り極まる。

なんと答えたものか迷いながら、ちら、と隣にいる人を見る。

「……オレは、楽しかったよ。また来ようぜ。いいだろ、心悟」

なんて言いながら、『につ』、という。

たぶん、僕だけが見ることのできるこの笑顔を、正面から喰らって、思わず「うん」と答えてしまったのだった。

▽

「ハロー」

日焼けギヤルだった。

夏休みの終盤、僕んちにやってきた長峰悠希は、日焼けしていた。

ちよつと上目遣い気味に見上げてくる顔も、ぷらぷらと小さく振っている手も、シヨートパンツから伸びている脚も、なかなかのこんがり具合。

そこにこの、人懐っこい笑みを足されると、小学生の頃の夏のユウキくんみたいで、急に懐かしくなる。

でもだがしかし、あの長峰さんが田舎のギヤルみたいに日焼けしている姿は、正直非常にこうなんというかエロ……アレで、心臓に悪かった。

とりあえずそれを表に出さないようにしよう。というか煩惱を弾き飛ばそう。そうさ、夏のユウキくんの日焼けなんて、ラーメンにのっている煮卵の色のようなもの。そ

ここに色気などない。食欲はそそられるが……。

「ごくりと喉を鳴らし、息を吸い、ひとすじの汗を首に感じながら、僕は口を開いた。焼けたね」

「そーなんだよ。油断してき。ちよつと学校の連中には見せられんなー、黒長峰は」
たしかに。刺激強いもんな。男子の何人か気絶すると思うね。

「そう、築いてきたイメージを保つためにも、この夏はこれ以上焼けない……。そこで今日は引きこもりの家に来てやったのだ。ほらどきたまえ、もてなしたまえ」
「どうぞで」

結局いつものように、僕の部屋に上がり込んでくるユウキくん。

ただ。

いつものように、ゲームしてるところを後ろから見ていると。ユウキくんが後ろ髪をぶわつと手で上げたりして。一瞬、肩とか、首のあたりに、ひも状の日焼けあとが見えたりして。

やはり刺激が強い。早く白長峰に戻ってほしい。

遅くとも、この夏休みの終わりには。

▽婚約後の夏休み

学生の諸君は知っているだろうか。大人になると夏休みはないし、あつても5日とかしかない。

カレンダーを見ながら貴重な夏季休暇の取得日を決め、家でだらだらする計画を立てていると、ヤツはよく通る声でこう言いだした。

「海に行きたい。久しぶりに」

「は？ 嫌だけど」

「行くの!! 行くつたら行くんだよお!!」

「グアアアアアア!!??」

夏のある日。僕は全身を粉々に破壊され、悠希さんと海に行くことになった。

しかも、高校生のときに行つた、あの海水浴場に行きたいらしい。本当の恋人同士になつてからというもの、わがままが加速している気がする。

いや違うな。最初から無敵の人間だったな。

「人がいないあの砂浜でさ。若いうちに水着着て、花火で遊んでさ。オレたちもう大人だから、金に飽かせて無限に花火買って行ってさあ」

「ガキの発想なんだよな」

数日後。

そうして、あのビーチにやってきた。

シチュエーションにこだわっている様子だったので、絶対に今後使わないだろうにわざわざビーチパラソルを購入し、砂浜に設置するなどした。レンタルでええやんと思つたのだが、買わされた。

日差しと砂浜の熱が形成するこの暑さは、果たして高校生のときと同じなのだろうか。

周りを見渡す。人の姿はいくらかあるが、やはり未だに穴場らしく、混んではない。まさにあのときのように、のびのびと遊べることだろう。

「心悟。これ脱ぎたいんだけど?」

背後から不満げな声。

「ダメ」

「そりゃ日焼けは気にしてるけどさ、今日はあついて。熱中症になるよこんなもん。昔とは夏の気温が違うのよ? 知らんの?」

「人目がなくなるまでダメだったらダメ！ パーカー着てて」

水着を着たいと言っていた悠希さんだが、こうして浜辺にやってきた今、その上から薄いパーカーを着てもらっている。長い髪を一本結びにして肩に流しているのが、かわいい。あと上着のすそから覗くふとももが眩しい。

「ラツシユガードな」

な、なんて？ 知らん。横文字のファツシユン用語は脳に入ってこない。

とにかく。これが高校生長峰だったならまだいい。だが、大人長峰の水着は、大衆の目にさらしたくない！

あと、実は僕も長峰悠希の水着をちゃんと見たことがないので、なんかこわい！

「あつい。じゃあアイス買おう、アイス」

了承し、連れ添って砂浜を歩き出す。たしかに、日差しの強さに関わらず、気温自体が暑い……気がする。

歩く。

こんな田舎だが、意外にも若者とすれ違う。水着姿の男性、女性。

ムツ！ ビキニを着た胸の大きい若い女性……！ こんな田舎で！

努めて見ないようにしたが、「はっ」と気が付くと、横にいる彼女が僕を蔑んだ目で見ていた。

「おまえさあ」

「い、いやほら……これは生理に基づいた悲しい習性というか……」

「わからんでもないけど、人にこんな格好きせといてそれはおかしいんじゃないの」

「はい……」

唇をとがらせる悠希さん。返す言葉もない。

「そもそも、いいか心悟。さつきおまえが見てた子のおっぱいと、オレのおっぱいや……勝負にもならぬというのが、わからんのかっ!」

「あなたもう飲んでます?」

急に頭の悪いことを言い、パーカーに守られた胸をどんと叩く悠希さん。顔が赤いのは、言いながら恥ずかしくなったのだろう。

「いま変なこと言って恥ずかしくなってるでしょ」

そして僕は素直な正直者なので、それを指摘した。

「うるさいよ。……ええい、見ろ! これが夏だ!!」

何?! 悠希さんはパーカーのチャックをじじと下ろし始めた。

や、やめろー!

思わず目を覆う。

そしてすぐに、ちら、と様子をうかがう。

ファスナーが開いてお腹のへそが見えた。視線をのぼらせていく。そして、なんかヒラヒラがついてる黒い水着に包まれた乳が、出てきた。

「!!」

僕は固まった。当然だろう。脳も固まっている。いま、乳の事しか考えられない。

乳を出したあと、悠希さんは急に何も言わなくなった。目を伏せ、上着のポケットに手をつっ込んで、しかしちらちらと僕を見上げてくる。

ふん……。

何が水着だ、何が夏だ。ただパーカーをへそが出るまで開けて、乳が出てきただけではないか。

こんなもの……。

……え……、

エロい!! どう考えてもエロ!!

僕は熱い砂浜に膝をつき、そして手をついた。頭がくらくらする。

「ど、どうした」

「いや……ちよつと刺激が強すぎて……」

「そ、そうかな。結構おとなしめの選んだんだけど。上着も脱いだわけじゃないじゃんか」

そういうギリギリ砂浜のちよつと外まではうろつけそうな恰好のほうが逆にこうパツと見は服着てる感じなのにお腹とか胸元とか脚の付け根見えてるしやはりそもそもビーチで着るものなだけあつて長乳（長峰の乳の略）が強調されているので危険というか……。

地面を見つめ、煩惱を消す。

いや……無理だ。もう悠希さんの足見るだけでさっきの姿を想像してしまう。網膜に焼き付いているのだ。

「あ？ 今変なこち考えてるだろ。ドスケベが。……まあ、いいけど」

高校生のときは表情で何考えてるか読まれてたけど、最近は顔も見ないで何考えてるかバレるようになって怖い。どういうこと？

▽

例によつて熱中症っぽくなり、怖いので日陰で横になる。

海で少し遊んだからか、すぐそばに座った悠希さんからは、そういう香りがする。

あつなんかいま、僕の頭の位置から見上げると、白い脚とふとももが、胸が、すごい。そういうえば、高校生のときも似たようなことがあつて、似たようなことを想つたな。

ほんとに、あれからずっと、悠希さんは綺麗なままだな。

「公共の場でじろじろ見るなよ」

悠希さんが冷ややかな目つきで見下ろしていた。

「それとも何か? ……膝枕でもしてほしい? してあげようか」

えっ。昔はここで、キモいとか言ってたような。

「連れ出したのはこつちだしな。特別に甘やかしてあげよう、さーあどうぞ」

「……………いい、いや。公共の場なんで」

「あらそう。よく我慢できましたねえ、偉い」

それから悠希さんは、地面に手をつけて、僕の顔を覗き込んできた。目を妖しく細めている。ささやき声で話しかけてくる。

「帰ったらしてやるよ、ひざまくら。お前、オレの脚…………ふとももが好きなんだろ」

「嫌いだが…………」

「反射で嘘をつくな。昔からいつも舐めまわすように見てただろ? あーいやらしいんだ」

バカな…………。

ちよつとやらしい感じの表情と声で迫ってくる悠希さんと、その氣づいてました発言におののいていると、彼女は不意にくすぐすとおかしそうに笑った。

人をおちよくるのが好きだな、この女は。

ところで本当に膝枕をしてもらえるのだろうか。

▽

約束通り、日が暮れてからは、手持ち花火をやる。

夏の風物詩のひとつだと思うが、思い返せばもうとんと見ていない。大人が手持ち花火をやる機会なんてなかなかない。親戚の子どもが遊びに来たり、あるいは自分に子どもがいたりでもしないと。

だから、それは久しぶりの機会だったのだけ。

金に飽かせて大量に買った花火は消費しきれず、結局、近くにいた家族連れに配った。りした。

浜辺とそうでないところを隔てる石階段に腰を下ろし、休んでいると、悠希さんがとなりに座ってきた。狭い。尻デカいし。肩幅も4メートルぐらいあるし。

配った手持ち花火を、知らない子どもたちが楽しんでいる。こちらはその様子だけでも、結構楽しい。先生が花火を遊ばず、ただ見ているだけだった理由も、今ならわかる気がする。

悠希さんが話しかけてきた。

「いきなりですがクイズ。『大人になったらできること』とは、一体なんでしょう。具体例を述べよ」

「? ……お酒が飲めるとか、そういう?」

「ぶっぶー。ちがーう」

悠希さんは笑って、肩がくつつくぐらいに寄り添ってきた。

「大人になると。……先生も、他の友達も。誰も見てないところで、ふたりだけで花火ができる」

そう言つて彼女は、後ろに隠していた線香花火を見せてきた。

大人になったら、火の扱いに注意する大人は自分なわけで、誰の監督も必要ない。

だから今ここにいるのは、僕と悠希さんだけだった。

線香花火がばちばちと瞬いている。不規則のように思える明滅がきれいで、最後にぼとりと残り火が落ちていくむなしげの様子も、じつと見ていられる。

ふと、悠希さんを見る。

すると、どうしてか彼女は僕を見ていて、目が合ってしまった。照れくさそうな苦笑いをされる。

花火に向き直る。

しばらくして、やっぱり、悠希さんを見る。

……線香花火は面白くない、とあの日言っていた悠希さんは、穏やかに微笑んで、それを見つめていた。

その顔も線香花火くらいには良くて、ぼうつと見ていると。すぐにまた、思い切り目

が合ってしまい、少し恥ずかしかった。

「オレの顔が好きなのはわかるけど、もったいないぞ。ほら、綺麗なのに」

そう言って彼女は線香花火を持ち上げる。

そして、にこ、と子どものように笑う。

「ほんと、綺麗だ」

「でしょ。……あ」

悠希さんは、いまだに人間の世界での力加減を知らない悲しきモンスターなので、ぽとりと火が落ちてしまう。

それを見て僕たちは、残念がるでもなく、なんだかおかしくなって笑った。

▽

「はー!!」

休日前の夜中。悠希の野郎が脱衣所に行ったと思ったら、突然水着になって戻ってきた。あの黒いなんかいい感じの水着である。強すぎるパワーを制御していた拘束具で

あるパーカーも無し。

雑誌の表紙の女の子のセクシーポーズを真似て、じやーんとか言いながら見せつけてくる。揺らすな！

「なっ、あっ、ハァンツ、ぬあっ」

「フ、その反応……やはり高評価のようだな。いや、まあ当然だな、もちろんわかっているとも、おまえがオレを好きすぎることは……」

やれやれ、みたいな顔。あと勝ち誇った態度。

そして悠希さんはドンと胸を叩き、ドヤ顔で宣言する。

「今日はこれで一晩過ごして、心悟が手を出してくるか出してこないかゲームをやりますー！」